

ISSN 0385—0285

# 沖繩県立博物館紀要

第 8 号

1982

沖繩県立博物館

上

## 序

このたび、当博物館の紀要第8号を刊行しました。

本年度は、5月に粟国島と渡名喜島で移動博物館を実施し、11月には、民芸品の里帰りとして、日本民藝館との共催で、特別展“沖縄の美”を開催しました。

さらに、その間に3つの企画展も実施したが、これらの諸行事の計画には、職員の常日頃の調査研究が基本になっていることは、いうまでもありません。

私は“博物館行き”という言葉は、最早過去のものであり、むしろ、博物館というところは“最新の情報を提供するところ”であると思っております。この事からしても、調査研究活動は、きわめて重要な分野であり、今後ともより充実したものへと努めていく所存であります。この紀要は職員が多忙な実務に追われながらまとめた成果の一部であります。

これが、本県の自然および歴史を知る一助にでもなれば、幸いと存じます。

なお、今回は、球陽研究会員の渡口真清氏からも玉稿をいただきました。厚く御礼を申し上げます。

昭和57年3月

館長 大城徳次郎

# 目 次

序	館長 大城徳次郎	
沖縄島第三紀島尻層産出のホホジロザメ属とアオザメ属の歯		
	……上野輝彌・大城逸朗	1
多和田真淳調査収集の考古資料（I）	多和田真淳・知念勇	9
「内検代廻」を読む	……渡口真清	37
試案・沖縄絵画史年表	……宮城篤正	41
琉球列島両生爬虫類文献目録（暫定）	……当山昌直	55
〈資料紹介〉		
「御書院御物帳」（沖縄県立博物館蔵）、「御座飾帳」（同）		
「御書院並南風御殿御床飾」（同）	……渡名喜 明	1

# 沖縄島第三紀島尻層産出のホホジロザメ属と アオザメ属の歯

★  
上野輝彌 大城逸朗

Tertiary Shark Teeth of *Carcharodon megalodon* and  
*Isurus benedini* from Shimajiri Formation in Okinawa-jima

★  
Teruya UYENO and Itsuro OSHIRO

琉球諸島から発見された軟骨魚類の化石としては北大東島 (Yabe and Sugiyama, 1935)、宮古島 (上野ほか, 1974a) および沖縄島の9地点 (上野ほか, 1974b) からの報告があるのみである。此の度、島尻層の3地点よりホホジロザメ属の *Carcharodon megalodon* 1個、およびアオザメ属の *Isurus benedini* 2個の化石が発見されたのでここに報告する。これらの化石はいずれも中新世～鮮新世の地層から主に発見されている種である。サメの歯の部分の名称は上野 (1975) によった。

本報告の作成に当たって、横浜国立大学の長谷川善和教授に種々御助言を頂いた。また、標本を提供していただいた安里進 (大阪在住)、平良正人 (豊見城在住)、山内平三郎の各氏に厚く御礼を申し上げる。本研究の完成に当って文部省科学研究費特定研究「古文化財」(研究代表者渡邊直経) の費用の一部により作成した比較標本を使用した。

軟骨魚綱 Chondrichthyes

ネズミザメ目 Lamniformes

ネズミザメ科 Lamnidae

ホホジロザメ属 *Carcharodon*

*Carcharodon megalodon* AGASSIZ, 1843

(図版1, A~B)

標本番号：沖縄県立博物館 OPM-GF194

採集者：安里 進

採集日：1977年8月

産地：沖縄県佐敷町佐敷 さしきうまぐすく 佐敷上城内 (図1)

海拔：35m

地層：島尻層群

時代：鮮新世

(★うえの てるや, 国立科学博物館 古生物第三研究室長, National Science Museum, Tokyo, 160)

(★★ おおしろ いつろう 県立博物館 主任学芸員, Okinawa Prefectural Museum, 903)

化石の採集地点は、佐敷上城と呼ばれている遺跡内である。地形的には、海拔150~160mの石灰岩舌地の南側斜面である。この一帯は、台地の南側に面した所が、ほぼ東西方向に亀裂崩壊をくり返し、そのため比高10~25mの垂直な崖を形成している。崩壊した粘土は、崖の基部で緩やかな斜面をつくり、さらに崩壊土は水を含みすべりだし、沖縄でも有数の地すべり地域に指定された所でもある。

地質は、琉球石灰岩層と島尻層群からなる。琉球石灰岩層は、厚さ12~13mで、島尻層群を不整合におおうキャップ・ロックとして発達している。島尻層群は、同層群の上部に相当する新里累層からなる。岩相は、暗灰褐色~暗灰色を示す砂質~シルト質岩を主とし、凝灰岩および浮石質凝灰岩を挟在する。化石は、浮遊性有孔虫や、きわめて保存のよい二枚貝や巻貝を多産し、浮石質凝灰岩層の上部からスギヤヒノキの仲間の植物遺体も産する。層厚およそ300mで、新里層の模式地となっている。

なお、化石には、シルト質粘土が付着していたため遺跡の遺物とは判断されない。

ここに報告する化石は右上顎の中央部か、それより少し前方に位置していたと思われる歯である。歯冠の咬頭頂を数ミリメートルと歯冠前端および後端の一部、歯根の大部分が欠損している(図版1, A~B)。歯冠長は外側面(唇側面)で約54mm, 内側面(舌側面)で約44mmである。歯冠幅は不明であるが歯冠厚は約13.1mmである。

前切縁中央部の鋸歯数は1cmに14箇, 後切縁中央部の鋸歯数は1cmに15箇である。前切縁はわずかに膨出し、後切縁は中央より基部にかけてわずかに湾入する。外側面は中央部がわずかに凹む。内側面は中央部にかけて盛り上っている。

本標本は中新世産の *Carcharodon megalodon* の典型的な歯とくらべると歯冠がうすく、外側面の凹みは、*Carcharodon sulcidens* Agassiz に似る。日本産ホホジロザメ属の諸時代における種とその変異に関しては現在研究中であるが、産出層が *Carcharodon megalodon* としては最も遅いものの一つであると言う点で興味深い。

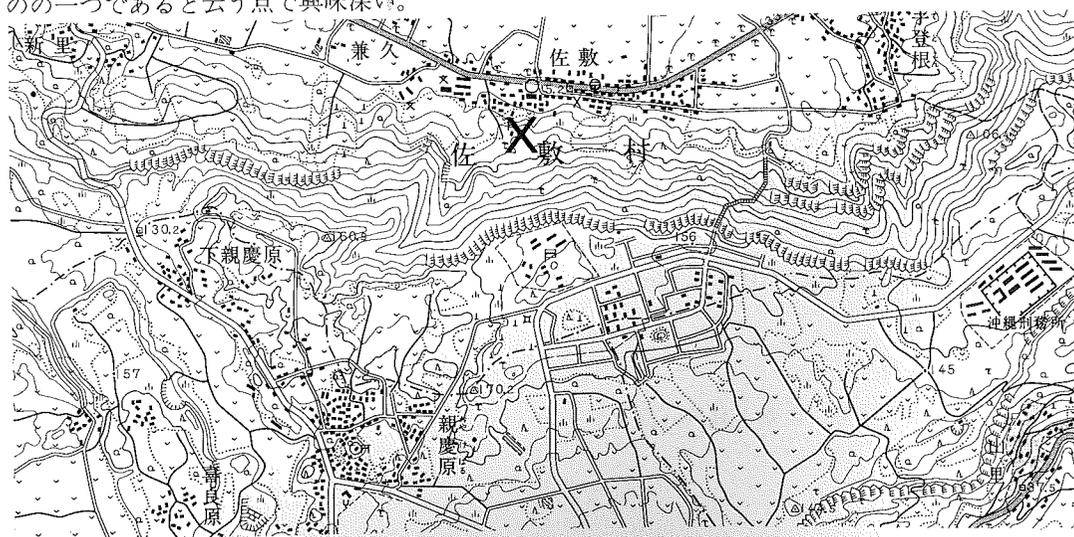


図1 ホホジロザメ属(OPM-GF 194)の化石産出地点付近の地図(×印)

(国土地理院発行1:25,000,「知念」を使用した)



本標本は左上顎の歯で、比較的前方に位置していたものようであるが、本種の標本は数が少なく、歯のセットとしての研究が完成していないので顎における確実な位置は不明である。

本標本は咬頭頂を数ミリメートルと後切縁基部をわずかに欠くのみでほとんど完全な個体である。外側面の歯冠長は約38.4mm、内側面の歯冠長は約31.2mmほどである。歯冠幅は38.5mmで、歯冠厚は12.4mm; 歯頸高6.2mm; 歯根幅45.0mm; 歯根厚16.0mmである。

本標本は歯冠が強く後方に弧を画いて傾斜しており、歯冠は厚く幅広い。外側面はほとんど扁平であるが歯冠基部付近に浅い溝と隆起がみられ、歯冠中央から咬頭頂にかけてわずかな隆起がある。切縁に鋸歯はなく刃のように鋭い。内側面は中央部にむかって厚く隆起する。歯根は内側面中央部で最も厚い(図版1, D~E)。

以上の形質により本標本をKuga(1979)に従いイスルス・ベネディニ *Isurus benedini* に同定する。本種のわが国における存在は久家によって初めて確認されたが、未だ記載されたもの、報告されたものはきわめて少なく、本標本は本種研究上重要なものである。

## *Isurus benedini* (Le Hon, 1871)

(図版1, F~G)

標本番号：沖縄玉泉洞観光株式会社 No.632

採集者：山内平三郎

採集日：1977年5月7日

産地：沖縄県玉城村前川 玉泉洞新洞内(図3)

海拔：約25m

地層：島尻層群

時代：中新世~鮮新世

玉泉洞は、玉泉洞ケイブシステムと呼ばれ玉城村前川と具志頭村宇新城に広がる大規模な洞穴群の一つである。同洞穴は、全長3600mで、接続洞穴を含めるとおよそ5000mとなり、わが国第2位の長さである。現在、そのうちの約800mを観光洞として公開している。

化石は、公開している洞穴の出口に近いところから、北へ約800mのびた新洞と呼ばれている支洞の約650m奥で発見された。洞穴群の海拔高度は30~35mで、化石採集地点の海拔高度はおよそ25mである。

洞穴は、琉球石灰岩層中の互層型石灰岩中に形成されている。即ち、この互層型石灰岩というのは、岩相は中~粗粒の有孔虫殻砂石灰岩で、この軟質な部分と、固結し緻密堅固になった部分が互層状になった岩相に対して名付けたものである。

なお、洞内の化石採集地点付近では、基盤の島尻層群が露出している。青灰色のシルト質粘土だが、洞外の露頭は数枚の凝灰岩を挟み島尻層群中の与那原累層に相当するものであることから、洞穴のものも同累層のものと判断できる。

化石は、洞内を流れる水流の底の軟らかい粘土中より採集した。

本標本はイスルス・ベネディニの右下顎の側歯だと思われる。歯冠は切縁の基部がわずかに欠損するのみでほとんど完全である。歯根は中央部を残すのみでその形は不明である。

歯冠長は外側面で44.6mm、内側面で36.4mmである。歯冠幅は31.0mm、歯冠厚は13.0mm。外側面は全体として扁平であるが、中央部から咬頭頂にかけてわずかに隆起する。歯冠の基部付近中央部には8本の浅い溝と1本のかなり深い溝がある。内側面は中央部にむかって高く盛り上り、歯厚がきわめて厚い。切縁には鋸歯がなくなめらかで鋭い刃となっている。

前述のOPM-GF195の標本に比較して歯冠幅が狭く、後方への湾曲度が小さい(図版1, F~G)。

## おわりに

今回報告した *Carcharodon megalodon* と *Isurus benedini* の標本はいずれも沖縄島の島尻層より発見されたものである。両種の確実な記録としては中新世~鮮新世初期のものが多い。両種とも絶滅して現在ではホホジロザメ *Carcharodon carcharias*, アメザメ *Isurus oxyrinchus*, バケアオザメ *Isurus paucus* とおきかわってしまっている。いずれも現生種は外洋性であるが、岸近くにも来遊する。現生種は化石種に比較すると小型化しており、ホホジロザメ属では鋸歯が粗く、外形は正三角形に近づく傾向にあり、アオザメ属の歯は歯冠や歯根の幅が狭くなる傾向がある。また *Isurus benedini* にみられるような歯冠の後方への強い湾曲は失われつつあるようである。

今回報告した3個の歯の標本はホホジロザメ属、アオザメ属の進化を考える上で、また沖縄島における軟骨魚相の変遷を考える上で貴重である。

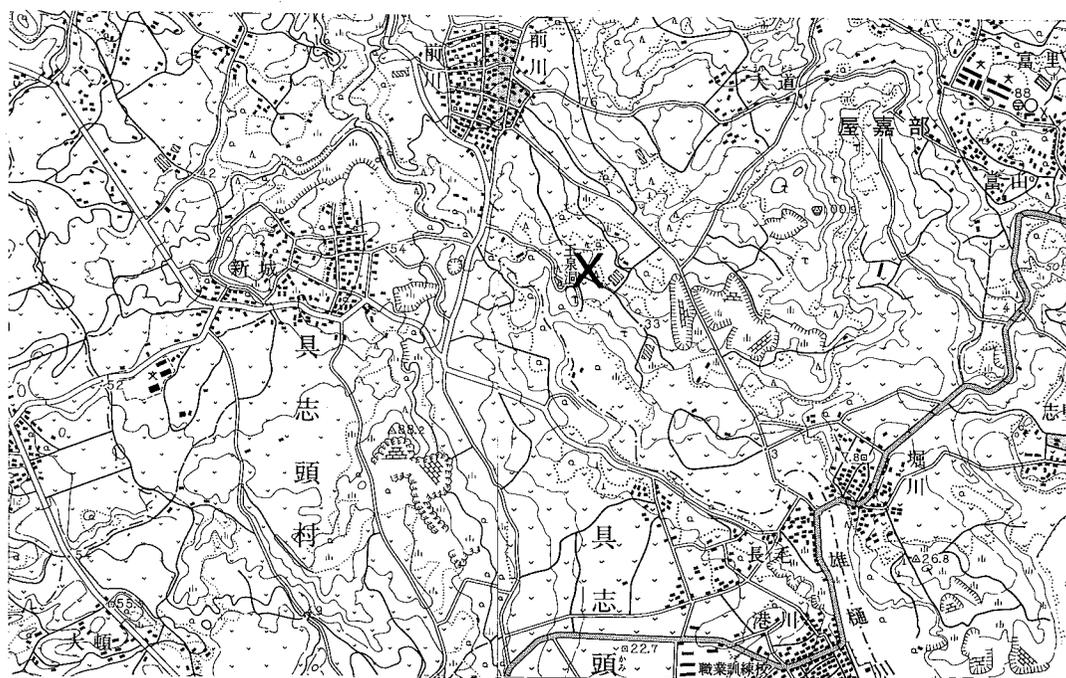
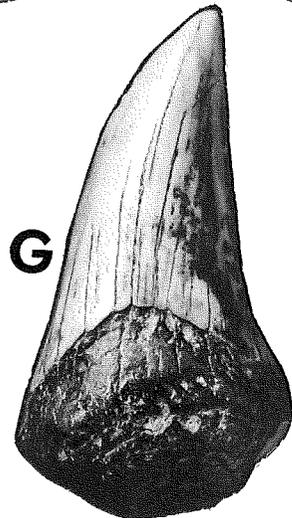
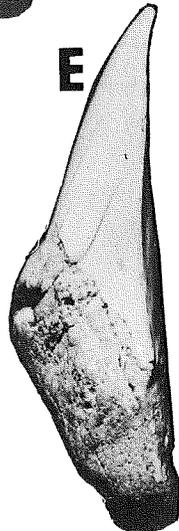
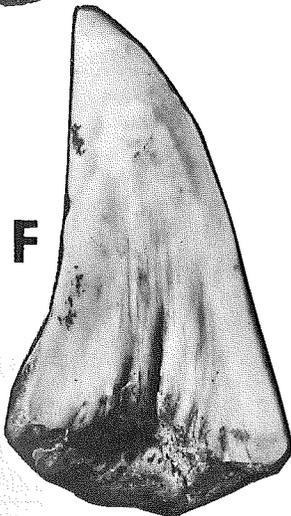
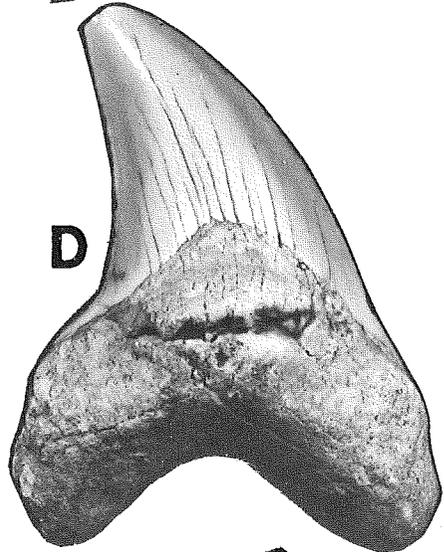
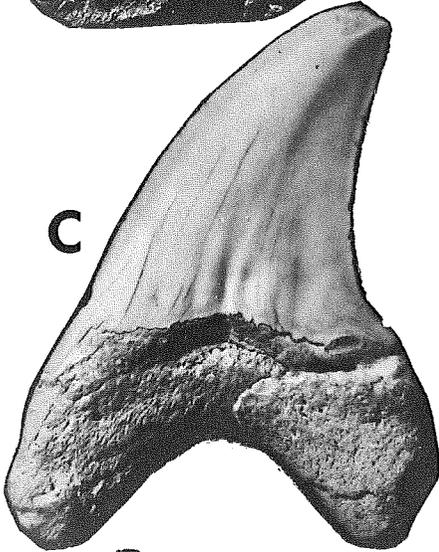
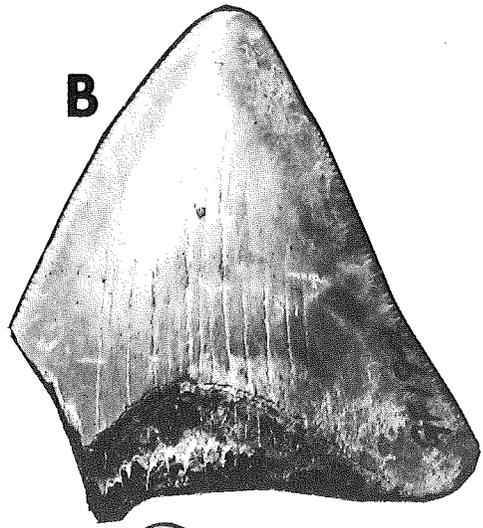
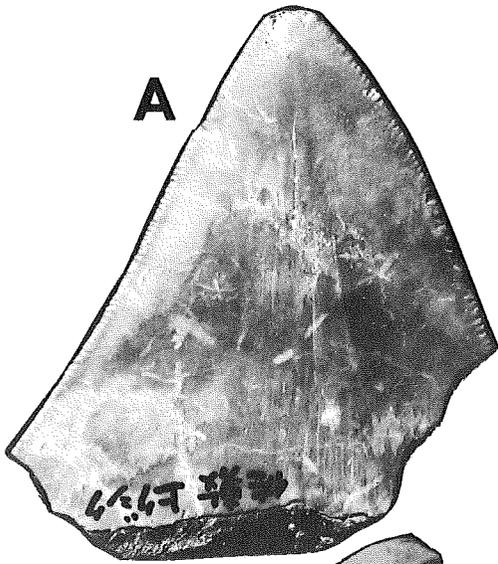


図3 アオザメ属(No.632)の化石産出地点付近の地図(×印)

(国土地理院発行1:25,000「糸満」知念」を使用した)

## 引用文献

- Kuga, Naoyuki.(1979)Revision of the Neogene *Isurus* from Japan, with special reference to the tooth morphology of Recent *Isurus*. 京都大学 理学部 修士論文 pp.1~84
- 上野輝彌, (1975) 魚類, 新版古生物学III (鹿間時夫編) 朝倉書店, pp.181~242。
- 上野輝彌・野原朝秀・長谷川善和, (1974) 沖縄島産魚類化石について。国立科博専報 (7) : 53~60, 図版7~8。
- 上野輝彌・長谷川善和・野原朝秀・安谷屋昭, (1974) 宮古島産古代鮫 *Carcharodon megalodon* の歯化石。国立科博専報 (7) : 61~64
- Yabe, H. and T.Sugiyama. (1935) Notes on a fossil shark's tooth found in the Daito limestone of Kita-Daito-Zima, Borodino Islands. Proc. Imp. Acad., 11(4) : 149—151



## 多和田真淳調査収集の考古資料(I)

★  
多和田真淳 知念 勇

### はじめに

昭和7年～同13年に収集した考古資料は、今次大戦で失ってしまった。その中にはすでに破壊された具志川市天願貝塚や沖縄市仲宗根第2貝塚の遺物などがあつた。今回紹介する資料は戦後に収集されたもので昭和48年12月に沖縄県立博物館に寄託した資料である。

県立博物館ではこれらの資料を整理して、昭和51年3月「特別展多和田真淳氏蔵考古資料展」を開催し、資料の一部を写真で紹介した。<sup>注1</sup>しかしそれは保管資料の一部であることや、実測図はなく、解説もないことなどから、研究資料としては充分活用できない状況にある。

本資料中には今日では得難たい貴重なものが多くあるため、正式な報告を望む声が多くあり、今回から紀要に紹介することにした。

同資料は第1表に示したように132遺跡で総点数1013点である。年1回の紀要に連載するだけでは長年を要することになるので、いずれ機会をみて、一括して報告したいと考えている。

いずれにしても今回の報告が長年未発表のままになっていた貴重な資料をまとめるきっかけになればさいわいである。

今回は (1)沖縄市八重島貝塚 (2)勝連町平安名貝塚 (3)具志川村大原貝塚の資料について報告する。

### 第1表 多和田真淳調査収集考古資料一覧表

(県立博物館寄託資料)

No.	遺 跡 名	出 土 地	遺 物	点数
1	伊波貝塚	石川市字伊波	土器・石器・貝製品・その他	97
2	八重島貝塚	沖縄市字八重島	土器・石器・骨製品・その他	65
3	百名貝塚	玉城村字百名	土器・石器・貝製品・その他	47
4	新原貝塚群	玉城村字新原	土器・貝製品・その他	14
5	久米島大原貝塚	具志川村字大原	土器・石器・その他	204
6	大山貝塚	宜野湾市字大山	土器・石器・貝製品・骨製品・その他	2056
7	平安名貝塚	勝連町字平安名	土器・石器・貝製品・骨製品・その他	337
8	屋那覇島遺跡	伊是名村字屋那覇島	土器・石器・貝製品	23
9	喜友名貝塚	宜野湾市字喜友名	土器・石器・その他	62
10	知花貝塚	沖縄市字知花	獣骨片	
11	宇佐浜(A)遺跡	国頭村字辺戸	土器・石器・その他	115

(★ たわだ しんじゅん 那覇市史編集委員)

(★★ ちねん いさむ 県立博物館学芸員)

No.	遺 跡 名	出 土 地	遺 物	
12	カヤウチバンタ貝塚	国頭村字宜名真	土器・石器・その他	168
13	与那嶺貝塚	今帰仁村字与那嶺	土器・石器	103
14	糸満市並里貝塚	糸満市字喜屋武	土器・石器・その他	179
15	仲田貝塚	伊是名村字仲田	土器・石器	13
16	牧港貝塚	浦添市字牧港	土器・石器・その他	366
17	運天（ブル溝）貝塚	今帰仁村字運天	土器・石器・その他	167
18	熱田貝塚	恩納村字熱田	土器・その他	131
19	仲尾次貝塚	今帰仁村字仲尾次	土器・その他	124
20	清水貝塚	具志川村字仲泊	土器・石器・その他	640
21	ウルル貝塚	” ”	土器・石器・その他	124
22	アカジャンガー貝塚	具志川市字金武湾	土器	13
23	アギギタラ貝塚	伊是名村字伊是名	土器・その他	30
24	具志原貝塚	伊江村字川平	土器・その他	80
25	野甫貝塚	伊平屋村字野甫	土器・その他	17
26	親畑貝塚	伊是名村具志川島	土器	23
27	宇堅貝塚（第2）	具志川市字宇堅	土器・石器	107
28	大浜貝塚	本部町字大浜	土器・その他	17
29	大あぶ洞隣り洞窟遺跡	勝連町字比嘉	土器	31
30	塩屋貝塚	恩納村字塩屋	土器・石器	61
31	川田原貝塚	糸満市字名城	土器・石器・その他	852
32	内花貝塚	伊是名村字内花	土器	73
33	東ガジナ原貝塚	伊平屋村字田名	土器	16
34	仲泊貝塚	恩納村字仲泊	土器・石器・その他	76
35	喜屋武貝塚	糸満市字喜屋武	土器・石器	27
36	渡嘉比久貝塚	渡嘉敷村字阿波連	土器・石器	23
37	ブシナ貝塚	恩納村字伊武部	土器	13
38	勢理客貝塚	伊是名村字勢理客	土器	73
39	久里原貝塚	伊平屋村字前泊	土器	99
40	東原貝塚	伊平屋村字田名	土器	22
41	伊是名貝塚	伊是名村字伊是名	土器	22
42	前川ガラガラ洞	玉城村字前川	土器	18
43	伊江島川平	伊江村字川平	土器	12
44	金武前の浜貝塚	金武町字金武	土器・その他	112
45	兼次古島貝塚	今帰仁村字兼次	土器・石器	152
46	アラダイバル貝塚		土器	15
47	アグンハミ貝塚	知念村字久高	土器	11
48	兼久原貝塚	本部町字崎本部	土器	6
49	浜比嘉竜の宮	勝連町字比嘉	土器	29
50	浜比嘉島	” ”	土器	11
51	浜比嘉天川洞穴	” ”	土器	9
52	浜比嘉三様洞	” ”	土器・須恵器	26

No.	遺 跡 名	出 土 地	遺 物	点数
53	ガラビ濠貝塚	具志頭村字具志頭	土器・その他	261
54	ガラビ濠西側畑の中	" "	土器	4
55	十柱洞遺跡	具志頭村字新城	土器・その他	8
56	金武湯屋洞穴	金武町字金武	土器	3
57	チビチリガマ	読谷村字波平	土器	2
58	金武洞穴遺跡	金武町字金武	土器・その他	77
59	玉城前川下流洞穴	玉城村字前川	土器	15
60	新城洞穴遺跡	具志頭村字新城	土器・石器・その他	86
61	久高島後生山遺跡	知念村字久高島	土器・その他	38
62	新原貝塚群（後期）	玉城村字新原	土器	16
63	具志頭グスク	具志頭村字具志頭	土器	28
64	具志川グスク	具志川市字具志川	土器・陶磁器	59
65	フエンサグスク	糸満市字名城	土器・須恵器・その他	226
66	魚下原遺跡	那覇市字繁多川	土器・その他	28
67	伊波グスク	石川市字伊波	土器・陶磁器・その他	47
68	江洲グスク	具志川市字江洲	土器・須恵器・陶磁器	32
69	越来グスク	沖繩市字越来	土器・須恵器	39
70	沢岨グスク	浦添市字沢岨	土器・須恵器・陶磁器	31
71	棚原グスク	西原町字棚原	須恵器・陶磁器	15
72	阿波根グスク	糸満市字阿波根	土器・須恵器・陶磁器・瓦	34
73	大城グスク	大里村字大城	陶磁器	17
74	大里グスク	大里村字西原	須恵器・陶磁器	5
75	南山グスク	糸満市字大里	土器・須恵器・陶磁器	16
76	中城グスク	中城村・北中城村	土器	9
77	知花グスク	沖繩市字知花	土器・陶磁器	5
78	勝連グスク下貝塚	勝連町字南風原	土器・陶磁器	35
79	伊祖グスク	浦添市字伊祖	土器・須恵器・瓦・陶磁器	171
80	浦添グスク	浦添市字仲間	土器・須恵器・瓦・陶磁器	42
81	首里グスク	那覇市首里当之蔵町	土器・須恵器・瓦・陶磁器	224
82	恩納グスク	恩納村字恩納	土器・陶磁器	29
83	嘉手納グスク	嘉手納町字嘉手納	土器・須恵器・陶磁器	11
84	仲間第一貝塚	竹富町字大富	獣骨・魚骨・海産貝	多量
85	仲間第二貝塚	" "	石器・貝錘	3
86	仲間部落貝塚	" "	土器・その他	15
87	船浦貝塚	竹富町字船浦	土器・陶磁器・その他	21
88	船浦古島遺跡	" "	土器・陶磁器	3
89	フルスト原貝塚	石垣市字大浜	土器	3
90	野底貝塚	石垣市字野底	土器	4
91	平得仲本御嶽遺跡	石垣市字平得	土器・陶磁器	17
92	前原保里遺跡	竹富町黒島	土器・陶磁器	2
93	ナカモト南野遺跡	" "	土器・陶磁器	4

No.	遺 跡 名	出 土 地	遺 物	点数
94	上原貝塚	竹富町字上原	土器・石器・陶磁器	13
95	大原洞窟遺跡	竹富町字大富	自然遺物	少量
96	山原貝塚	石垣市字真栄里	陶磁器	19
97	ニラスク貝塚	石垣市字新川	土器	8
98	平西貝塚	竹富町字古見	土器・貝錘・陶磁器	31
99	西表ユツソ向い遺跡	竹富町字高那	土器・陶磁器	5
100	大富新港川	竹富町字大富	土器・陶磁器	5
101	与那良遺跡	竹富町字与那良	土器・青磁	4
102	星野貝塚	石垣市字星野	土器・陶磁器	5
103	八重山農高西遺跡	石垣市字大川	土器・陶磁器	7
104	湾貝塚	奄美喜界島	土器	2
105	喜念貝塚	奄美・徳之島・伊仙村	土器	4
106	宇宿深道貝塚	奄美大島・笠利村	土器	41
107	面縄第一貝塚	奄美・徳之島・伊仙村	土器	20
108	面縄第二貝塚	" "	土器	18
109	久高ヤグル貝塚	知念村字久高	土器・石器	26
110	運天原サバヤ貝塚	名護市屋我地島運天原	土器・その他	45
111	野国貝塚	嘉手納町字野国	土器・石器・その他	311
112	久良波貝塚	恩納村字久良波	土器	8
113	トールガマ	金武町字漢名・漢名城下	土器・その他	96
114	高摩文仁	糸満市字摩文仁	土器・須恵器・陶磁器	22
115	伊計城	与那城村字伊計	土器・その他	69
116	大川グスク(屋良)	嘉手納町字屋良	土器	11
117	勝連中ノ嶽遺跡	勝連町字比嘉	土器・石器・その他	22
118	島尻貝塚(B)	伊平屋村字島尻	土器	12
119	具志堅・新里洞穴	本部町字具志堅	土器	46
120	浜比嘉大あぶ洞窟遺跡	勝連町字比嘉	土器	27
121	勢理客C貝塚	伊是名村字勢理客	土器・陶磁器・染付	73
122	久米島大原(北原貝塚)	具志川村字大原	土器	7
123	具志堅ウージ	知念村字具志堅	土器細片・獣骨片(鹿)	221
124	仏ン当貝塚	今帰仁村字与那嶺	土器	10
125	第二嵩下原貝塚	那覇市字嵩下原	土器	6
126	渡口洞窟遺跡	北中城村字渡口	土器・鉄滓?	7
127	御殿庭遺跡	知念村字久高	土器・須恵器・鉄滓?	11
128	アシチ原遺物散布地	伊平屋村字島尻	土器・青磁	3
129	本部野原洞窟遺跡	本部町字野原	獣骨片	40
130	グーサン森遺跡	伊平屋村字野甫	土器・陶磁器	29
131	長浜丘陵採集地	読谷村字長浜	土器・須恵器・陶磁器	24
132	親富祖貝塚	浦添市字仲西	土器・須恵器・陶磁器	22
総 計 (132件)				10131

第2表として、多和田<sup>注2</sup>と高宮<sup>注4</sup>嶺衛氏の編年表を対照してかかげた。なお多和田の編年表は第1表にかかげた遺跡の資料と前述昭和7年～同13年の収集した資料が基準となった。

### (一)八重島(ヤシマ)貝塚

発見1954年1月15日 多和田真淳

沖繩市宇嘉真良俗称ヤシマガーという泉の東側上方崖下標高約70mに形成された貝塚で、中心部は畑地となっている。貝塚の範囲は約8m×15mで小規模である。貝塚の前面(西側)は比謝川上流の支流になる小川が流れており、北側は低湿地となっている。発見当時は遺物が豊富に散乱していたが現在は表面採集は困難な状況にある。本貝塚は発掘調査は行なわれていない。

今回紹介する遺物は土器と石器(石斧)である。

### 土 器

土器は細片をのぞくと第1図と第2図に示した合計27個である。第2図9～11の3片(小片のため形式不明)をのぞくとすべて荻堂式に属する。表面採集資料とはいえ荻堂式だけが単独に出土する遺跡はめずらしく、注目に値する。

これらの土器はすべて破片で復元して器形をうかがえるものではなく、器形による分類は不可能なため文様を中心に分類した。これらの土器は胎土に石英と石灰質砂粒を含むこのことは全体に共通することである。

分類可能な22片を次の6種に分類した。

### 第1種

本種は半截竹管状工具を用いて口縁部に平行する平行沈線文が3列あり、その下に同種の工具による沈線の鋸歯文が施され、さらにその下に平行沈線文と鋸歯文が配されている。

現存部でみると口縁部左端に波状の山形が一部認められる。

器厚約6mmで表裏面とも赤褐色の土器である。

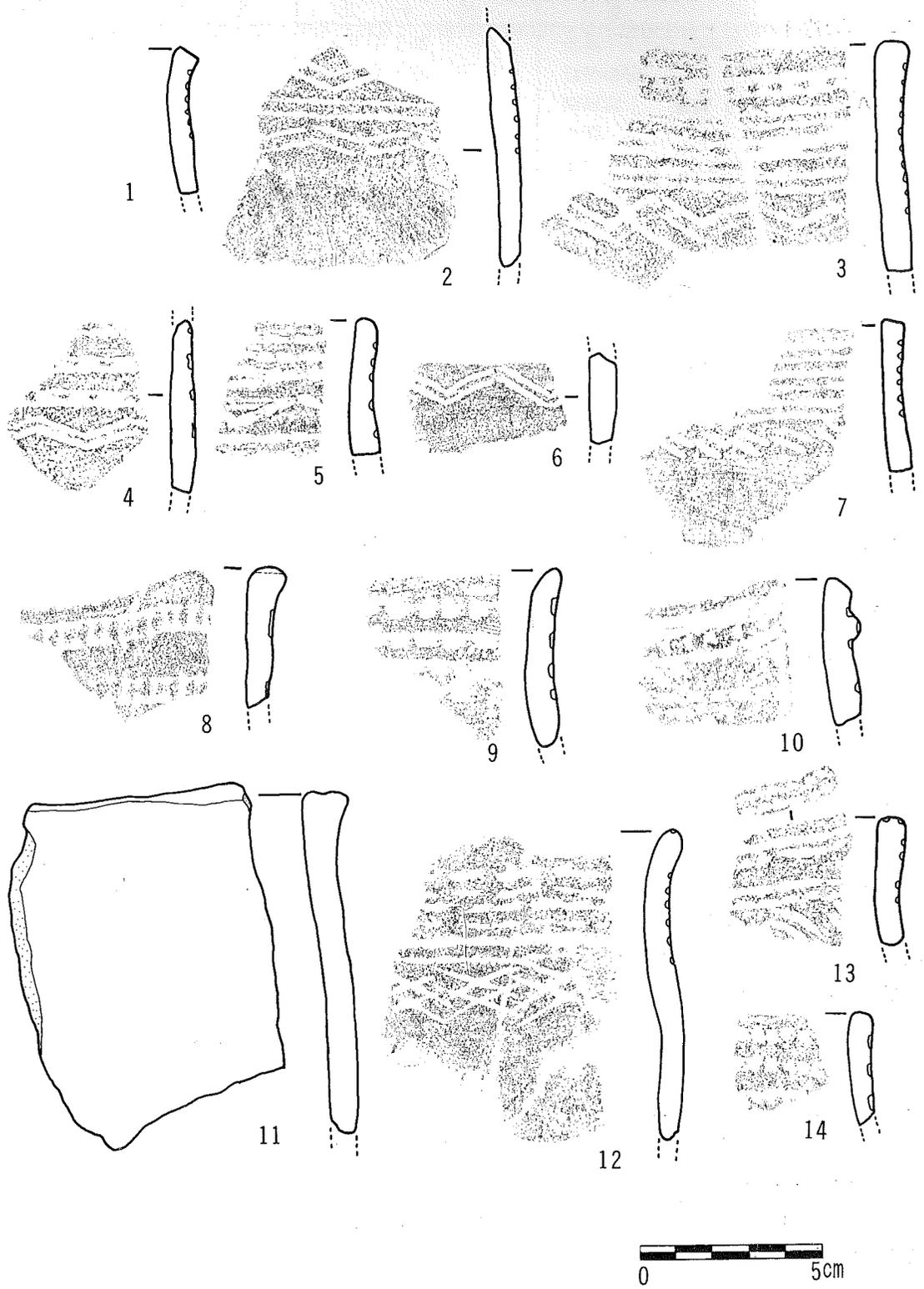
第1図2は口縁を欠く資料で頸部から胴部にかけての資料である。文様は半截竹管工具による平行沈線文の上下に鋸歯文が一行づつ施されている。

器厚6mmで表裏面とも黒色である。

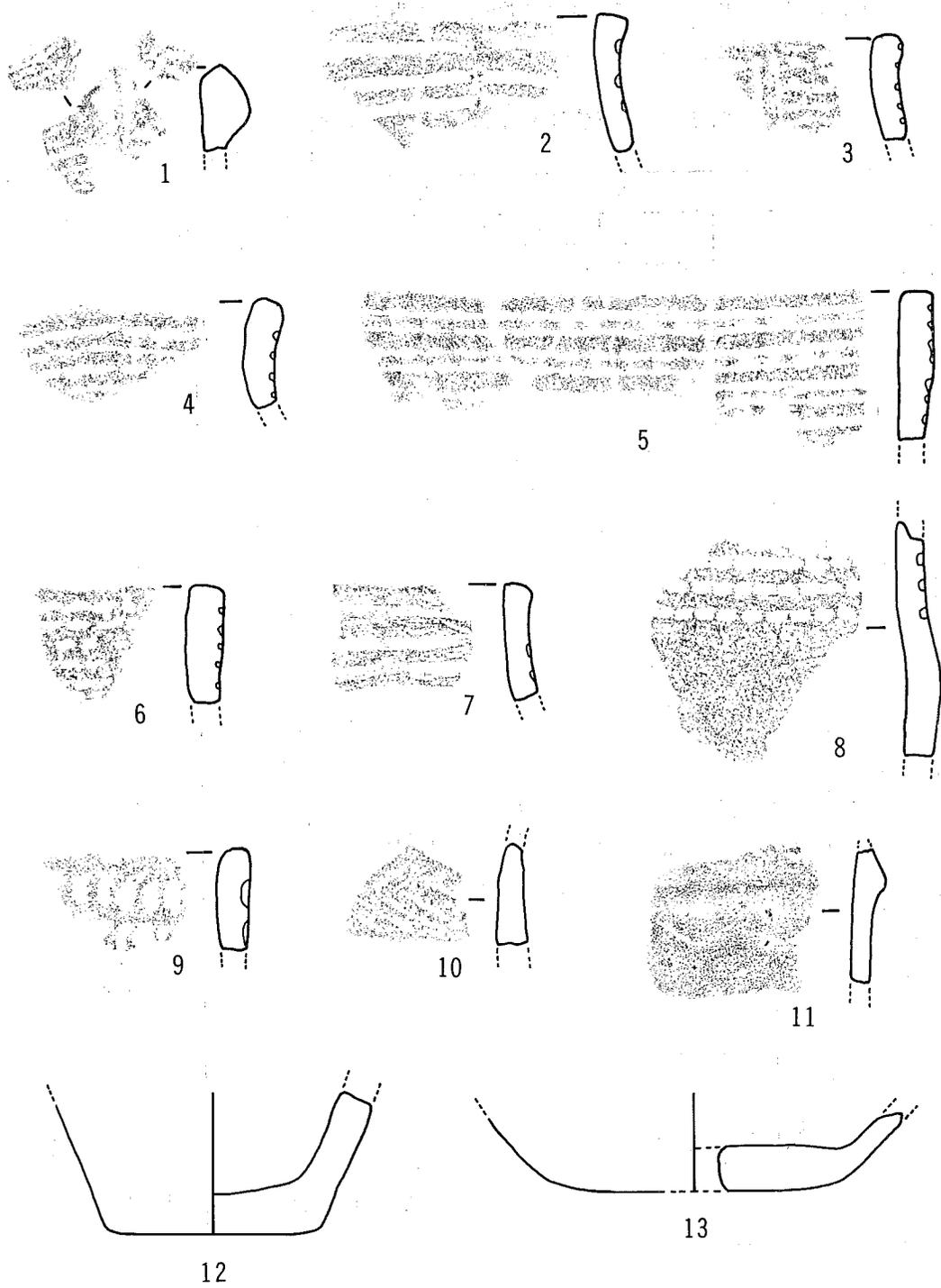
第1図3、第1図版3は半截竹管工具による平行押引文が4列施された下に同様工具による沈線の鋸歯文が一行施されている。

器厚7mmで両面とも赤褐色を呈し、平口縁で口縁が外反し胴部にかけてふくらみをもつ深鉢形の土器である。弱くもろい。

第1図4は口縁部を欠く破片である。半截竹管状工具による押引文が3列施されその下に同様の鋸歯文が施されている。



第1図 八重島貝塚土器（荻堂式）



第2図 八重島貝塚土器（荻堂式）



## 第2種

本種は口縁部直下に三条の半截竹管工具による3列の平行沈線文または連点文下に綱代文、短沈線文が施されるもので第1図7・12・13の3個ある。

第1図7は3条の押引平行連点文の下に竹管状工具による刺突状文が長さ約1cmで沈線状に施されている。

口縁部がわずかに外反し、胴部が軽微な張をもつ深鉢形が想定される。

器厚7mmで器色は多少赤褐色をおびるが全体的には黒色である。

第1図12は口縁部直下に3列の平行連点文が横位に施されその下に綱代状文を施す。

口縁部左端部が山形の波状をなし、口縁部が外反し、胴部にふくらみをもつ深鉢形の土器である。

口唇部にも一条の連点文が施される。

器厚6mmで口径推定10.8cm口縁から頸部にかけては表裏面とも赤褐色でその下は黒色となる。

第1図13は口縁部が波状をなし波頂部付近で欠失したとみられる。

文様は口縁部直下の平行連点文は口縁部と平行に施され、その下の平行連点文は底部と平行する方向で施されている。その下に前述の同図7と同様の短沈線文が施されている。口唇部にも一条の連点文が施されている。

口縁部がわずかに外反し、胴部の張る器形が想定される。

器厚7mm、器色は表が褐色で裏が黒色となる。

## 第3種

同種は半截竹管状工具による連点文または点刻文を主とする土器で第2図1～6の6点がある。いずれも小片のため施文部下端の文様の展開は不明である。

同図1は口縁部が山形突起をなすもので、この部分が肥厚する。この山形頂部から縦に一行の平行連点文が施されこの文様によって横位の平行連点文が切断されている。この縦位の文様によって山形突起の肥厚部分が分断される。

器厚6mm、口縁が外反し器色は赤褐色である。

同図3は平口縁であるが横位文を分断する連点文が一行施されている。口縁部の左側が上がり気味となっており波状口縁が想定される。

器厚7mm、口唇部が円く、外反する。器色は内面が赤褐色で外面は黒味をおびている。

同図4は口縁部右が波状となる。口縁下に2列の連点文がみとめられるが以下は欠失しており不明、口唇部にも平行連点文がかすかに認められる。

器厚6mm、口縁部が外反する。全体に黒色を呈する。

同図5は接合して頸部が長さ13cmまで復元されたがその下は欠失しており、平行連点文が4列まで認められるが以下の文様展開は不明となるものである。

平口縁で口縁部も外反せず直行となるものである。口径推算18cmで、器厚7mm、器色は内外面とも赤褐色となる。

同 6 図は口唇部から 2.8cm、口縁部で 3.2cm と小片である。

#### 第 4 種

単篋工具による押引、横捺刻文のものを第 4 種とした。第 1 図 5・8・9・10・11・第 2 図 7・9 の 7 個がある。

第 1 図 5 は口縁部が右上りとなっており、波状口縁となることが考えられる。口縁下に三本の押引文がありその下に鋸歯文が配されさらにその下に押引文が一条認められる。

器厚 6 mm、口縁部は外反し器色は内面赤褐色外面褐色となる。

同図 8 は口縁部右端に波状部の頂点をもつ土器で口縁下に幅 8 mm の広目の単篋工具による横捺刻文が 2 列施されている。

器厚 7 mm、口縁は外反、器色は内面赤褐色で外面は褐色および黒色となる。

同図 9 は口縁が右上りとなるため波状口縁が想定される。口縁部下に 4 列の押捺刻文が施されている。

器厚 8 mm、口縁部外反、器色は内外面とも赤褐色となる。

同図 10 は口縁が右上りとなり、右端部にその頂点があるとみられる。口縁部下約 1 cm のところに幅 5 mm の凸帯文が口縁部と平行に施されている。凸帯文に添って上下に一本ずつ単篋工具による押引文とその下方に底部に平行する押引文が 2 本施されている。

口縁が外反し、器厚 7 mm、器色は内面から口唇部にかけて赤褐色となり、外面は褐色となる。

同図 13 は口縁部が右上りとなるため波状口縁となることが考えられる。口縁部下に三本の横捺刻文が認められる。

器厚 6 mm で口縁部がかかるく外反する。内外面とも赤褐色を呈する。

第 2 図 7 は幅 3 mm の単篋工具による浅い沈線文が 3 本施される。口縁部は外反、器厚 6 mm、外面の下側が褐色となるが他はすべて赤褐色となる。

第 2 図 8 は口縁部を欠く頸部から胴部にかけての資料で上部に 3 本の横位の点刻文がある。口縁口が外反し、胴部のふくらみをもつ器形で頸部から胴部へ移行するところでく字形になる。器厚 7 mm、内面は褐色で外面が黒色となる。

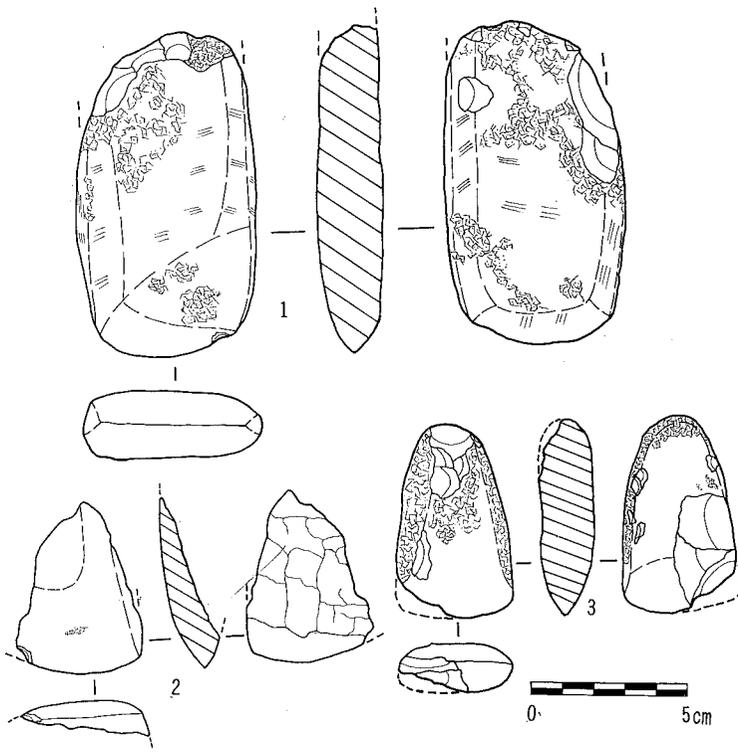
同図 9 は口縁部下に横位の爪形文が 2 列みられる。口縁部右側が幾分上り気味となっているため波状をなすことが想定される。

器厚 8 mm、器色は内外両面とも赤褐色となる。

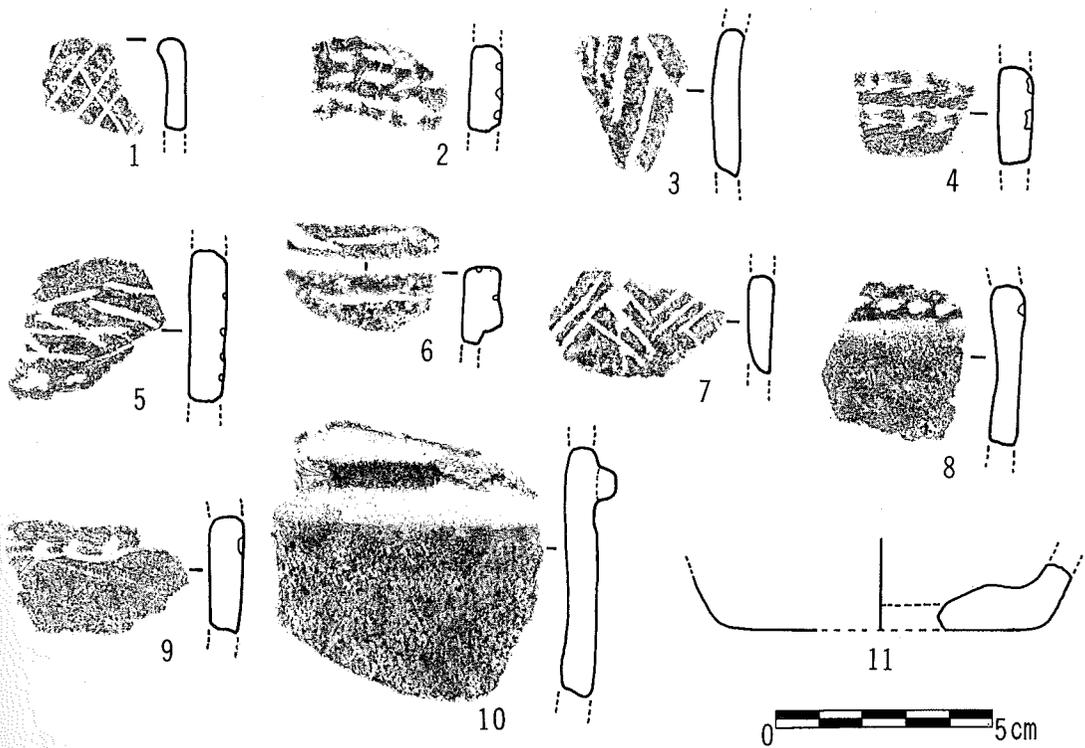
#### 第 5 種

第 1 図 11 の無文土器を第 5 種とした。平口縁で外面に器面調整の痕が残されている。

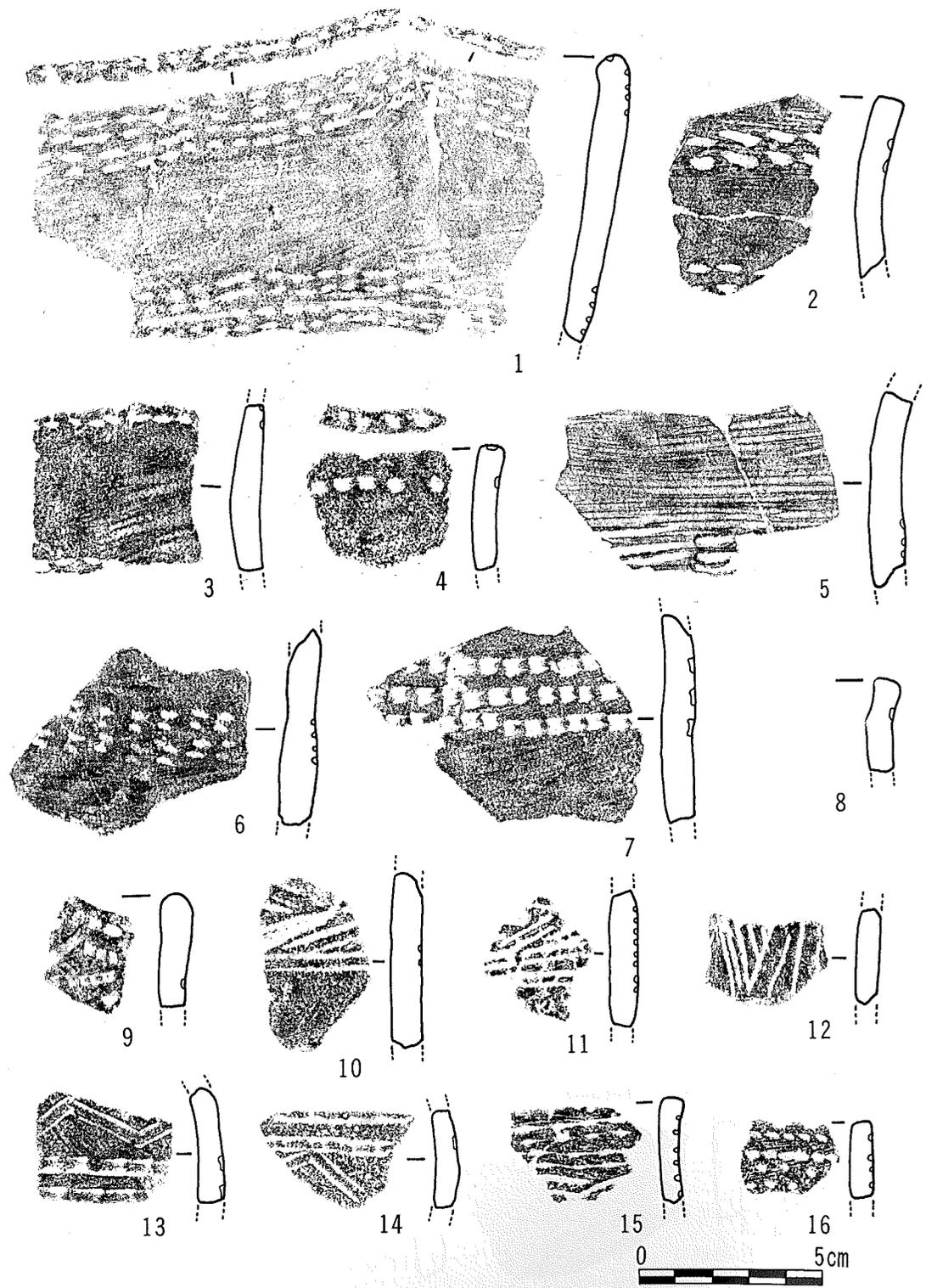
器厚 7 mm、器色は外面下部が黒色となる外はすべて、赤褐色を呈する。口縁部がわずかに外反するが胴部は張りの少ないタイプの深鉢形の土器である。



第3图 八重島貝塚 石器（石斧）



第4图 平安名貝塚 土器



第5図 平安名貝塚 土器 { 1~7 伊波式  
8~15 荻堂式

## その他

その他第2図10の綾杉状沈線文が施される。同図11は無文で上部が段状となり断面がカヤウチバンタ式に類似するが胎土、器色は萩堂式に類似する。

底部は第2図12、13の2個ある。同12は胴部への立上りが急であるが同図13は胴部への移行部はゆるやかである。

同図12は器厚9mm、底径5.5cm内外面とも褐色となる。同13は器厚1.2cm、底径7.4cm内外面とも赤褐色を呈する。

## 石器

第3図1はほぼ長方形をなし、図面下端部の左側が一部欠失するほかはほぼ完形の磨製両刃石斧である。両側縁は角がついており刃部から約1cmの箇所で稜線が縦軸方向に通っている。長軸最大長10.3cm、最大幅5.7cm、厚さ2.0cm、重量230g、石質斑レイ岩製。

同図3は発形の小型石斧で両刃である。図の右側が自然面のままで他は研磨が施されている。刃部右側が欠失するが幅が約4cm刃部が最も幅が広い。刃部は円くなる。最大長6.2cm、厚さ1.1cm、重量60g、石質斑レイ岩製。

第3図2は刃縁から5.2cmのところ欠失する石斧で刃部の右側を欠く、最大長5.6cm、重量28gで輝緑岩製、現存部から推察して小型の石斧である。

## 貝製品

第6図7はシャコ貝を素材とするもので、幅1.7cm長さ約7cmであるが図の左端部が欠失する。左右両端に径8mmの円形の穴が両面から穿ってある。この穴は両面から工具をまわしながら穿つたために穴の周辺部に研磨痕が残っている。

用途は垂飾かまたは、同様の製品を2個組み合わせると腕輪としても使用が可能である。

## 小結

口縁部18点のうち山形の波状口縁をなすものが15点である。また口縁部が外反し胴部にふくらみをもつ器形も15点ある。その他胎土、文様構成、器色等からみて、土器はすべて萩堂式とみられる。

文様構成及器形等からみて、八重島貝塚採集の土器は萩堂式では中期から終末期にまたがる時期のものと考えられる。つまり大山式への移行期直前までのと考える。

石器は多和田が指摘<sup>註3</sup>しているように小形石斧が特徴的である。

## (二)平安名貝塚

発見1955年10月27日 多和田真淳

勝連半島のつけ根近くにある勝連城跡の南側約300mの地点、標高約20mの段丘中腹に立地する。

同貝塚から中城湾までは直線で約200mの至近の距離にある。

多和田はここから発見された楕円類似手法の文様をもつ土器を平安名式<sup>註3</sup>と名づけた。本貝塚も正  
式な発掘調査は実施されていない。

本貝塚採集の遺物は土器、石器、骨製品、貝製品がある。

土器は細片の胴部破片をのぞくと、第5図の16個と第4図の11個合計27個である。そのうち型式  
名の確定し得るのは伊波式と荻堂式である。

### 伊波式土器

第5図1～7の7個である。伊波式は高宮氏<sup>註4</sup>が述べているように、深鉢形、平底。口縁部は波状  
口縁をもち、口径は一般に胴径より大きく、朝顔形の外反。石英、チャートなどを含む。文様は口頸  
部に集中し胴部は無文となる。文様は上・中・下の三段に分けられる。上段と下段には同一文様(点  
刻文、連点文、短沈線文など)を配することが多く、また両者の間隔も荻堂式と比べると広がる  
傾向がある。中段は無文となるのが多くなるが、施文がある場合は綾杉状文が多い。  
平安名貝塚採集の伊波式土器はいずれも中段が無文となるものである。

上段と下段の文様が又状工具による平行点刻文(第5図1・2・3・4・5・6と単篋工具によ  
る横捺刻文第5図4・7に分けられる。

同図1は波状口縁で波頂部においてコーナーをつくるため口縁部の平面形が方形となる。口径約  
22cmの大形の器形である。

文様は上段が口縁部と平行に平行連点文が2列施され下段も同様の連点文が底部と平行に2列施  
されている。

器厚8mm、口縁部が大きく外反する。胎土には石英、チャート、石灰質石粒が含まれている。内  
外面に器面調整の擦痕が認められる。

器色の内面は褐色で外面は黒色となる。

同図2は又状工具による連点平行文が上段に1列、下段に1列認められるが上段の文様は下段に  
比して施文具の幅が広いいため上段と下段では施文具が異なると考えられる。

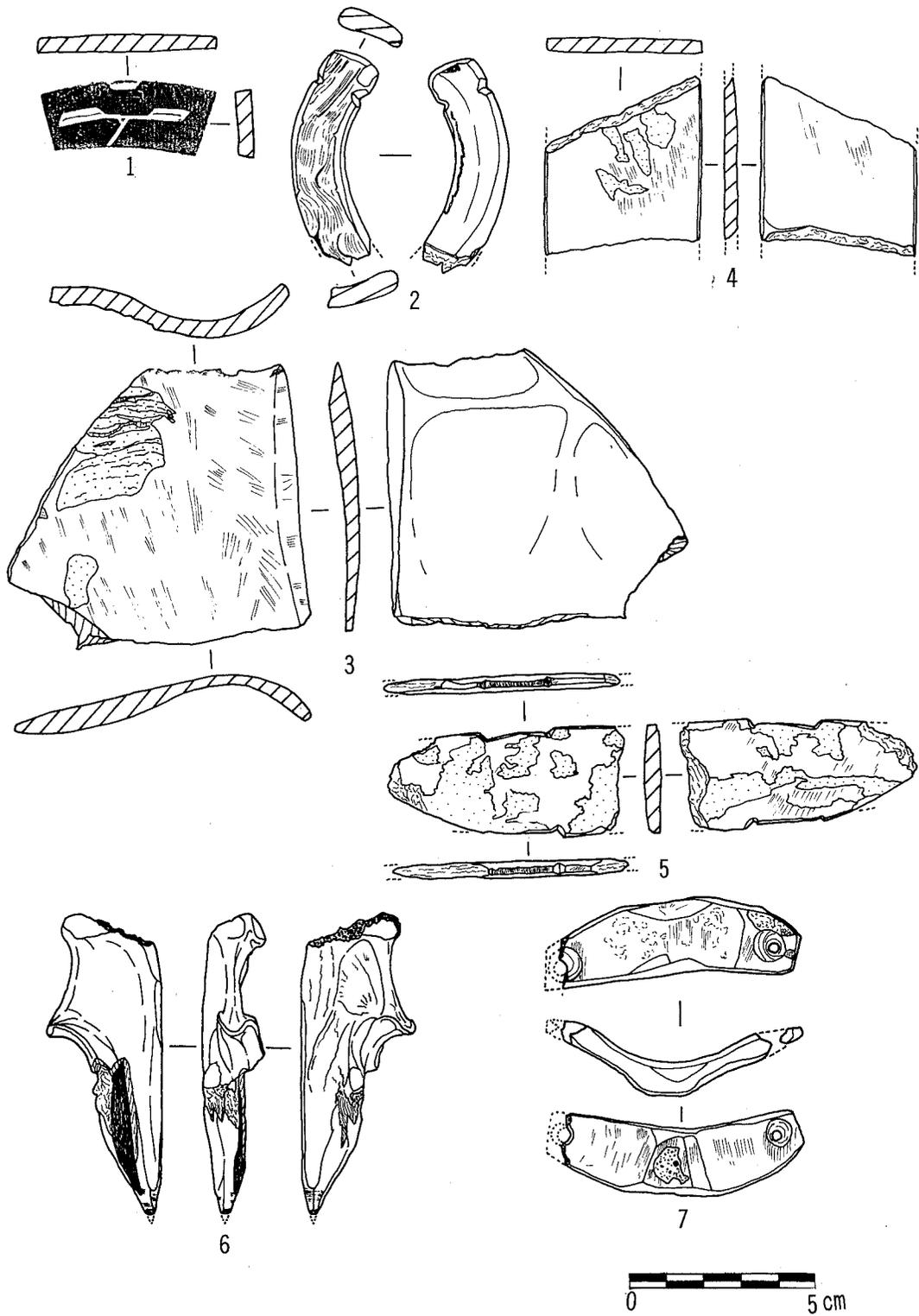
口縁部が波状をなし、内外面に器面調整の擦痕が認められる。器厚7mm、器色は内面黒色で外面  
が褐色となる。口縁部が外反し、胎土には石英、石灰質砂粒が混入する。

第5図は単篋工具による横捺点刻文が一本と口唇部に一本施文されており器厚が5mmと薄手とな  
る土器である。伊波式に含めるべきかまよったが口縁部外反の角度と胎土に石英、チャート片、石  
灰質砂粒が混入し器色が内面赤褐色外面黒色となることなの特徴から伊波式に含めた。

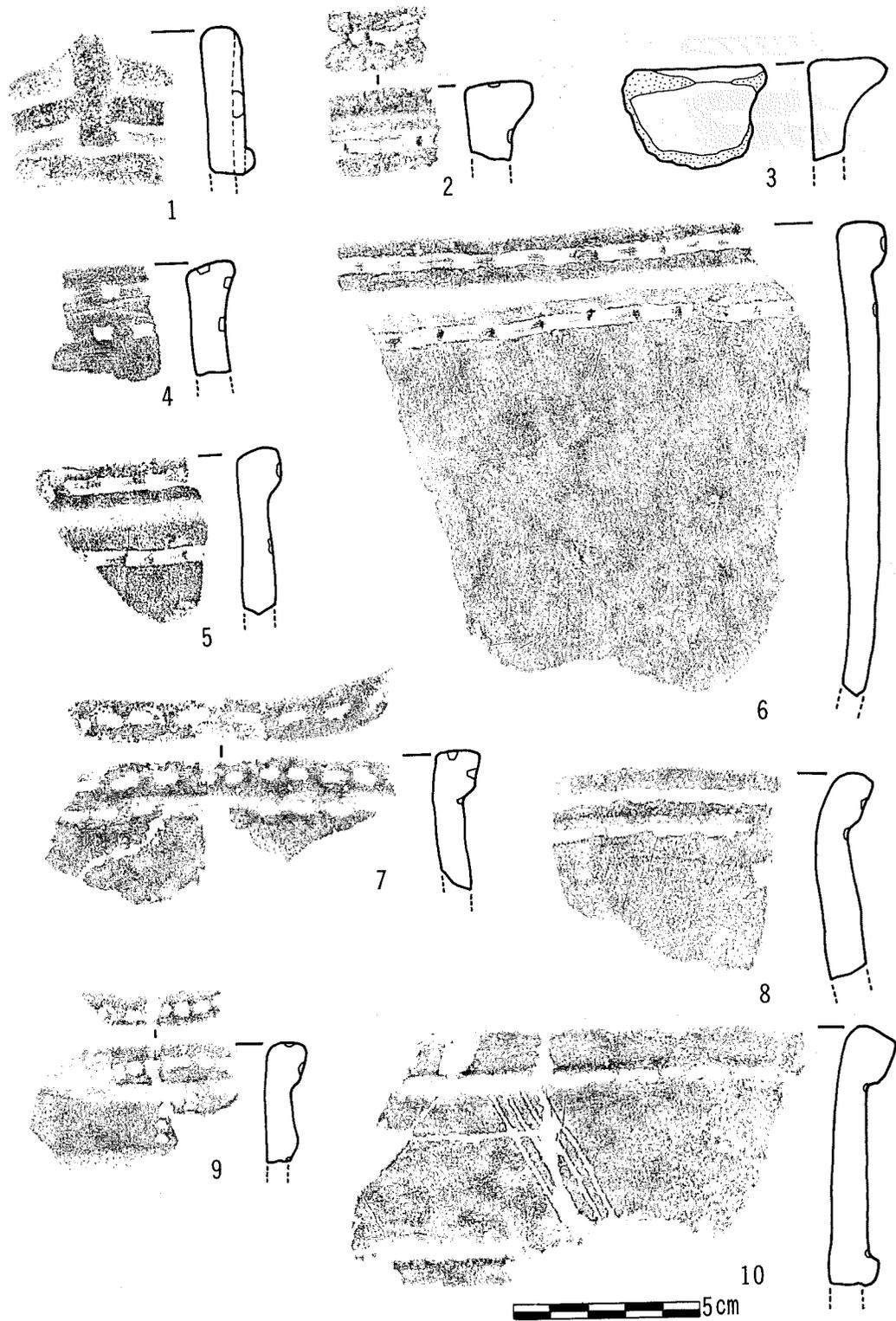
### 荻堂式

荻堂式は第5図9～15の7個である。すべて小片のため器形についてはわからない。

押引文に鋸歯状文の組合さるもの第5図9・13・14と綾杉状文となるもの同図10・11・12と二条連  
点平行文同図15・16の3種に分類できる。



第6図 平安名貝塚 { 1・2・3・7 貝製品  
 (7は八重島貝塚) { 4・5 石製品  
 6 骨製品



第7图 大原貝塚土器

## その他の土器

第4図1は綱代状文の土器口縁部で、器厚5mmの薄手土器で小形の器形が想定される。器色は内外面とも赤褐色となる。

同図2の平行連点文、同図3の斜沈線文、同図4の単篋工具による横捺点刻文、同図5の平行短沈線文、同図6の凸帯文、同図7の綾杉状文、同図8・9の平行連点文はいずれも小片のため形式が明確には決定したいが胎土、文様、器色、器形等から萩堂式に近いものと認める。

同図10は凸帯が現存部の上端に一条施されている外は無文である。

底部は第4図11が1個ある。胴部への立上り部がゆるやかである。底面はたんねんに器面調整が行なわれているが内面は雑な調整で凹凸となる。器厚10mm、器色は内面赤褐色で外面は褐色となるが部分的に黒色である。

## 石器

第6図版8・9、第6図4・5がある。第6図版8は卵形をした全面磨製で小形の用途不明の石器である。長軸下に打痕が残されている。長さ6cm幅3.8cm厚3.8cm重量100gである。石質は琉球石灰岩であるが風化しているため黄味をおびている。

第6図版9はほぼ楕円形で凹面以外は研磨が施されている長軸の上端と下端に打痕が認められること等から、磨石と敲石として使用されたとみられる。長さ10.3cm幅6.2cm厚さ1.8cm重量260g。琉球石灰岩製。

第6図4は砂岩製の偏平な石器片である両側面が平行に幅4cmで加工されているが上下とも欠失するため全体形はうかがえない。

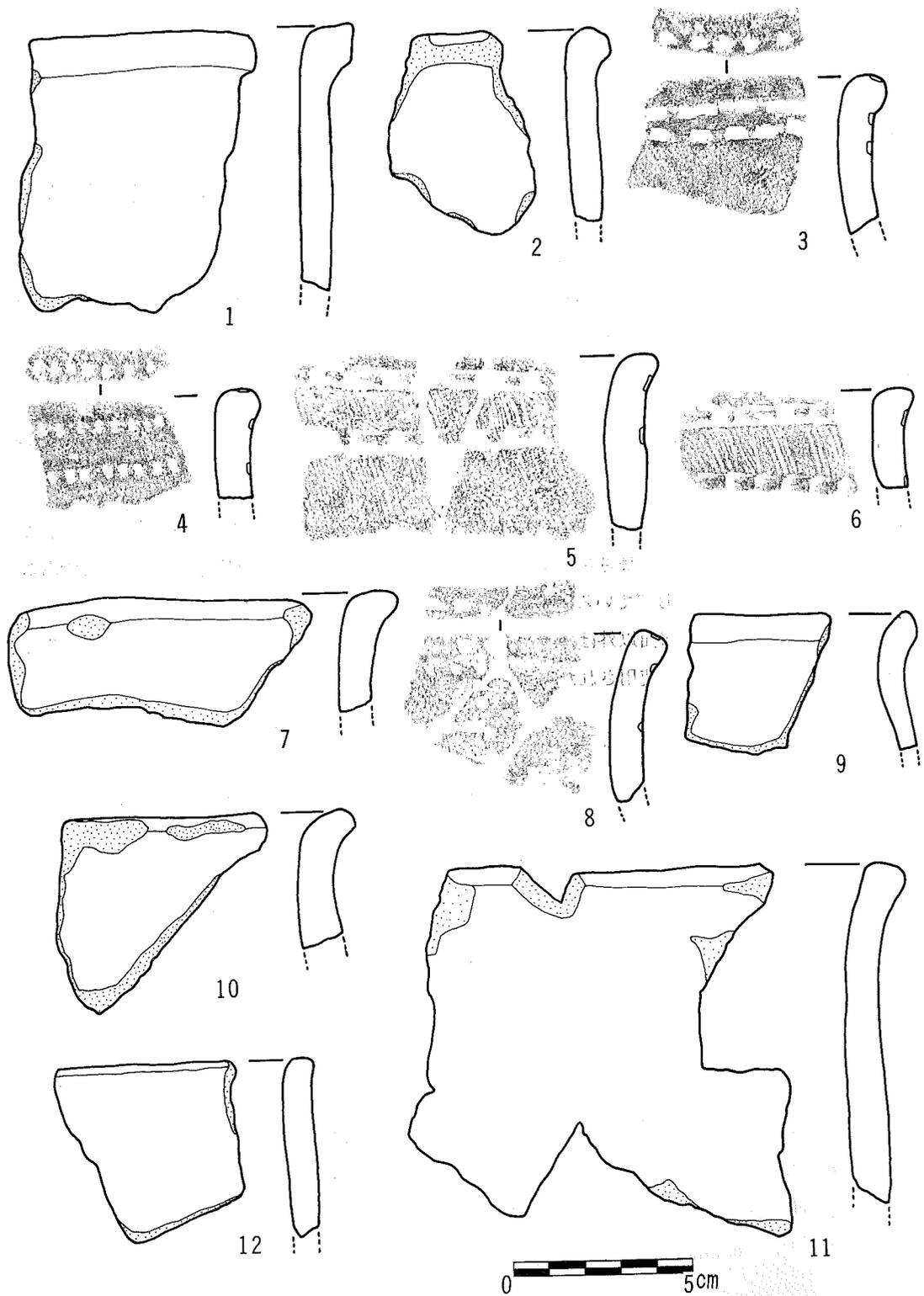
両面ともよく研磨が施されており、研磨痕らしきものが両面に認められる。重量13g。

第6図5は現存部でみると梵鐘形となるが長軸の一端が欠失するため全体形は窺えない。両側縁部を対象して2cm幅で切込みが入れられている。長軸の一端は欠失し他端は砲弾状となる。砂岩製の偏平で両面に研磨痕が認められる。

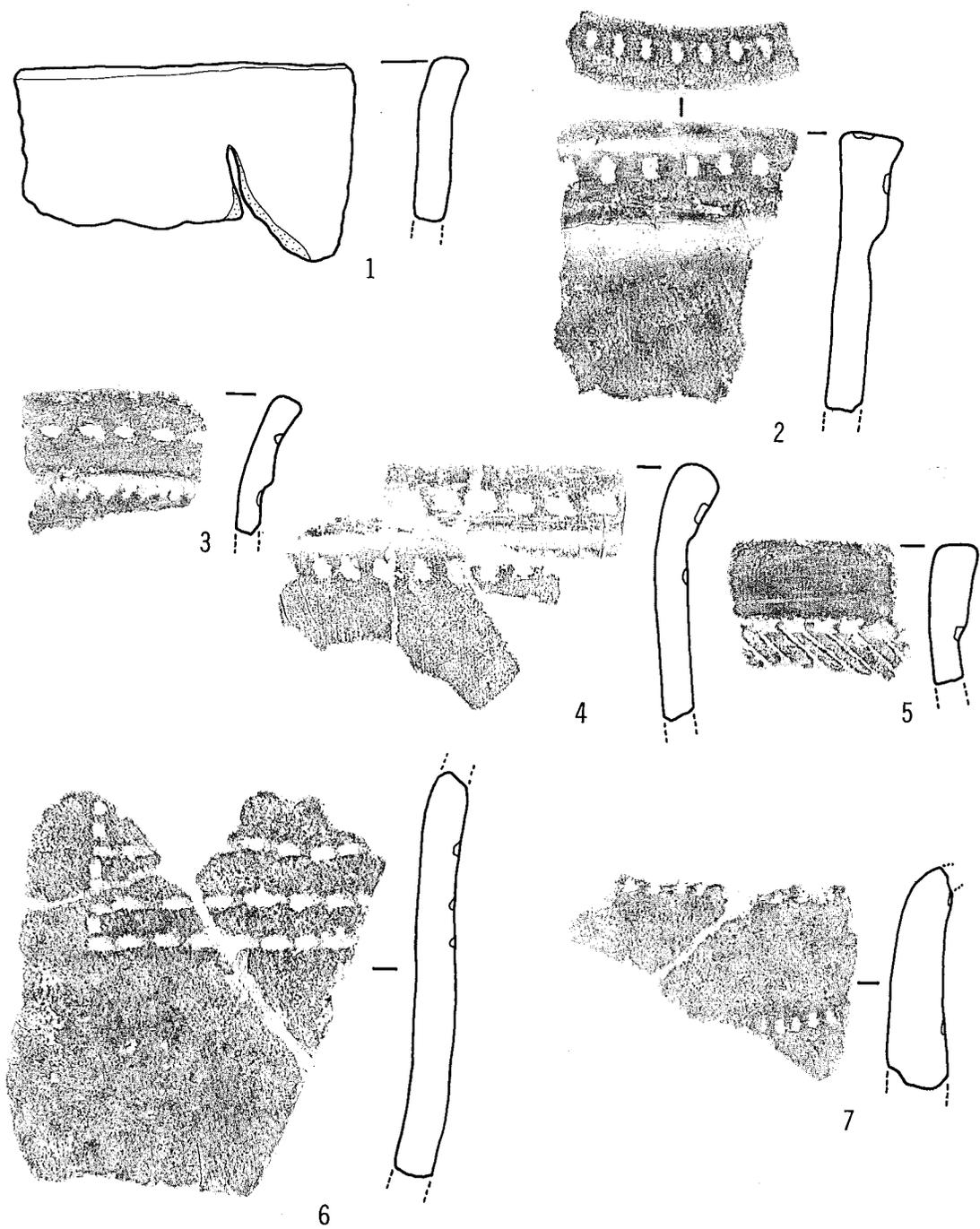
長軸長さ9cm、最大幅2.8cm、重量15g。

## 貝製品

第6図2第6図版3でシャコ貝の口縁近くを幅1.8cmで長方形に切断し、長方形に成形している。長軸の一端が欠失し図の上端から0.9cmのところを側縁に刻を入れてある。厚さ3.5mm、幅1.8cm、重量10.5g。品と考えられる。



第8図 大原貝塚 土器



第9図 大原貝塚 土器

## 骨製品

第6図6はイノシシ右側尺骨を用いて作成された骨錐である。全面一様に褐色となっており火等で強化されたことが考えられる。

先端部が潰されており、先から約1cm余まで使用痕が認められる。錐としてまわしながら使用されたことが考えられる。

最大長約8cm, 17.5gである。

## 小結

本遺跡採集の土器は明確に識別できるのは伊波式と萩堂式がある。土器は最も新しくみても大山期までと考えられる。

したがって、これと同時に採集されている石器や貝製品及骨製品等は伊波式から大山式時期に出土する例が多く知られており、今回紹介した貝製品及骨製品も萩堂式から大山式の時期相当とみられる。

## (三)大原貝塚

発見 1955年6月16日 多和田真淳

大原貝塚は久米島南西海岸の大原砂丘に立地する貝塚である。同貝塚から北原の久米島飛行場に至る海岸添の砂丘地には、大原第1, 第2, 第3貝塚, 北原第1, 第2貝塚など前期～後期の遺跡が連続して続いている。

この砂丘地が久米島で最も遺跡の集中する地域である。大原貝塚は現在県の史跡に指定されている。

昭和54年5月から7月にかけて、土地改良事業に伴う緊急発掘調査が県教育庁文化課によって実施された。

同報告書によると史跡指定の地区は伊波式、萩堂式が出土し、発掘地区A地点はカヤウチバンタ式、宇佐浜式が出土する。また第2貝塚からは後期の土器が出土している。このほか人骨、住居址等も発見されている。

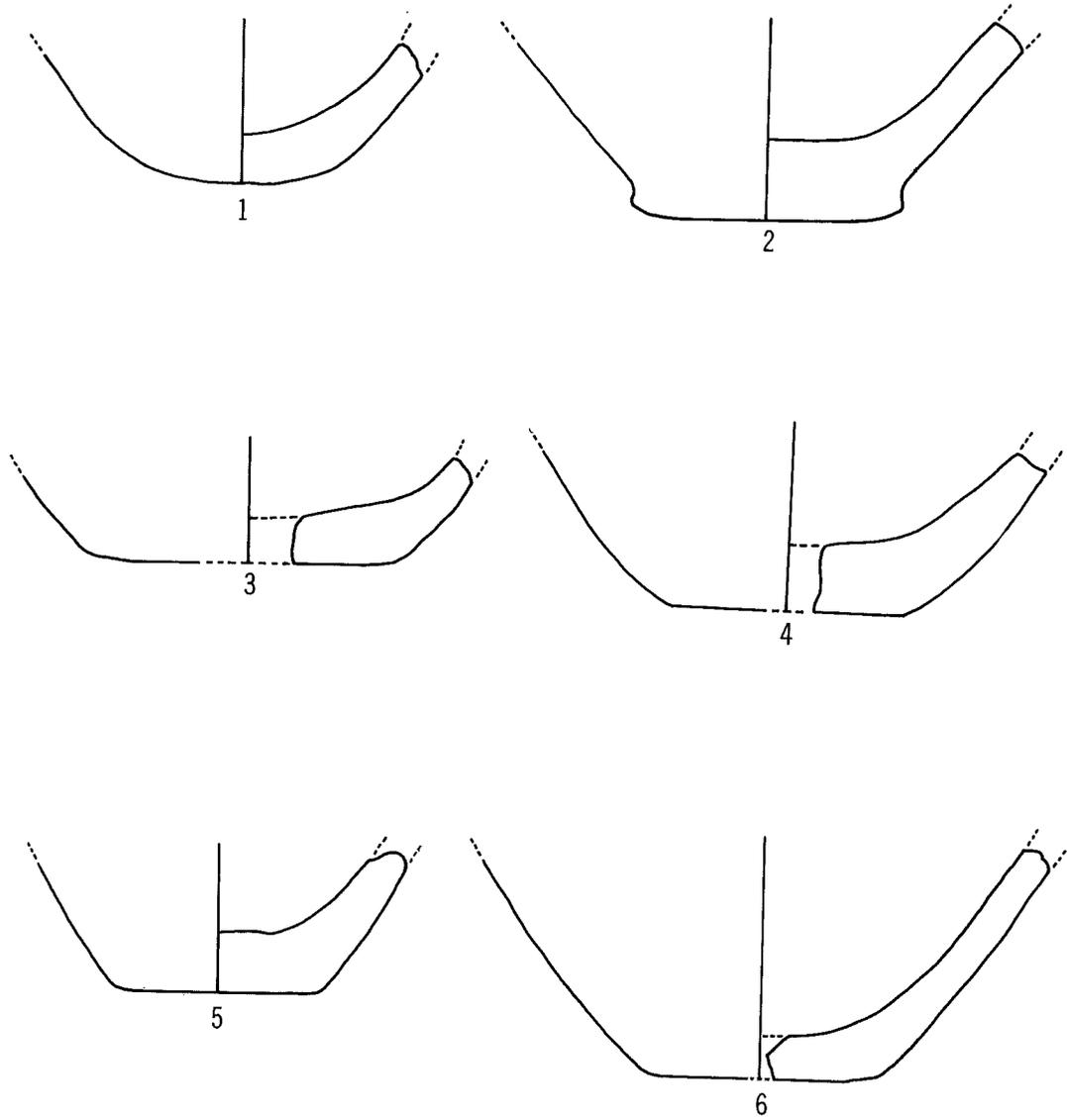
今回紹介する大原貝塚の遺物は土器のみである。

## 土器

第8図と第9図掲載の土器はすべて室川式とみられるものである。

文様は単篋工具による横捺押引文と点刻文である。

口縁部が肥厚し外側へ突出し、口唇部が広がるタイプ、第9図2・3・4の3個である。いずれも胎土には貝及び片石灰岩砂粒を混入することなど室川式の特徴を有している。



第10図 大原貝塚 土器（底部）

口縁の肥厚部が方形状になり肥厚部と口唇部に横捺文が一条とその直下に一条施される。第7図5・6・7・8・9は口縁肥厚部とその直下に一条ずつの連点文が施される。同図10のように肥口部直下に一条とここから約4.5cmの箇所凸帯文がまわされその間に4本組になった斜沈線文が施されている。

同図1は山形の波状口縁となり波頂部の直下から幅約8mmの凸帯文が縦とそれと交差するかたちで横に施され十字状となる。

器厚は8~10mmで伊波式や萩堂式に比して厚手であり、同図1以外は平口縁である。器色は褐色または黄褐色で焼成もよい。

第9図2・3・4・5はカヤウチバンタ式と認められるものであるが、文様、胎土、焼成及器形などの特徴からは、室川式に類似する。

同図1は口縁が肥厚せず外反する無文の土器である。胎土および焼成からして、室川式の時期に含めるべき土器かと考えられる。

同図5は口縁肥厚部の直下に横捺点刻文が施され頸部には斜状の細沈線文が施されている。

同図6は口縁部を欠く胴部の破片である。単篋工具による連点文がヒ状に施されている。

同図7は現存部上端と下端に点刻文が一本ずつ認められる。器厚は最大1.5cmにもなる厚ぼったい土器である。

底部は第10図1~6の6個ある。同1は円底、器厚1.2 胎土には石灰岩砂粒及貝殻片が混入されている。ている。

同図2は前述1の円底をおしつぶして平底としたようなもので、胴部への立上り部分がくびれている。立上りの角度もゆるやかであり、胴部でふくらみをもつ器形が想定される。

器厚1.8cmの厚底、直径6.5cm胎土には石英、貝殻片等が混入する。室川式の底部かとみられる。

同図3~6はほぼ円形の平底、同3は底径7cm、器厚1.1cm、同4は底径5.5cm、器厚1.4cm、同5は底径4.8cm、器厚1.4cm同6は底径5.4cm、器厚1.1cmとなっている。

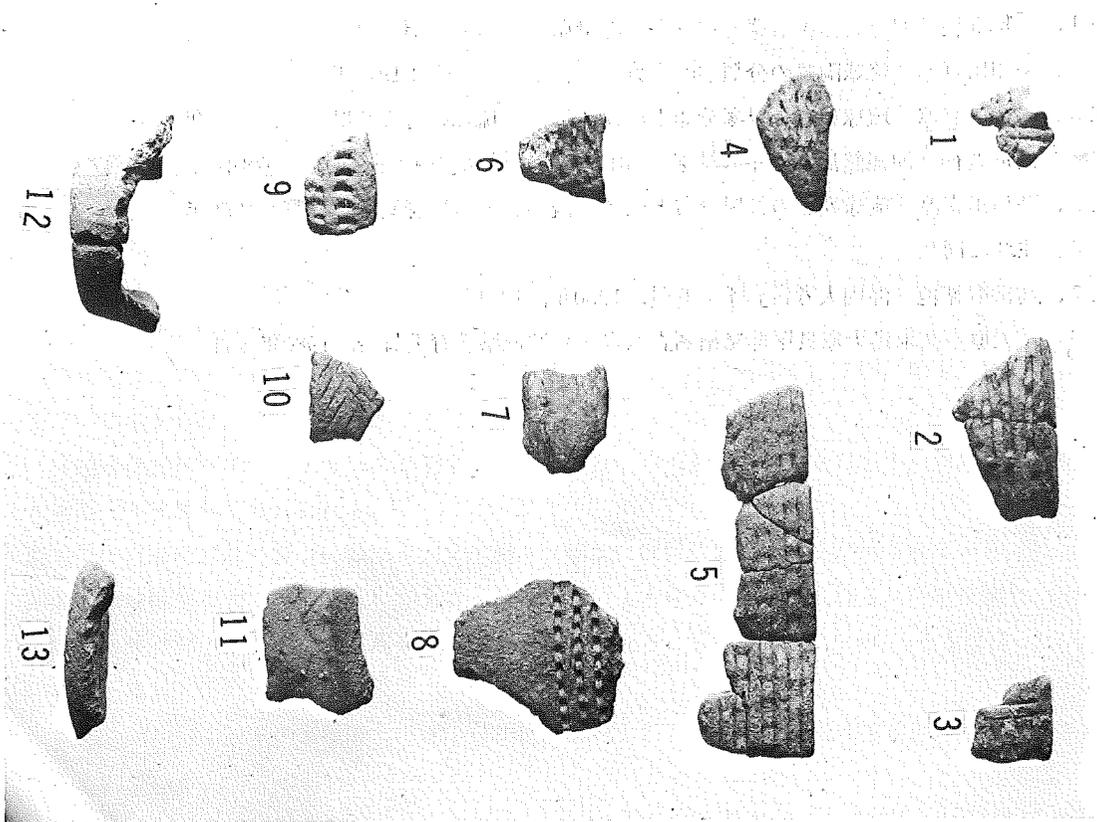
## まとめ

大原貝塚採集の土器には宇佐浜式がなく、大山式もみられない。このことはカヤウチバンタ式の終末から大山式の間で室川式の盛行する時期とみられる。

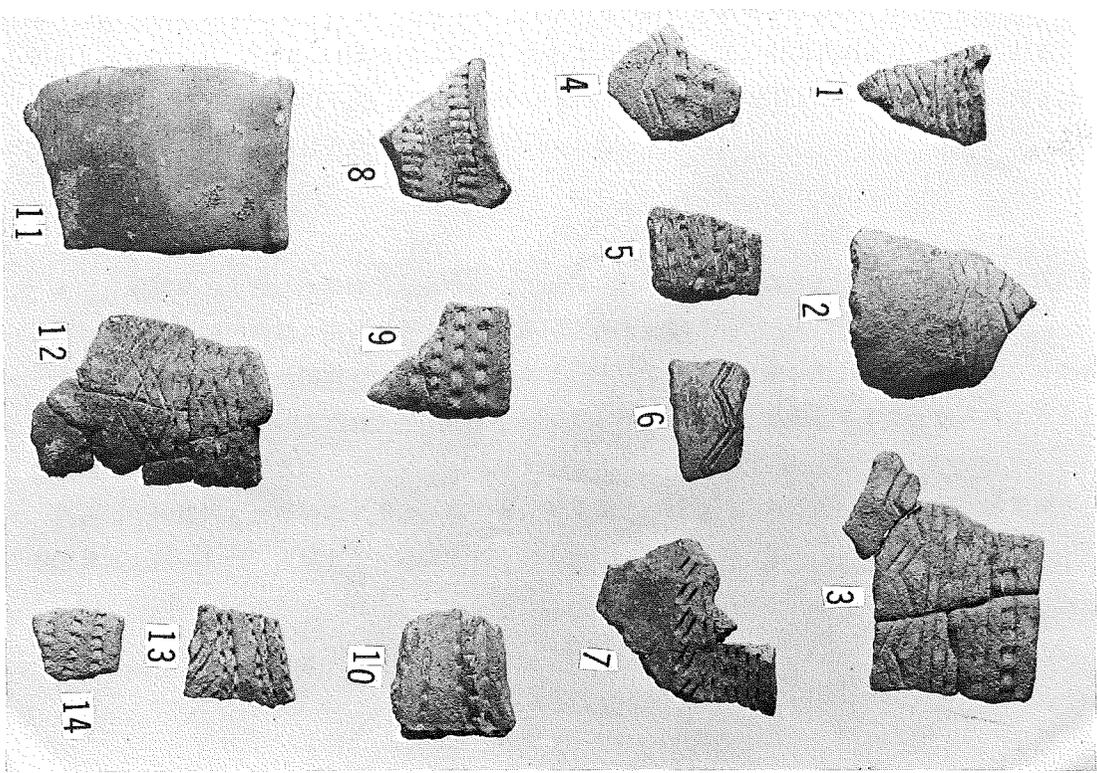
沖縄県教育委員会の発掘調査によると、伊波式から後期までまたがっており、地点により時期差のあることが知られているため、今回紹介した土器はほぼ同時期に集中していることから考えると採集範囲はかぎられてくる。

最後に今回報告した遺物の実測は、鳥袋洋、大城剛氏が行ない、石器の同定は当館大城逸朗主任学芸員にお願いした。末尾ながら感謝申し上げる。

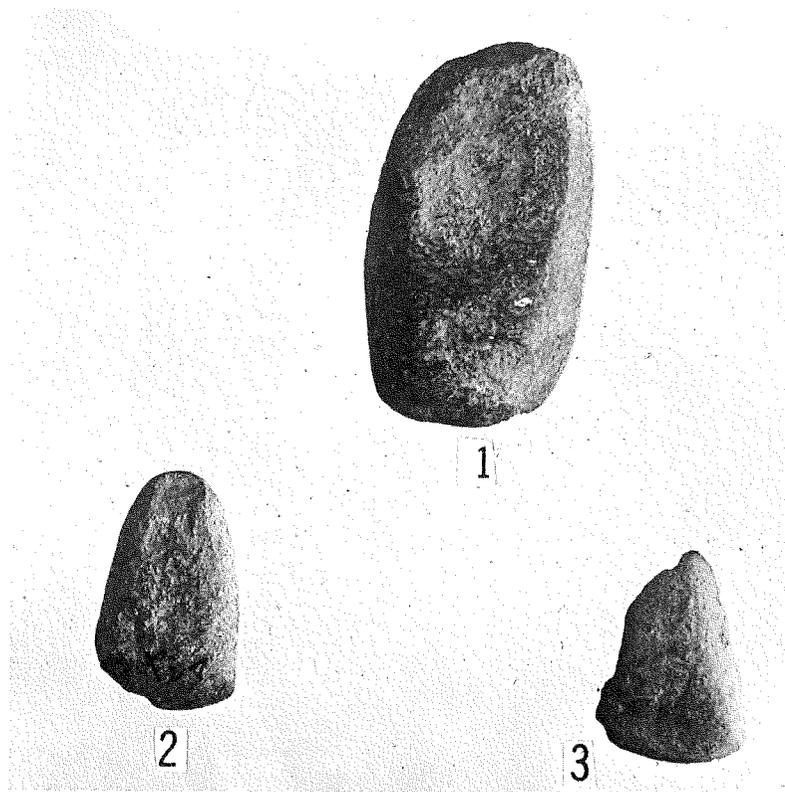
- 注1, 「特別展多和田真淳氏所蔵考古資料」沖縄県立博物館, 昭和51年3月
- 注2, 多和田真淳「琉球陶器の分類学的考察」考古学ジャーナル1972年
- 注3, 多和田真淳「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」琉球政府文化財要覧, 1956年
- 注4, 高宮廣衛「沖縄諸島の編年(試案)」南島考古6号, 沖縄考古学会, 1978年12月
- 注5, 多和田真淳「琉球列島の貝塚分布と編年の概年」琉球政府文化財要覧, 1956年
- 注6, 注3に同じ
- 注7, 高宮廣衛他「沖国大考古」4・5号, 1980年, 1981年
- 注8, 「大原—久米島大原貝塚群発掘調査報告—」沖縄県教育委員会, 1980年3月



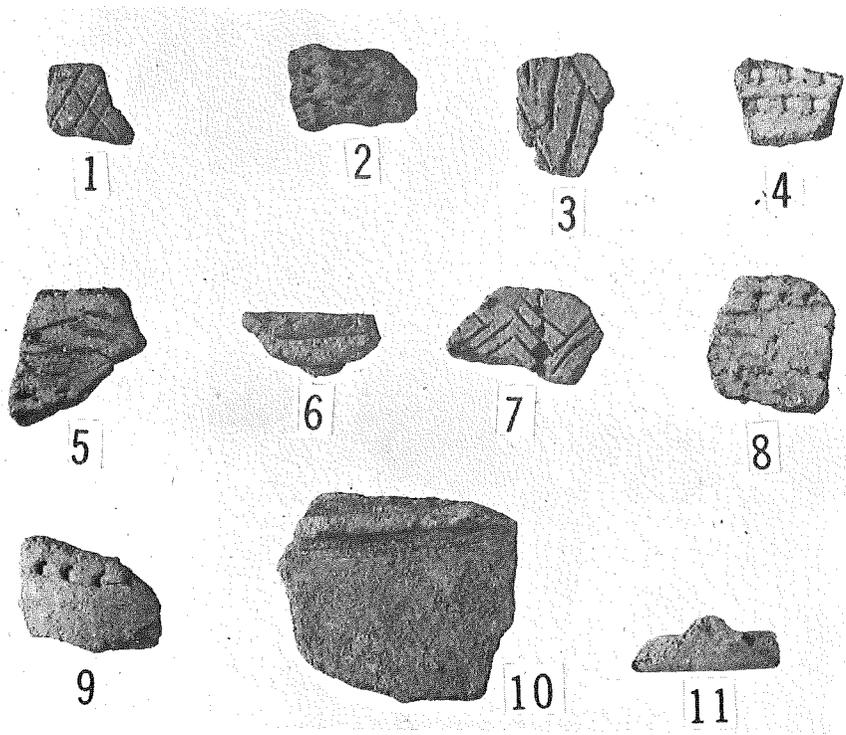
第2図版 八重島貝塚土器



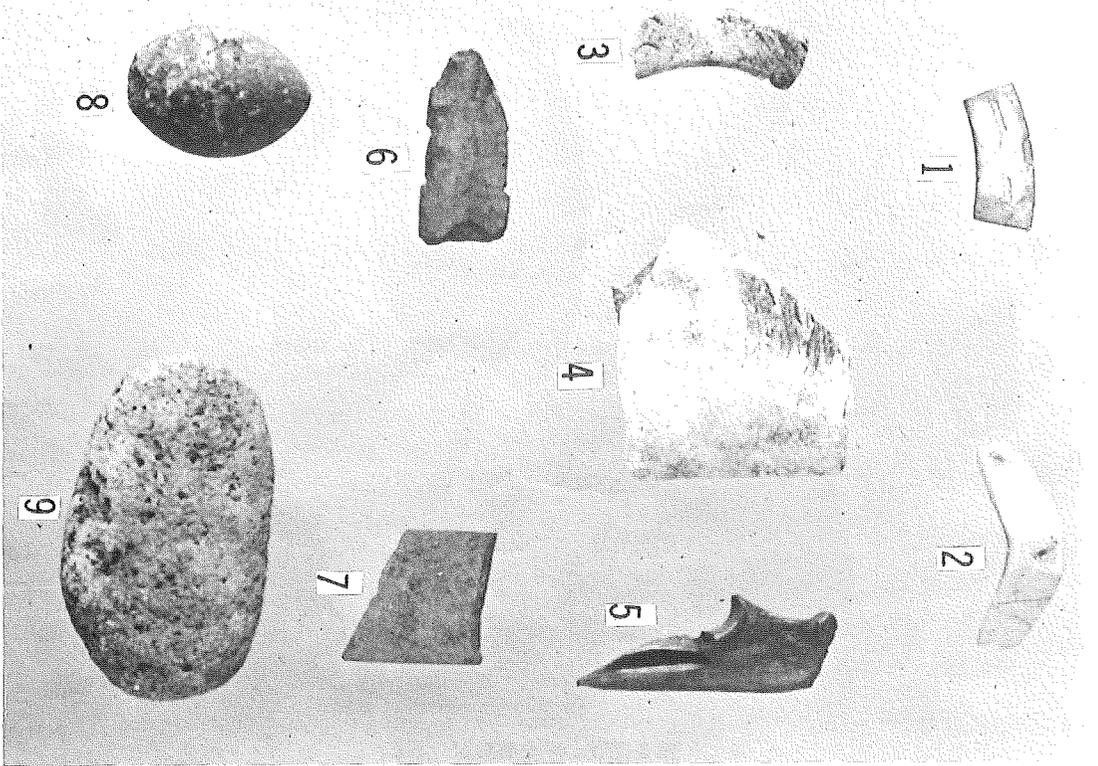
第1図版 八重島貝塚土器



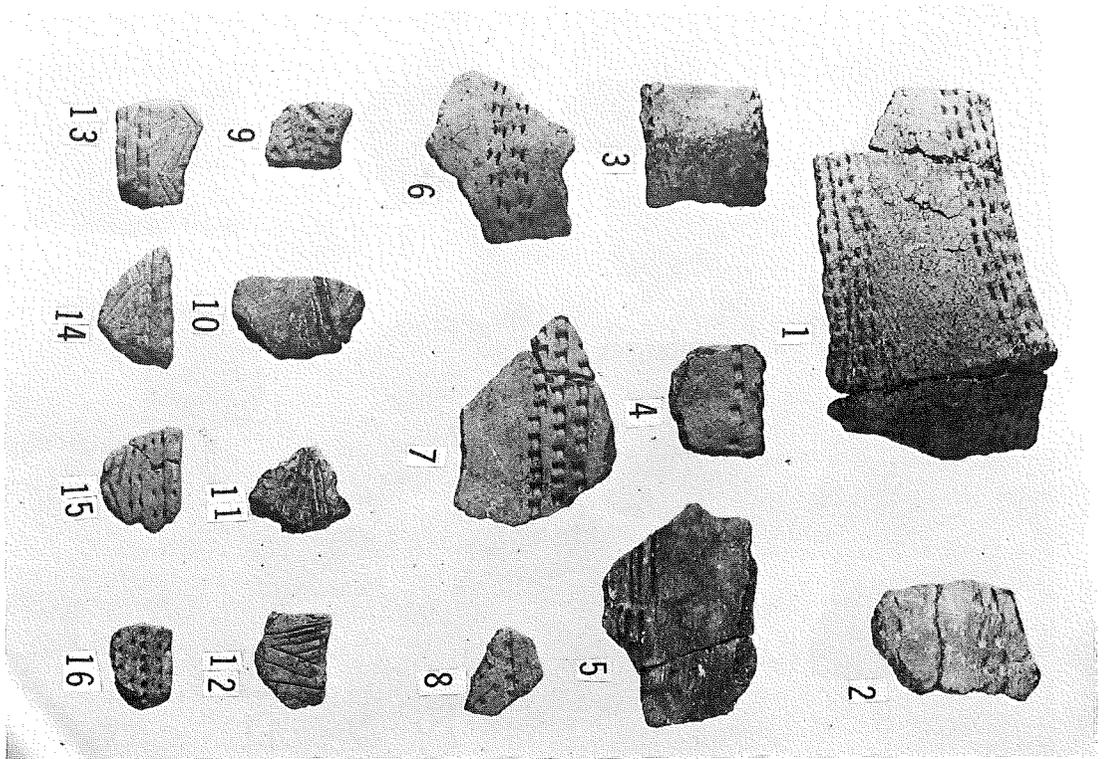
第3 図版 平安名貝塚 石器



第4 図版 平安名貝塚 土器

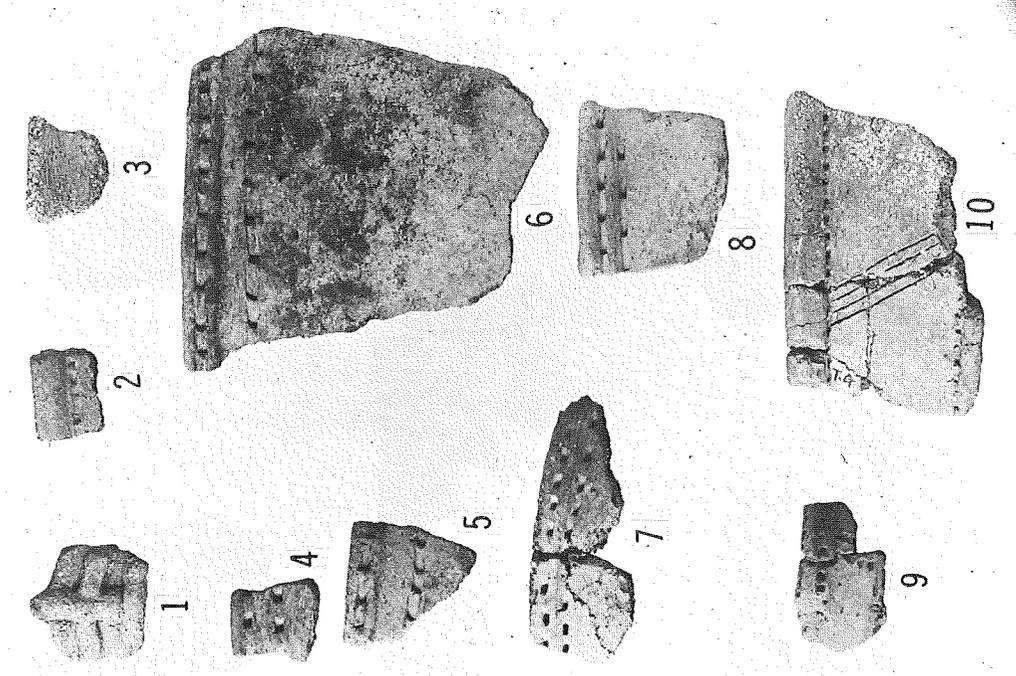


第6図版 平安名貝塚 貝製品・石製品・骨製品  
2は八重島貝塚

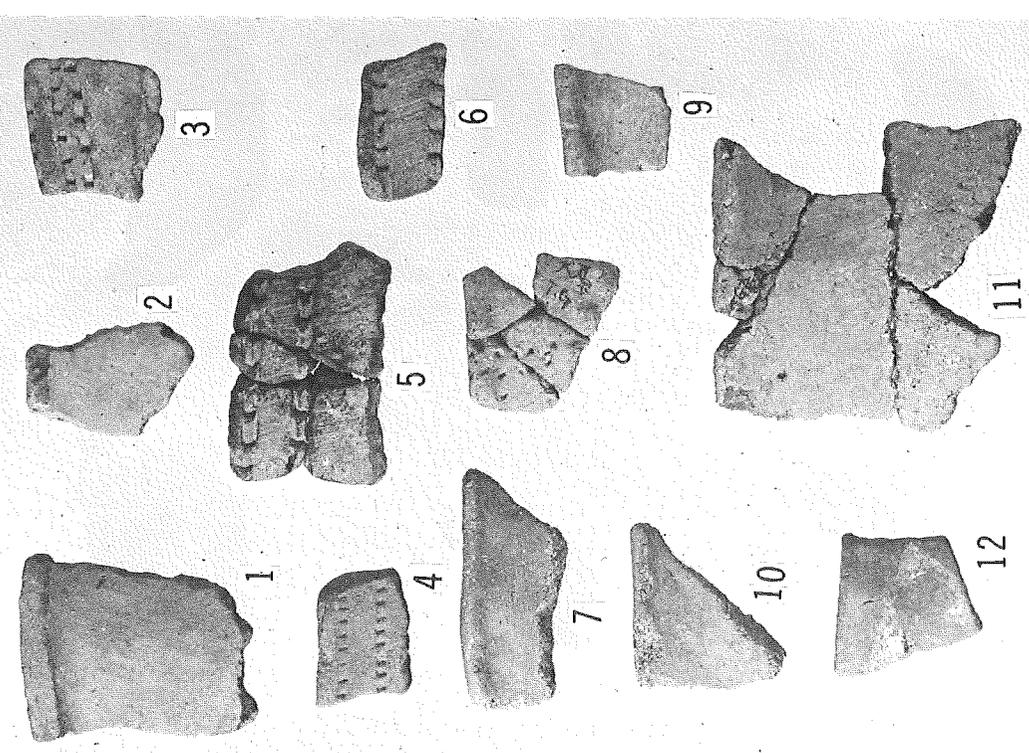


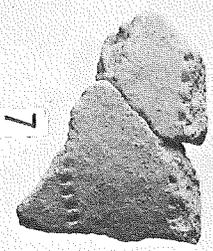
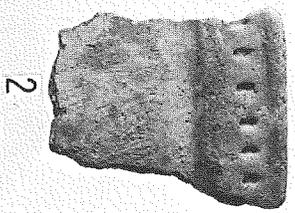
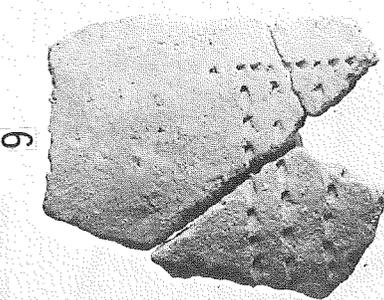
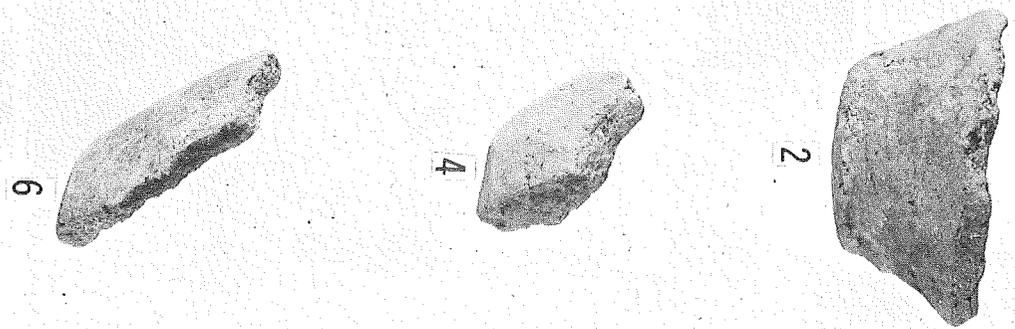
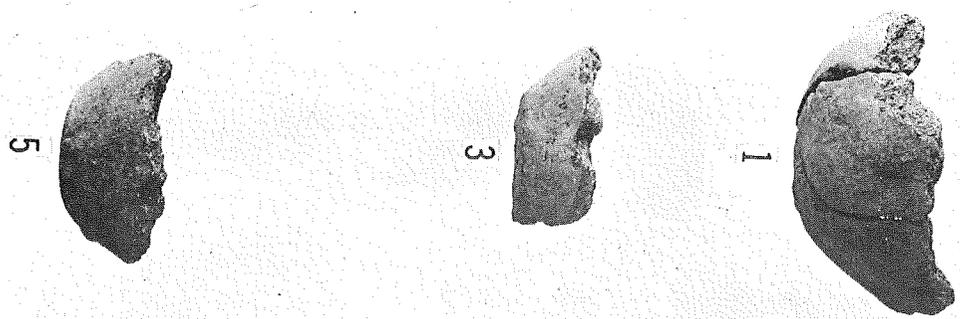
第5図 平安名貝塚 土器

第7図版 大原貝塚 土器



第8図版 大原貝塚 土器





第10图 大原具塚 土器 (底部)

第9图版 平安名具塚 土器

## 「内 検 代 廻」を読む

★  
渡口真清

東恩納文庫に内務省（保管）文書写というのがある<sup>①</sup>。もとは評定所あたりにあった文書を廃藩のとき引あげていったものと考えられるが、関東大震災のとき原本は焼失したということである。その中に次のような珍しいのがある。

内検代廻 寅九月廿八日羽地按司被持下候  
高以九万八百八拾三石九斗七合 (A)  
田畠 九百六拾四石六斗九升三合荒□□成分 (B)  
現田方三万六千八百四拾石六斗三升九合 (C)  
四斗七升一勾四才代 (D)  
納米一万七千三百二拾石四斗三升二合 (E)  
但前代四斗四升五合八勾六才 (F1) ニテ増米千六石八斗二升八合 (F2)  
現畠 三万三千九百八拾二石四斗五升三合 (G)  
一斗六升七勾九才代 (H)  
納雑石五千四百四拾五石一斗五升七合七勾一才 (I)  
米ニノ式千七百三拾二石五斗七升 (J)  
但前代一斗四升四合一勾四才 (K1) ニテ増米二百七拾七石一斗三升九合 (K2)  
高田畠一万二千四百五拾八石七斗九升二合 (L) 宮古  
二斗七升七合六勾七才代 (M)  
納米三千四百五拾九石三斗八升四合 (N)  
高田畠六千六百三拾七石三斗一升一合 (O) 八重山  
三斗二升七合三勾二才代 (P)  
納米二千百七拾二石二斗五升五合 (Q)  
合現高八万九千九百拾九石二斗七合 (R)  
当代二斗八升五合五勾三才 (S)  
納米二万五千六百七拾四石六斗五升二合 (T)  
内千二百八拾三石九斗七升七合増米 (U)  
総高廻ニノ  
二斗八升二合五勾 (V)

右之代廻如御国本三斗五升ニ廻候様ニ去年被仰下候 就夫内検申付候得共代成三斗ニモ廻兼  
漸二斗八升程ニ廻申候 此上ニ重候ハバ百姓疲可罷成由検者共申候間先以如此相極指上申候

及ぼして惣高になるという地方書<sup>(3)</sup>のいう通りである。結果から見てもそうなっていることがわかる。  
 沖縄島について調べる前に、羽地按司の計算を訂正して第2表をつくる。

(第2表)

(沖縄島)	高	代	納米	前代	増米
現田方	36840.639 (C)	0.47014 (D)	17320.258 (E) [5462.6793 (I)]	0.44586 (F1)	894.47 (F2) [564.44854 (K3)]
島方	33982.453 (G)	0.16075 (H)	2731.3396 (J)	0.14414 (K1)	282.22427 (K2)

沖縄島の田方の元高は(B)+(C)=37805.332石、これは寛永12年高であるから、これを1.0736503で割れば寛永6年高となる。即ち35211.96石(C') (G)の島高も寛永6年高に直せば31651.323石(G')となる。従って沖縄島の元高(C')+(G')=66863.283石となる。これは検地高といってもよい。

当初の税は二つ割の法で取ったというから生産額の半分が納米になっていると見られる。つまり納米を2倍すれば、生産額がわかる。

沖縄島では第3表のようになる。

(第3表)

	寛永12年高	同6年高	前代	前納米	生産額(前納米×2)
元田高	37805.332	35211.96 (C')	0.44586 (F1)	15699.604 (E')	31399.208 (イ)
島高	33982.453 (G)	31651.323 (G')	0.14414 (K1)	4562.2216 (I')	9124.4432 (ロ)
寛永6年高×1.0736503=同12年高					

田方の寛永6年高(C')を生産額(イ)で割ってみると、1.12になる。田方は平均して生産額そのままをつけていたことがわかる。島方の寛永6年高(G')を生産額(ロ)で割ってみると3.47になる。島方は平均して、実高の3.47倍につけられていたことがわかる。(イ)+(ロ)は田方と島方の生産額の合計40523.65石(わ)である。これで沖縄島の寛永6年高(C'+G')=66863.283石を割ると、1.65になる。即ち沖縄島の高は、米・雑石の混合高である上に、その実際の1.65倍に高くつけられている。高の39%は空高である。琉球国の検地は大間検地の法に従っているというけれども、石盛はその通りではない。名寄帳の田方266210畝<sup>(6)</sup>で生産額(イ)を割ってみると、1斗1升7合9勺(坪3合9勺)になる。中村の中田並である。島方612840畝<sup>(6)</sup>で生産額(ロ)を割れば1升4合8勺(坪4勺9才) 下下村の下島以下である。鉄器、農具のなかった事情を反映しているのであろう。このように島作のふるわない時代には、人々は田方の二期米に一層たよっていたであろう。琉球では、はるか以前から「水田一年再収、陸田一年一収」<sup>(7)</sup>であった、島方の生産の低いことは、島租も少ない。これは甘薯や甘蔗を島に植えてみることの素地をなしている。

もとの惣高66863.283石から生産額(わ)を引いた残り26339.632石は空高である。これは田方の生産額(イ)の84%に当たっている。大体二期米の高に相当すると見られる。即ち島高は、雑石の生産額に、田方の二期米の高を加えたら成立つ。

第1表で宮古の高(L)は寛永12年高であるから、これを同6年高に直して、代(M)をかけると、その時の納米が出る。これを倍すれば、生産額がわかる。それを以て(L)を割ると、1.8となる。即

ち宮古の高は生産額の1.8倍、同じように八重山は1.5倍につけられていることがわかる。「琉球館文書」の天明8年の章(74)に「両先島、粟作立候儀は前後三度計に蒔入候に付、早出来と申候は大概四月末よりは蒔取候」とある。つまり田は二毛作、畠は三毛作という所である。どのような石盛をしたらよいか迷ったであろう。八重山にしても事情は似ていると思われる。

薩藩の万治内検の時、琉球でも3斗5升代にするよう通達してきた。羽地按司の文書は、それに対する返答である。惣高に対する代は2斗8升2合5勺になるという。薩藩の代は税率であるが、琉球の代は税率ではない。それを同じに考えて、通達したのはうかつであった。それに調子を合せている羽地は、そのことを知っての上だろうか。

薩藩の代は唯一つ3斗5升という数値で、田高、畠高、村高に限らず、すべての高に通用する。然し琉球の代は、田毎、畠毎、村毎、間切毎異なるものである。薩藩の代は、高に掛けると納米の額が出る。琉球の代は、田高に掛けると米の額が出るし、畠高に掛けると、雑石の額が出る。薩藩の代は、粳9斗6升を粳高一石とし、これに代をかけると、米3斗5升を出すための係数である。係数ではあるが税率ともいえる。税率は $(0.35 \times 2) \div 0.96 = 0.729$ 即ち72.9%の税率である。琉球では、高が空高を含み、その含み方も一定していないから、出米の率は高に対してまちまちである。代は税率といえない。

羽地按司は、畠方の納雑石(I)を、半分にして米に直している。貢納の総計(T)は米ですということである。薩藩と同じ性質ですというつもりであろう。薩藩の方から見ると、琉球では田方、畠方或は宮古、八重山夫々代がいろいろあるのは不思議に思ったであろう。説明を求めたに違いない。そこで薩藩の琉球高に対する認識不足が暴露したであろう。折しも王城回祿があり、この時とばかりに検地帳も焼失したので、薩摩にある御前帳を写させてほしいと申出た。やはり薩摩にも検地帳のないことが明らかになった。

琉球は薩摩藩に対しては、粳高であるかのように振廻い、国内では米高として運用している。その出来たのは混合高だからである。開墾が行われ、田方、畠方も反別が2倍半程になり(竿入帳)空高の部分が実高になり、混合高は米高と見てもよい程の生産があるからである。高は米高と見なしてはいるが、始めから米高として成立っているのではない。琉球国の高は混合高であり、中頃から米高の運営となるのである。

注(1)東恩納文庫、史料ノート(和史200)

(2)沖繩県史、第14巻79頁

(3)御当国御高並諸上納里積記

(那覇市史、資料編第1巻2、67頁)

(4)近世地方経済史料、第10巻382頁

(5)御財制(東恩納文庫)

(6)沖繩県史、第21巻207頁

(7)海東諸国記、他李朝実録(琉球漂着記)

追記 畠高に含まれている空高は、田方の二期米を加えていると考えたが、その必要のないこと、島津領国の文禄高をしらべてわかった。(法政大、沖文研、『沖繩文化研究』9)

## 試案・沖縄絵画史年表

★  
宮城篤正

琉球国時代は中国はじめ周辺諸国と交易をして、富を蓄積すると共にそれらの国々から進んで文化を学び、消化吸収して香り高い独自の文化を築き上げてきた。有形、無形の文化の伝統は沖縄人の血となり、肉となって現在に受け継がれてきている。この伝統文化に対する自信と誇りは去る沖縄戦ですべてのものを失ないながら、廢墟のなかから見事に復興させた事例もある。それは沖縄の厳しい自然環境の中で鍛え上げられた強靱な精神と、歴史的背景、前述した進取の気性に富むことに起因することが大きいと考えられる。

視点をぐっと絞って沖縄の絵画についてみてもそのことがいえるかと思う。王国時代はかなり多くの画家が輩出したが、なかには中国へ派遣されて彼地の伝統的な絵画を学んで帰国した画家たちもいた。一方、薩摩の絵師からも絵を学ばせることもあった。したがって琉球の絵画の伝統には中国や日本の技術が導入されていたことがわかる。ところが王国末期になると文化衰退期を迎え、絵画も低迷する。

明治30年代になると、東京美術学校（現東京芸術大学）で黒田清輝の指導を受けた山本森之助（1877～1928）が同校卒業と同時に県立第一中学校に赴任、いち早くあの当時旧派（脂派）に対して新しい絵画である新派（紫派）を沖縄にもたらしている。

山本のあとを受けて本土から何名かの新進気鋭の美術教師が赴任して、もっとも新しい絵画と指導法が伝えられた。それと同時に本土画壇の画家たちの来島も相次ぎ、沖縄をテーマに制作活動が展開される。このことは地元の画家たちに少なからず刺激を与えたことが考えられる。

一方、沖縄地元からも東京美術学校へ進学する画学生も増え、沖縄画壇も充実発展していく。また、明治時代後半になると県内に「丹青協会」という絵画団体が結成されたのははじめ、その後「ふたば会」、「南島美術協会」、「樹緑会」、「龍泉会」等が次ぎ次ぎと結成され、各々に展覧会を開催する。

ところが、このように活況をみせていた沖縄画壇もすべて沖縄戦によって中断され、画家たちの尊い人命を奪い、貴重な作品のすべてを焼失してしまった。

戦争からやっと生きのびた画家たちが、やがて石川市東恩納めざして各地から集まってきた。誰もが肉親や子、知人友人を失ない、家財道具類の一切を焼失、失意のどん底にあった。終戦直後、東恩納にあった沖縄民政府のなかに文化部が設置され、そこで画家たちは教科書の挿絵描きを担当したり、米軍人相手に肖像画を描いて飢えを凌いだ。戦後の美術活動はそのような状況からはじめられたが、1948年、米軍の許可がおりて東恩納から首里西森に「美術村」を建設して移り住む。美術村の誕生の翌年（1949）、第1回沖縄展が開催されたのを皮切りに戦争で中断された絵画活動は再び息を吹き返し活発化していく。それ以後、個展、グループ展等の開催もしだいに増加して今日の隆盛を迎えるに至っている。現在、県下では国内展、個展、回顧展等が盛んに開催され、美術の水準も高い。沖縄の画壇を他都道府県と比較してみても決して劣るものではないが、今日の沖縄画壇の隆盛の牽引役を果たしたのはいうまでもなく、戦前の東京美術学校出身の画家たちであった。これら先

達たちは制作活動の他に大学での後進の指導にも力を傾注してこられた先生方ばかりであった。しかし、この2、3年来、定年退官組が増え、いまや指導者層の間で世代の交替が行なわれつつある。

それに沖縄は復帰十年目を迎え、前述した通り、絵画作品の発表と美術に対する一般県民の理解と関心もかなり盛り上りをみせている。画家は国内だけにとどまらず、最近では国際展への出品も活発化する傾向と、他方に画集の出版も増えている。現在、県立の美術館構想（総合文化センター建設構想の一環）も推進され、一方では県民アートギャラリー、平和祈念堂美術館などの開館も相次いでいる。

筆者は、去る昭和52年度に県教育委員会から県内に残っている絵画遺品の調査員を拝命し、その調査に参加したことがある。昭和53年3月31日付で報告書は刊行されたが、あの時、時間切れで調査出来なかったものは個人的に調査は継続して行ない、その後に判明した絵画資料は紀要第5号（1979）で報告しておいた。

実はあのとき以来、沖縄絵画史年表を是非作成してみたいと考えてきた。ところが、いざ年表をまとめるとなると、正直いってなかなか大変な作業であることがわかった。最初から根気強く資料収集の作業からはじめなければならなかった。他の仕事との関係もあって、そればかりに集中して作業をする訳にもいかなかった。今回もまた時間切れになってしまい完璧を期することが出来なくなった。そこで今回は年表の骨格作りに主眼をおき、試案として発表することにした。細部については今後、加除訂正をしていきたいと思う。

なお、大筋において次ぎのことに留意してまとめてみた。

①展覧会については筆者の判断で取捨選択をした。その場合、第1回展のみを記録したこと。  
②受賞は原則として各展覧会の主なる賞に限定した。例えば沖展では沖展賞、県展では県知事賞に限った。しかし、項目数、他作家との関係で例外も認めたこと。③沖縄タイムス芸術選賞の場合は大賞受賞者のみに限った。④近代では原則として戦前の東京美術学校または他美術学校出身者に限って採用した。物故者はその限りではないこともある。⑤戦前来島した本土画家は出来るだけ取り上げた。ところが、名前はわかっているでも来島年不明の場合は保留にした。なお、戦後は多いので終戦後の一時期に限り、他は割愛した。⑥戦前、東京美術学校工芸科、彫刻科卒業生についてはここでは取り上げなかった。いずれ次ぎの機会にゆずりたい。⑦生年月日不詳で没年だけがわかっている場合は没年の欄にカッコ付で出身地を記入しておいた。名前だけわかっている画家については更に今後も調査を続ける。⑧『琉球漆器考』は、佐渡山安豊との関係でカッコ付で記入しておいた。⑨本年表は昭和57年1月現在で作成した。

以上であるが、先輩諸賢のご指導、ご教示を切に願うしだいである。

#### <付記>

本年表作成にあたり、①琉球歴代画家譜上・下（『美術研究』第45・48号所収）1936年、②『県内絵画遺品調査報告書』（沖縄県教育委員会）昭和53年、③『県内絵画遺品調査報告（『沖縄県立博物館紀要』第5号）1979年、④南風原朝光・大城皓也・名渡山愛順・安谷屋正義・宮城健盛等の各画集、⑤『沖縄近代物故美術家展』（沖縄県立博物館主催）昭和49年、⑥『美術』（『沖縄県史』第6巻・文化2）1975年、⑦その他各展覧会カタログ等が有益であった。

なお、調査にあたっては多くの方々からご教示をいただきました。ここに衷心より厚くお礼を申しあげます。

〈試案・沖縄絵画史年表〉

西 暦	日 本	事 項
1478	文明 10	この頃、画家さぶくろ聞得大君本殿の屏風絵を描く
1612	慶長17	毛泰運、保榮茂親雲上盛良を貝摺奉行に任ず
1614	" 19	欽氏城間清豊（白了）生れる
1626	寛永 3	李基昌崎山親雲上喜俊生れる
1640	" 17	八重山藏元絵師 2 名を採用
1643	" 20	金武王子朝貞白了の絵を藤原安信に謹呈
1644	正保 1	白了死去（31才）
1645	" 2	崎山喜俊薩摩絵師梁瀬清右衛門に師事
1648	慶安 1	崎山喜俊絵師となる
1653	承応 2	琥自謙石嶺親雲上傳莫生れる。 崎山喜俊筑登之座敷に叙せらる
1660	万治 3	崎山喜俊薩摩で雪舟派画法を学ぶ
1663	寛文 3	崎山喜俊黄冠に叙せらる
1666	" 6	杵乗信上原筑登之真知生れる
1667	" 7	崎山喜俊北谷間切伊佐地頭となる
1671	" 11	崎山喜俊勢頭位に叙せらる
1672	" 12	呉師虔山口親雲上宗季生まれる（のち保房に改名）
1674	延宝 2	崎山喜俊南風原間切崎山地頭に転任
1675	" 3	杵王蚤仲曾根筑登之親雲上真秀生れる。 杵乗徳上原筑登親雲上、久米聖廟の壁画を描く（金関丈夫著『琉球民俗誌』）
1678	" 6	石嶺傳莫絵師となる
1681	天和 1	石嶺傳莫筑登之座敷に叙せらる
1683	" 3	石嶺傳莫渡閩し「松竹菊花山水」を描く。 上原真知渡閩し王調鼎、謝天遊、孫億に師事
1684	貞享 1	石嶺傳莫、王調鼎、謝天遊、孫億に師事
1687	" 4	崎山喜俊死去(62才)。 石嶺傳莫「墨絵山水」、「彩色山水」二幅を献上、上原真知帰朝
1688	元禄 1	琥以祚石嶺親雲上傳福生れる。 上原真知筑登之座敷に叙せらる 石嶺傳莫御茶屋能仁堂の壁画を描く。同年黄冠に叙せられ、絵師主取となる
1689	" 2	石嶺傳莫王女の御婚嫁御衣裳の下絵を描く
1691	" 4	上原真知筑登之座敷に叙せられる。同年御書院御座絵を描く 山口宗季絵師となる
1692	" 5	石嶺傳莫、先王の肖像画彩色ならびに御照堂に絵を描く（翌年まで） 上原真知も御照堂で肖像画を描く（翌年まで）
1693	" 6	石嶺傳莫先王九人の肖像画を描く
1697	" 10	円覚寺仏殿壁画原作に彩色
1698	" 11	石嶺傳莫「松竹菊花山水彩色」の屏風絵を描く。
1699	" 12	石嶺傳莫勢頭座敷に叙せらる。 山口宗季筑登之座敷に叙せらる
1700	" 13	上原真知渡閩
1702	" 15	上原真知帰朝途中遭難し死去（37才）

西 曆	日 本	事 項
1703	元禄16	石嶺傳莫死去(46才)
1704	宝永1	山口宗季渡閩、孫億、順梁享、鄭大観に師事
1705	" 2	山口宗季「花鳥図」を描く(藪本公三氏蔵)
1707	" 4	山口宗季帰朝
1710	" 7	山口宗季絵師主取となり、勢頭座敷に叙せらる。同年今帰仁間切仲宗根地頭となる。 石嶺傳莫絵師となり、筑登之座敷に叙せらる。 仲曾根真秀絵師筑登之座敷に叙せらる
1714	正徳4	仲曾根真秀黄冠に叙せらる
1715	" 5	山口宗季「花鳥図」を描く(大和文華館蔵)。 この頃、薩摩の画家木村探元「程順則像」を描く(福岡在、名護家の子孫蔵)
1716	享保1	山口宗季「白梅椿水仙小禽図」(在来国)、「山水図」を描く。同年、知念間切山口の地頭となる
1717	" 2	山口宗季円覚寺壁画の尚円肖像画を掛軸に転写(翌年完成)
1718	" 3	殷元良座間味庸昌生れる。 石嶺傳福黄冠に叙せらる
1719	" 4	山口宗季「仏桑花横物」、「鶏頭赤花堅物」、「デイゴ」各一幅を仕上げる
1721	" 6	山口宗季円覚寺の仏画制作、尚豊王・尚質王の肖像画を描く
1724	" 9	絵師等士籍に列せらる
1725	" 10	石嶺傳福「花鳥図」12枚、「山水図」2枚献上
1729	" 14	主取1人、絵師6人より絵師二人減ず、 殷元良画才を認められ禁中に収養される(12才)。山口宗季、殷元良に画技を伝授、 仲曾根真秀勢頭座敷に叙せらる 石嶺傳福「竹の図」を描く
1733	" 18	殷元良若里之子に叙せらる。仲曾根真秀死去(56才)
1734	" 19	石嶺傳福絵師主取となる
1737	元文2	呉著温屋慶名筑登之政賀生れる
1738	" 3	石嶺傳福、殷元良内間御殿碑文の文字、図柄等の仕事に従事
1739	" 4	石嶺傳福乾隆帝より拝領の額仕立てる
1743	寛保3	山口宗季死去(72才)
1744	延享1	石嶺傳福、貝摺、沈金彫物等新しい試みで御献上物、御用物を仕上げる
1746	" 3	殷元良黄冠に叙せらる
1747	" 4	石嶺傳福死去(60才)
1748	寛延1	殷元良「鶏図」を描く(大倉文化財団所蔵) 向元瑚小橋川朝安生れる
1752	宝暦2	殷元良渡閩し、翌年北京に赴く
1753	" 3	殷元良「山水図」を描く(正木美術館蔵)
1755	" 5	殷元良帰朝。この年尚敬王肖像画を描く 殷元良「山水図」を描く(石垣市 吉野成氏蔵)
1756	" 6	殷元良御書院御物当となる
1758	" 8	殷元良御近習役となる。 呉著温絵師となり、筑登之座敷に叙せらる
1759	" 9	殷元良座間味間切惣地頭となる 「片目地頭代肖像画」描かれる(喜久村絮輝氏蔵)
1761	" 11	大浜善繁生れる(八重山)

西 曆	日 本	事 項
1762	宝暦12	殷元良「竹の図」描く(県立博物館蔵)。 張忠令島袋筑登之親雲上宗雍生れる
1764	明和 1	「琉球中山王使者登城行列図」2巻(県立博物館蔵)
1765	" 2	呉著温絵師となる
1766	" 3	向元瑚絵師となり、若里之子に叙せらる
1767	" 4	殷元良死去(50才)。 呉毘行屋慶名筑登之政喜生れる 慎思九泉川筑登之親雲上寛英生れる
1768	" 5	向元瑚絵師となる
1769	" 6	呉著温宮古御藏筆者となる
1773	安永 2	伊是名広管生れる(八重山)
1774	"	向元瑚納殿筆者となり、同年黄冠に叙せらる
1777	" 6	翁宏熙伊良皆盛昆(萃峰)生れる 向廷楷宜野湾親方朝昆生れる
1779	"	呉著温仕上世座大屋子となる
1784	天明 4	向元瑚御物奉行假筆者となる
1785	" 5	呉著温給地御藏大屋子となる 慎思九絵師となり、筑登之座敷に叙せらる
1786	" 6	向元瑚御物奉行筆者相付となる 八重山桃林寺及び権現堂再建 馬執宏豊平良金(竹西)生れる
1787	" 7	張忠令絵師となり、筑登之座敷に叙せらる 毛世輝我謝盛保(筆山)生れる
1789	寛政 1	慎思九絵師となる 黒島仁屋八重山藏元絵師となる
1790	" 2	伊是名広品生れる(八重山)
1791	" 3	慎克明泉川筑登之寛郁生れる
1792	" 4	向元瑚御物奉行筆者となる。 張忠令絵師となる
1793	" 5	慎思九絵師となる
1794	" 6	張忠令絵師主取となり黄冠に叙せらる
1795	" 7	向元瑚、尚穆、尚哲の肖像画を描く。 慎思九絵師越勤に任命
1796	" 8	呉毘行絵師となり筑登之座敷に叙せらる。 向元瑚、尚円より尚哲までの肖像画の控えを各二幅づつ仕上げる(慎思九加勢し、 張忠令助手となる)
1797	" 9	慎思九・呉毘行絵師詰越となる
1798	" 10	毛徳潤沢岷安長生れる
1799	" 11	呉毘行再び絵師詰越となる。 慎思九絵師主取となり黄冠に叙せらる
1800	" 12	呉著温死去(64才)。 翁成藩伊舎堂盛方生れる
1803	享和 3	向元瑚、尚温の肖像画大小二幅描く(慎思九加勢し、張忠令助手となる)。同年、 今帰仁間切平敷地頭となる
1804	文化 1	向元瑚御物奉行主取となる

西 曆	日 本	事 項
1805	文化 2	向元瑚、尚成王の肖像画大小二幅を仕上げる（呉昆行・慎思九加勢をする） 呉昆行絵師となる
1806	" 3	慎思九絵師越勤に任命。 毛長禧佐渡山里之子親雲上安健生れる
1807	" 4	向元瑚、明年来島の冊封使の評価主取となる（兼山奉行）。 呉昆行絵師詰越となる。
1808	" 5	慎克明寛郁絵師となり筑登之座敷に叙せらる 毛允良亀川盛武(易齊)生れる。
1809	" 6	黒島仁屋唐船漂着の時、唐船及び碇泊所などの写生をして首里王府に報告(八重山) 向元瑚大美御殿大親に任命。 慎思九絵師主取となる。 慎克明絵師となる
1810	" 7	呉昆行絵師となり黄冠に叙せらる
1811	" 8	張忠令大台所大屋子となり、同年勢頭座敷に叙せらる
1812	" 9	慎克明絵師となる
1813	" 10	向元瑚西原間切小橋川の地頭に転任。同年申口座にのぼり、更に鍛治奉行となる。 慎思九大台所大屋子となり、勢頭座敷に叙せらる。 呉昆行絵師主取となる(勤役6年)
1814	" 11	慎克明絵師となる
1815	" 12	向元瑚御用意中取となる。同年御船手奉行となる 大浜善繁死去(55才)
1817	" 14	向元瑚、尚円より尚敬までの肖像画を彩色する
1818	文政 1	伊是名広管死去。 慎思九絵師主取となる
1821	" 4	慎克明死去(31才)。 張忠令御物大屋子となる
1822	" 5	慎思九「山水図」、「花鳥図」(2枚)他を描く 呉昆行宮古御蔵大屋子となり、勢頭座敷に叙せらる 張忠令絵師となる。 慎思九「山水図」を描く
1823	" 6	張忠令絵師主取となる
1825	" 8	呉昆行死去(58才) 毛徳潤死去(28才)
1826	" 9	慎思九仕上世座大屋子となる
1828	" 11	向元瑚、尚育王即位(摂政)の大慶により紫冠に叙せらる。 張忠令「爬龍舟漕方之図」描く。 毛長禧王命により「花鳥図」を描く
1829	" 12	慎思九「那覇綱挽之図」を描く。 大宜味仁屋「馬の図帳」を描く(八重山博物館蔵)
1830	天保 1	向元瑚首里八景を描く。 慎思九座敷に叙せらる。 筆山死去(44才)
1831	" 2	八重山蔵元絵師喜友名安信生れる。 杵盛勲仲曾根筑登之真裕生れる

西 曆	日 本	事 項
1832	天保 3	向元瑚奥御書院の「龍図」を描く。 張忠令錢御藏大屋子となり、同年座敷に叙せらる 毛長禧若里之子にのぼる 「座楽並踊りの図」(絵巻)江戸で描かれる(筆者不詳)県立博物館蔵 毛文達、古波蔵安章(印山)生れる
1833	" 4	毛長禧「御馬図」「名馬図」(4枚)、「花鳥図」(4枚)を描く
1834	" 5	安仁屋政伊(ぜう林)生れる 向有章宜湾朝宏生れる
1835	" 6	向廷楷死去(59才)
1837	" 8	毛長禧「尚灑王御後絵」を描く(翌年まで) 翁成藩死去(38才)
1838	" 9	張忠令死去(77才)
1839	" 10	「東任鐸肖像画」描かれる(知念政訓氏蔵) 毛長禧、尚円の肖像画描き替える 9月「大虎絵」1枚、「花鳥図」9枚、「右旋白螺図」2枚、王命により描く(家譜)
1840	" 11	向元瑚「寿老人」「龍図」を描く 毛長禧御米御藏筆者となる
1841	" 12	向元瑚死去(93才) 毛長禧御寝廟の「唐御燈爐」一對、「二十四孝之図」12枚を描く、同年黄冠に叙せらる
1842	" 13	毛長禧「仙人図」「鶉之図」各2枚を描く
1843	" 14	毛長禧「鷓鴣隼(早房)之図」(元尚家蔵)「花房御鷄之図」を描く 查丕烈仲曾根真補生れる(没年不明) 森五郎筆、応需写「琉球人京府行列之図」描かれる(大嶺薫美術館蔵)
1844	弘化 1	毛長禧「墨絵」20枚描く 慎思九死去(78才)
1846	" 3	毛長禧「彩色花鳥図」(4枚)「彩色仏朗西人之図」を描く
1847	" 4	毛長禧「仙人之図」(4枚)、「花鳥図」(4枚)を描く
1848	嘉永 1	馬執宏死去(63才) 查盛勲絵師となり、筑登之座敷に叙せらる
1849	" 2	毛長禧「唐兔之図」(2枚)、「馬之図」(4枚)、「三毛猫之図」、「兎絵」、「矮鷄之図」 「鷄之図」、「白鷹之図」を描く。 翁宏熙伊良皆盛昆死去(70才)
1851	" 4	毛長禧「極彩色花鳥図」(2枚)、「薄彩色仙人図」(3枚)、「墨絵」(3枚)を描く
1852	" 5	毛長禧、尚育王の肖像画を描き替える(翌年まで) 查盛勲絵師となる 孟有文長嶺宗恭(華国)生れる 毛永保佐渡山安豊(竹庭)生れる
1853	" 6	尚其功宜湾朝範生れる
1855	安政 2	毛長禧米御藏大屋子となる 伊是名広品死去(64才) 查盛勲絵師となる
1856	" 3	毛長禧、尚元、尚永、尚純、尚穆、尚質の肖像画を描き替える 同年当敷に叙せらる
1857	" 4	查盛勲絵師となる

西 曆	日 本	事 項
1859	安政 6	毛長禧、尚清、尚貞の肖像画を描き替える
1860	万延 1	毛長禧、尚円王の肖像画の顔の部分の色塗り替える
1861	文久 1	查盛勲絵師となる
1864	元治 1	查盛勲絵師となる
1865	慶応 1	查盛勲鍛冶奉行筆者となる 查丕烈絵師となり、筑登之座敷に叙せらる 毛長禧死去 (60才)
1866	" 2	尚明德義村朝義 (仁斎、得寿) 生れる
1868	明治 1	島袋筑登之宗展「宜寿次盛安肖像画」を描く (宜寿次盛秀氏蔵) 比嘉盛清 (華山) 那覇市若狭町に生れる
1870	" 3	向有章宜湾朝宏死去 (37才) 向基功宜湾朝範死去 (18才)
1872	" 5	絵を学ぶ者の試業をする
1874	" 7	仲曾根真補 (嶂山) 「花鳥図」を描く (長嶺将秀氏蔵)
1875	" 8	安仁屋政伊琉球藩最後の絵師登用試験に合格する
1879	" 12	(廃藩置県)
1881	" 14	古波蔵安章「蘭の図」を描く (県立博物館蔵)
1885	" 18	12月27日、山田真山那覇市壺屋町に生れる 9月16日、恵光翰友寄喜恒 (石門) 死去
1886	" 19	3月渡嘉敷唯選 (衣川) 那覇市若狭町に生れる 古波蔵安章 (印山) 死去 (56才) 安仁屋政伊日本帝国絵画協会展で「鐘儀之図」入選する 長嶺宗恭 (華国) 絵画展覧会へ「雪中山水図」出品する
1888	" 21	比嘉華山「琉球人男女の図」を描く (県立博物館蔵) 毛永保佐渡山安豊、木協啓四郎『琉球漆器考』 (石澤兵吾著) の図案を描く
1889	" 22	(『琉球漆器考』出版)
1890	" 23	毛允良亀川盛武 (易齊) 死去 (83才) 比嘉華山美術協会展で二等賞受賞 長嶺華国第三回内国勸業博覧会に「秋景山水図」を出品する 神山里之子親雲上政成祥雲寺へ「絵馬」を奉納する (筆者不詳)
1892	" 25	比嘉景常首里山川町に生れる 喜友名安信死去 (62才)
1894	" 27	仲曾根嶂山「首里旧城之図」を描く (県立博物館蔵)
1894	明治 27	5月27日 屋部憲 (金墮) 首里山川町に生れる
1896	" 29	7月2日 金城正栄大里村板良敷に生れる
1897	" 30	佐渡山安豊死去 (45才)
1898	" 31	2月19日 島田寛平首里崎山町に生れる
1900	" 33	1月16日 嘉数能愛那覇市上之蔵に生れる 9月29日 我部政達那覇市に生れる 浦崎永錫那覇市に生れる
1902	" 35	この頃、山本森之助第一中学校の図画教師として赴任 安仁屋政伊死去 (68才) 山本森之助「琉球の燈台」を描く (東京芸術大学蔵)
1903	" 36	8月18日 山里永吉那覇市に生れる 2月10日 宮城与徳名護市に生れる

西 曆	日 本	事 項
		当原昌松久米島具志川村に生れる
1904	明治37	9月21日 津山彬生れる 2月6日 南風原朝光那覇市安里に生れる 4月26日 末吉安久首里儀保町に生れる 6月5日 永丘智行首里に生れる
1906	" 39	9月30日 宮城清栄南風原町宮平に生れる 1月22日 名渡山愛順那覇市松下町に生れる 比嘉華山美術協会展で三等賞受賞
1907	" 40	山田真山 東京美術学校入学(彫刻科、日本画科で学ぶ) 2月28日 森田永吉、八重山石垣市に生れる 比嘉華山 美術協会展で三等賞受賞
1908	" 41	山田真山中国北京芸徒学堂の彫刻科、図案科の教授となる 9月30日 山里将聖首里に生れる 金城唯貞(南海)第1回丹青協会展へ「獅子の図」(墨絵)を出品する 山口瑞雨第1回丹青協会展へ「稻雀」を出品する
1909	" 42	3月 新川唯盛那覇市に生れる 西銘生楽第2回丹青協会展へ出品する(作品名不明) 親泊英繁第2回丹青協会展へ出品する「風景」を出品する
1910	" 43	山口瑞雨第2回丹青協会展へ出品する「猫」「山水図」を出品する 比嘉華山第3回丹青協会展で一等賞受賞
1911	" 44	2月10日 大嶺政寛那覇市松下町に生れる 10月5日 富川盛智首里に生れる 比嘉華山第4回丹青協会展で一等賞受賞
1912	大正1	1月1日 宮平清一渡名喜村に生れる 4月14日 大城皓也那覇市に生れる 12月10日 金城安太郎那覇市住吉町に生れる この頃、山口瑞雨「程順則肖像画」(原作者不明)を模写か(?)
1913	" 2	9月8日 柳光観(本名伊佐清吉)首里汀良町に生れる 5月13日 山元恵一那覇市西村に生れる 7月16日 榎本正治生れる
1915	" 4	11月23日 宮城健盛南風原町宮平に生れる
1916	" 5	12月5日 安次嶺金正名護市宮里に生れる
1918	" 7	満谷国四郎「島の女」を制作(尚家所蔵) この頃、小杉未醒(放庵)『日本風景版画』第7集「琉球の部」取材のため来島
1919	" 8	4月27日 玉那覇正吉那覇市下泉町に生れる
1920	" 9	満谷国四郎「島と人と馬」を制作(尚家所蔵) 8月 第1回ふたば会展開催〔渡嘉敷唯選(衣川) 野津久保、知念積吉、島田寛平、山里永吉 浦崎永錫、新崎新太郎、前中留吉等出品〕
1921	" 10	8月26日 安谷屋正義東京滝野川に生れる 鎌倉芳太郎沖縄県女子師範学校、県立第一高等女学校の図画教師に赴任
1922	" 11	西銘生楽死去(那覇市若狭町出身)
1923	" 12	山里永吉日本美術学校入学(2年次編入)
1924	" 13	竹島景明東京美術学校卒業 4月 鎌倉芳太郎琉球芸術調査のため来島 山田真山聖徳記念絵画館壁画「琉球藩設置」を制作(開館は大正15年)

西 曆	日 本	事 項
1925	大正14	3月 嘉敷能愛東京美術学校西洋画科卒業 3月 我部政達東京美術学校西洋画科卒業 9月 宮城与徳サンディエゴ官立美術学校卒業
1926	昭和 1	山里永吉の作品が『近代の美術』紙上に掲載される
1927	" 2	6月12日 渡嘉敷唯選死去
1928	" 3	森田永吉同舟舎絵画研究所で学ぶ この頃、比嘉華山「婚姻風俗図」（額装一對）を描く（県立博物館蔵）
1929	" 4	南風原朝光、名渡山愛順那覇で二人展開催 長嶺華国「芭蕉の図」を描く（県立博物館蔵） 南風原朝光日本美術学校卒業 『世界美術全集』（平凡社）に琉球の美術掲載される
1930	" 5	8月 名渡山愛順「泰西名画模写展」（個展）開催 長嶺華国「芭蕉の図」を描く（中野成氏蔵）
1931	" 6	南風原朝光、白日会賞受賞 新川唯盛大潮展にて特選 浦崎永錫『美術界』を創刊する
1932	" 7	長嶺宗恭死去（81才） 名渡山愛順東京美術学校油絵科（和田英作教室）卒業 沖縄美術協会結成、東京神田の三省堂画廊で第1回展開催（出品者、南風原朝光 大城皓也、兼城賢章、森田永吉、新川唯盛、当原昌松、仲間武）
1933	" 8	山崎省三来島
1934	" 9	大城皓也東京美術学校油絵科（小林万吾教室）卒業
1935	" 10	この頃、河原修平来島「南国・辻情緒」など制作する
1937	" 12	津山彬大潮展初入選 伊藤清永来島以後昭和15年までに四回来島し制作する
1938	" 13	10月29日 野津唯尹（久保）死去（那覇市若狭町出身） 山元恵一東京美術学校油絵科（田辺至教室、小林万吾教室）卒業 仲嶺康輝多摩帝国美術学校西洋画科卒業 南風原朝光の案内で藤田嗣治、加治屋隆二、竹谷富士夫来島 斧山万次郎来島「守礼門」・「首里風景」など7点制作する
1939	" 14	10月29日 比嘉盛清死去（69才）
1940	" 15	大嶺政寛春陽会賞受賞 金山平三来島
1941	" 16	比嘉景常死去 名渡山愛順第28回光風会展で三星賞受賞 3月 宮城健盛東京美術学校図画師範科卒業 6月 南風原朝光個展開催（会場 那覇市内山形屋） 12月 安次嶺金正東京美術学校油絵科卒業
1942	" 17	南風原朝光第1回台日文化賞受賞 大嶺政寛文部省展に賛助出品する
1943	" 18	南風原朝光国画会賞受賞 8月2日 宮城与徳死去
1944	" 19	9月 安谷屋正義東京美術学校工芸科図案部卒業 9月 玉那覇正吉東京美術学校彫刻科（石井鶴三教室）卒業
1945	" 20	3月14日 尚明德義村朝義（仁斉・得寿）死去

西 暦	日 本	事 項
1947	昭和22	6月18日 宮城清栄死去 終戦直後、東恩納に文化部が設置される(美術家が集まり、教科書の挿絵描き、美術活動開始される) 沖縄美術家協会設立(共同アトリエと陳列館完成) 宮平清一旺玄会会員賞受賞 大嶺信一第1回個展(戦後沖縄における第1号の個展)
1948	" 23	首里儀保町(西森)に美術村が誕生
1949	" 24	第1回沖展開催(7月2日~14日) 宮城健盛米国民政府主催全琉球美術展で受賞
1950	" 25	琉球大学に美術工芸科が設置される 第1回5人展開催(3月31日~4月2日)[第9回展まで開催、1954年11月25日解散] 9月4日 金城正栄死去
1951	" 26	名渡山愛順・大嶺政寛第2回国民指導員として米国美術界視察
1952	" 27	屋部憲死去 山田真山『沖縄絵物語』(第1巻)出版
1953	" 28	名渡山愛順・大嶺政寛等の提唱で「1955年協会」結成(55年解散) 琉米親善絵画展開催 山田真山『沖縄絵物語』(第2巻)出版
1955	" 30	島田寛平沖展で美術功労賞受賞 大嶺政敏春陽会賞受賞 安次嶺金正第15回創元会賞受賞
1956	" 31	沖縄美術家連盟結成、10月に第1回展開催 11月 美緑会結成第1回展開催 慶田喜一第16回創元会賞受賞 二科会沖縄支部結成 新川唯盛大潮展特選
1957	" 32	安谷屋正義第34回春陽会賞受賞 山田真山「平和観音像」(のちの平和祈念像)制作に着手 7月26日 宮平清一死去 棟方志功板業展開催(12月3日~6日)主催・沖縄タイムス社
1958	" 33	1月17日 自了筆「白澤之図」県の有形文化財(絵画)に指定される(米須清方氏蔵) 第1回創斗展開催(1月11日~13日) 6月 安谷屋正義「抽象絵画の展開」展出品(国立近代美術館) 鳥海青児滞欧素描展開催(沖縄タイムス社主催)
1959	" 34	末吉安久第33回国展「いきもの」(40号)入選 12月25日 嘉数能愛死去 儀間比呂志行動展新人賞受賞
1960	" 35	12月3日 岡本太郎来沖 地元の画家、琉球大学美術工芸科学生と語る 第1回琉球美術展開催(3月11日~14日)昭和会館1階ホール 1959年度選抜秀作美術展開催(4月1日~10日)朝日新聞社、沖縄タイムス社共催(会場 沖縄タイムスホール) 9月28日 安谷屋正義米国ロックフェラー財団基金により、アメリカ、イギリス、フランス、イタリア諸都市の美術視察 10月4日 山里将聖死去

西 曆	日 本	事 項
1961	昭和36	琉球政府主催「沖縄選抜美術展」ハワイ ホノルル市で開催 与儀達治第7回一陽会特待賞受賞 1960年度選抜秀作美術展開催(朝日新聞社・沖縄タイムス社共催) 9月28日 南風原朝光死去(58才) 神山泰治第13回沖展にて沖展賞受賞
1962	" 37	「明治・大正・昭和洋画巨匠展」開催(2月1日～8日)会場、沖縄配電ホール グループ耕第一回展(会場 沖縄タイムスホール) 仲地唯涉第14回沖展にて沖展賞受賞
1963	" 38	丸山哲士第15回沖展にて沖展賞受賞
1964	" 39	山田真山第1回琉球新報賞(美術に関する功績)受賞 2月16日 我部政達死去 3月26日 榎本正治死去 儀間朝健第16回沖展にて沖展賞受賞
1965	" 40	与儀達治第11回一陽会会友賞受賞 8月 第1回全琉教師美術展開催 渡慶次真由第17回沖展にて沖展賞受賞
1966	" 41	2月28日 森田永吉死去 渡慶次真由第18回沖展にて沖展賞受賞
1967	" 42	大城皓也、大嶺政寛、安次嶺金正、安谷屋正義、玉那覇正吉、第1回沖縄タイム ス芸術選賞大賞受賞 大城皓也二科展会員努力賞受賞 宮城与徳遺作展開催(5月東京銀座精美堂画廊、7月大阪東宝画廊) 沖縄旺玄会結成 第1回沖縄旺玄展開催 7月29日 安谷屋正義死去 12月28日 島田寛平死去 新城美代子第19回沖展にて沖展賞受賞
1968	" 43	4月20日『南風原朝光遺作画集』出版(南風原朝光遺作画集刊行会) 垂熱帯派結成 美術村の消滅 大浜英治第20回沖展にて沖展賞受賞
1969	" 44	永丘智行死去
1970	" 45	8月8日 名渡山愛順死去(65才) 沖縄現代画家秀作展開催 10月4日～20日(琉球新報社主催) 第1回沖縄新象展開催(会場 沖縄タイムスホール)
1971	" 46	山里永吉第7回琉球新報賞(沖縄の文化に貢献)受賞 名渡山愛順遺作展開催(8月10日～15日)会場、琉球新報ホール 喜久村徳男旺玄会賞受賞 金城規克第45回国展新人賞受賞 田場博文第23回沖展にて沖展賞受賞 12月『沖縄の芸術家たち』(仲泊良夫著)出版
1972	" 47	宮城健盛第6回沖縄タイムス芸術選賞大賞受賞 8月 光陽会沖縄支部結成、9月結成記念展(会場 沖縄タイムスホール) 金城規克第46回国展新人賞受賞
1973	" 48	山元恵一第7回沖縄タイムス芸術選賞大賞受賞 第1回美術展覧会(県展)開催(県教育委員会)

西 曆	日 本	事 項
1974	昭和49	5月 石嶺伝郎新世紀美術協会展S氏賞受賞 『安谷屋正義・絵と文』出版(安谷屋正義作品集刊行会) 『岡田青慶日本画・画集琉球』出版 比嘉武史第25回沖展にて沖展賞受賞 沖繩近代物故美術家展開催(2月23日~3月17日)沖繩県立博物館主催 3月1日 安仁屋政栄死去 佐久原俊子第26回沖展にて沖展賞受賞
1975	" 50	7月10日 浦崎永錫著『日本近代美術発達史(明治篇)』(東京美術刊)出版 大城皓也画集出版記念展開催(8月13日~24日)会場 沖繩県立博物館 第1回郷土の女性作家による作品展開催(のち沖繩女流美術家展と改称) 第1回全日本美術協会沖繩支部展開催(沖繩タイムスホール) 7月『大城皓也の世界』(画集)出版「大城皓也の世界」編集委員会) 屋富祖盛美第49回国展新人賞受賞 比嘉武史第18回新象展賞受賞
1976	" 51	山田真山勲三等瑞宝章叙勲 宮城健盛旺玄展委員功労賞受賞 上地弘第28回沖展にて沖展賞受賞 4月23日 津山彬死去
1977	" 52	鎌倉芳太郎関係資料(蔵元絵師の画稿)展開催(10月20日~30日)石垣市立八重山博物館主催 1月29日 山田真山死去(91才) 11月4日 山元恵一死去(勲四等旭日小綬章叙勲) 永山信春第6回県展にて県知事賞受賞
1978	" 53	山元恵一遺作展開催(12月6日~15日)会場 沖繩県立博物館 山田真山作「沖繩平和祈念像」(堆錦塑像)完成 与儀達治第12回沖繩タイムス芸術選賞大賞受賞 赤嶺正則第30回沖展にて沖展賞受賞 米須敏三郎第7回県展にて県知事賞受賞 3月31日 『県内絵画遺品調査報告書』(県教育委員会)出版 4月1日 孫億筆「花鳥図」県の有形文化財(絵画)に指定される(喜久村繁輝氏蔵) 『沖繩の偉人山田真山伝』(崎原久著)出版 『美の沖繩-本土俊英作家特別洋面展画集』(琉球新報社)出版
1979	" 54	2月 石嶺伝郎第13回沖繩タイムス芸術選賞大賞受賞 4月9日 殷元良筆「雪中雉子の図」・「花鳥図」県の有形文化財(絵画)に指定される(県立博物館蔵) 4月 石嶺伝郎新世紀美術協会展会員特別賞N氏賞受賞 安谷屋正義回顧展開催(7月18日~29日)会場 沖繩県立博物館 南風原朝光・名渡山愛順遺作2人展開催(11月20日~12月2日)沖繩県立博物館主催 8月28日 沖繩県立総合文化センター(美術館を含む)設立についての答申出る 「沖繩に生きる大嶺政寛の世界」展開催(6月1日~5日)沖繩タイムス社主催 7月15日 『名渡山愛順画集』(名渡山愛順画集刊行委員会)出版
1980	" 55	永山信春第8回県展にて県知事賞受賞 吉山清晴第31回沖展にて沖展賞受賞 儀間比呂志第14回沖繩タイムス芸術選賞大賞受賞

1981	昭和 56	<p>安次富長昭「抽象への展開」展開催(10月5日～15日)会場 沖縄県立博物館  山田真山画伯遺作展開催(10月1日～31日)沖縄平和祈念堂  7月12日 大城皓也死去  2月1日 富川盛智死去  7月 沖縄県美術家連盟結成  与那覇朝大第9回県展にて県知事賞受賞  10月1日 県民アートギャラリー開設(県民文化課)  平和祈念堂美術館開館(財団法人 沖縄平和公園建設協会)  久場トヨ第15回沖縄タイムス芸術選賞大賞受賞  「義村朝義展」開催(1月10日～25日) 沖縄県立博物館主催  「富川盛智遺作展」開催(2月10日～12日) 沖縄タイムス第二ホール  「沖縄現代絵画巨匠展」開催(3月13日～18日) 沖縄物産センター画廊  「宮城健盛退官記念展」開催(6月17日～26日) 会場 沖縄県立博物館  「沖縄作家5人遺作展」開催(8月15日～昭和57年1月31日) 平和祈念堂美術館  『宮城健盛画集』出版(宮城健盛退官記念展実行委員会)  3月31日 末吉安久死去  川平恵造第10回県展にて県知事賞受賞</p>
1982	" 57	<p>1月 新生美術協会結成</p> <p style="text-align: right;">㊦昭和57年1月現在作成</p>

(宮城篤正編)

## 琉球列島両生爬虫類文献目録(暫定)

当山昌直\*

Publications on the Herpetology of the Ryukyu Islands (Tentative List)

Masanao TOYAMA

九州の南端から台湾との間に所在する琉球列島の両生爬虫類に関しては、これまでに書かれた研究論文がたくさん存在する。しかし、両生爬虫類に関する研究はまだ遅れており今後の調査研究を待つべきところが多い。そこで、今後の調査研究に便宜をはかる目的で現在までの研究成果をまとめた文献目録を作成してみた。何分にも短期間の作業であるため十分にそろっているとはいえない。今後とも収集と整理を続け、より完全なものにしていきたい。

文献は、琉球列島産の陸棲の両生爬虫類を対象とし、特に分類及び生態を中心とする内容のものを収録した。また、便宜上、台湾産の両生爬虫類も対象に含め、更に、他の地域のものでも琉球列島の両生爬虫類に関する記述があれば収録した。なお、項目別に分けて整理したが、便宜的に分けられたものも少なくない。原著かもしくはそのコピーを入手して点検するように努めたが、孫引きにたよらざるをえない入手困難な文献もあり、その場合は表題に基づいて分類した。特に、1947年以前の文献はGans (1949) の索引を利用した。

文献目録を作製するにあたり、大阪市立自然史博物館柴田保彦氏には原稿の検討などで、特別に助けていただいた。まず厚くお礼申し上げたい。その他、深田祝博士・高良鉄夫博士・千石正一氏・宇都宮妙子氏・森田忠義氏・松井正文氏・疋田努氏には文献の情報を提供していただいた。これらの方々や、ここに名を挙げていない協力して頂いた多数の皆さんに深い感謝の意を表する。

### 両生爬虫類 (Herpetology)

安谷屋昭・川上勲・久貝勝盛・砂川信夫・下地恵常・下地秀男・宮国進, 1977. 大神島の自然調査.

平良市の文化財: 45-73. 平良市教育委員会.

Barbour, T., 1908. Some new Reptiles and Amphibians. Bull. Mus. Comp. Zool. Harvard coll., 51 (12) : 315-325.

———, 1909. Notes on amphibia and reptilia from eastern Asia. Proc. New England Zool. Club, 1909(4) : 53-78.

———, 1917. A most regrettable tangle of names. Occ. Papers, Mus. Zool. Univ. Michigan, (44) : 1-9.

Boettger, O., 1895. Neue Frösche und Schlangen von den Liu-Kiu-Inseln. Berichte und mitteilungen der Offenbacher Vereinigung der Naturkunde, 33-6 (1895) : 101-117.

———, 1895. Neue Frösche und Schlangen von den Liukiu-Inseln. Zool. Anz., 18 : 266-270.

Boulenger, G. A., 1887. On a collection of reptiles and batrachians made by Mr. H.

(★とうやま まさなお 県立博物館充指導主事)

- Pryer in the Loo Choo Islands. Proc. Zool. Soc. London, 1887 : 146-150.
- , 1892. Descriptions of new reptiles and batrachians from the Loo Choo Islands. Ann. Mag. Nat. Hist., [6] 10 : 302-304
- , 1908. Descriptions of a new frog and a new snake from Formosa. Ann. Mag. Nat. Hist., [8] 2 : 221-222.
- , 1909. Descriptions of four new frogs and new snake discovered by Mr. H. Sauter in Formosa. Ann. Mag. Nat. Hist., [8] 4 : 492-496.
- Brown, A. E., 1902. A collection of reptiles and batrachians from Borneo and the Loo Choo Islands. Proc. Ac. Nat. Sci. Philadelphia, 1902 : 175-186.
- 千木良芳範, 1977. 両生類・爬虫類. 名護市天然記念物調査シリーズ第1集, 名護市動物総合調査報告書 : 129-179. 名護市教育委員会.
- , 1978. 阿嘉・屋嘉比島及び久場島の両生・爬虫類. 沖縄県天然記念物調査シリーズ第12集, ケラマジカ実態調査報告III : 157-162. 沖縄県教育委員会.
- 知念績一, 1963. 両生類及び爬虫類. 10周年記念誌 : 51-53. 沖縄生物教育研究会.
- 陳兼善, 1956. 台湾脊椎動物誌. 台湾開明書店, 台北. 619p.
- , 1969. 増訂再版台湾脊椎動物誌, 下冊. 台湾商務印書館, 台北. 440p.
- Darlington, Jr., P. J., 1957. Zoogeography : the geographical distribution of animals. John Wiley and Sons ; London, Chapman and Hall, New York. 675p.
- Fritze, A., 1894. Die Fauna der Liu-Kiu-Insel Okinawa. Zool. Jahrb. Syst., 7 : 852-926.
- Gans, C., 1949. A Bibliography of the Herpetology of Japan. Bull. Amer. Mus. Nat. Hist., 93(6) : 389-496.
- Hallowell, E., 1860. Report upon the Reptilia of the North Pacific exploring expedition under command of Capt. John Rogers, U.S.N. Proc. Ac. Nat. Sci. Philadelphia, 12 : 480-510.
- 長谷川善和, 1980. 琉球列島の後期更新世～完新世の脊椎動物. 第四紀研究, 18(4) : 263-267.
- ・野原朝秀, 1978. 石垣市石城山動物遺骸群集の概要. 石城山一緊急発掘調査概要 : 49-78. 沖縄県教育委員会.
- ・大塚裕之・野原朝秀, 1973. 宮古島の古脊椎動物について (琉球諸島の古脊椎動物相—そのI). 国立科博専報, (6): 39-50, pls.6-7.
- Hatta, S., 1928. Some points on the zoogeography of Japan. Proceedings of the 3d Pan-Pacific Society Congress, Tokyo (1926) I : 1024-1038.
- 坂座眞忠直, 1933. 本県動物分布の特異性と理科教育. 沖縄教育, 201 : 37-43.
- , 1936. 本県の動物分布の特異性と興味. 沖縄教育, 244 : 23-32.
- 日野光次, 1928. 陸上動物. 行幸記念奄美大島に於ける博物調査報告書 : 1-12.
- ・森田忠義, 1964. 鹿児島動物. 鹿児島自然 : 173-193.

- 平岩馨邦・太田嘉四夫・宇田川竜男・佐藤淳夫・松井孝爾・内田照章, 1958. 奄美群島生物調査報告一特に鼠と蛇との関係を追求めて. 九州大学農学部学芸雑誌, 16(4) : 525-546.
- 平良市教育委員会(編), 1979. 郷土の自然—中学理科指導資料—. 平良市教育委員会, 沖縄. 190p.
- 堀川安市, 1933. 蛇と蛙の分布の廣狹と台湾島内に於ける盛衰に就て. 台湾博物学会会報, 23 (128・129) : 376-381.
- 池原貞雄, 1973. 大東島の陸産脊椎動物. 大東島天然記念物特別調査報告 : 52-63. 文化庁.
- , 1974. 久米島の陸上脊椎動物. 沖縄自然研究会調査報告第1号, 久米島県立自然公園候補地学術調査報告 : 89-98. 沖縄県.
- , 1974. 慶良間群島の陸上脊椎動物. 沖縄海岸国定公園拡張候補地学術調査報告 : 187-199. 沖縄県.
- , 1976. 南海の秘境西表島. アニマ, 38 : 22-27.
- , 1976. 動物の分布と生態, 脊椎動物. 《生態写真集》沖縄の生物 : 111-112. 新星図書, 沖縄.
- , 1980. 東洋のガラパゴス. 木崎甲子郎(編著), 琉球の自然史 : 86-100. 築地書館, 東京.
- , 1980. 久米島における脊椎動物数種に及ぼす人間活動の影響. 琉球列島における島嶼生態系とその人為的変革, 文部省特別研究「環境科学」研究報告集B63 : 87-95.
- , 1981. 琉球列島久米島における土地利用形態の変化による脊椎動物数種の分布域の変動. 琉球列島における島嶼生態系とその人為的変革II, 文部省特別研究「環境科学」研究報告集 B113 : 161-172.
- , 1981. 沖縄の自然とノグチゲラ. 汐文社, 東京. 260p.
- , 1981. 保護すべき環境と生物たち. 採集と飼育, 43(8) : 420-424.
- ・安部琢哉・知念盛俊・与那城義春・千木良芳範・日越国昭・三井興治, 1981. ケナガネズミ実態調査報告書. 沖縄県天念記念物調査シリーズ第22集 : 1-65. 沖縄県教育委員会.
- (Ikehara, S.) & H. Akamine, 1976. The ecological distribution and seasonal appearance of frogs and a snake, Himehabu (*Trimeresurus okinavensis* Boulenger) along the upper stream of Fuku-River in Okinawa Island. Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isl.-(II) : 69-80
- & S. Katsuren, 1976. Preliminary survey on the distribution of frogs along Aha-River in Okinawa Island. Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isl.-(II) : 81-88, pls. 1-2.
- ・大嶺哲雄・下謝名松栄・安部琢哉, 1974. 西表島と石垣島における森林陸上動物群集. 琉球列島の自然とその保護に関する基礎的研究(1) : 51-61, 1 table.
- ・下謝名松栄, 1971. 尖閣列島の陸生動物. 尖閣列島学術調査報告 : 85-140. 琉球大学.
- ・———, 1975. 沖縄の陸の動物. 風土記社, 沖縄. 143p.
- Jacobs, G., 1975. Keys to the Herpetofauna of the Eastern Hemisphere Part VII Bibliography. Smithsonian Herpetological Information Service, 29 : 1-24.
- Johnson, C. R., 1969. Herpetofauna of Okinawa, Ryukyu Islands. Herpetologica 25 (3) : 206-210.
- , 1972. Notes on the Herpetofauna of Kume-jima and O-jima, Ryukyu Islands.

Atoll Res. Bull., (162) : 7-8.

Kaburaki, T., 1926. On the fauna of Japan. *In* Scientific Japan, Past and Present, Kyoto, 5 : 105-135.

環境庁, 1979. 第2回自然環境保全基礎調査動物分布調査報告(両生類・は虫類)鹿児島県1978. 36p.

———, 1979. 第2回自然環境保全基礎調査動物分布調査報告(両生類・は虫類)沖縄県. 128p.

木崎甲子郎ほか, 1975. 沖縄の自然. 平凡社, 東京. 237p.

岸田久吉, 1927. まんぐーすノ食性調査成績. 農林省鳥獸調査報告, 4 : 79-120.

木場一夫, 1926. 琉球弧島のFaunaに就いて. 博物学会誌, 33 : 52-80.

———, 1927. 琉球弧島の動物相に就いて(II). 博物学会誌, 34 : 25-31.

———, 1929. 奄美大島滞島雑記. 博物学会誌, 38 : 92-94.

———, 1931. 渡瀬線とブラキストン線. 東京文理科大学「学芸」記念号 : 259-264.

———, 1954. 奄美大島の爬虫・両棲類について〔講演要旨〕. 動雑, 63(11・12) : 485-486.

———, 1955. 日本の爬虫・両棲類. 日本生物地理学会会報, 16-19 : 345-354.

———, 1955. 奄美大島の爬虫類及び両棲類. 熊本大学教育学部紀要, (3) : 145-162, pl.1.

———, 1956. 奄美群島の爬虫・両棲相, (I). 熊本大学教育学部紀要, (4) : 148-164, pls. 1-2.

———, 1956. 奄美群島の爬虫・両棲相について(予報)〔講演要旨〕. 動雑, 65(3・4) : 149.

———, 1956. 奄美大島, 徳之島の爬虫両棲相. 科学, 26(2) : 101-102.

———, 1957. 沖縄島の爬虫・両棲類について. 熊本大学教育学部紀要, (5) : 191-208, pls. 3-4.

———, 1958. 奄美群島の爬虫・両棲相(II). 熊本大学教育学部紀要, (6) : 173-185, pl.1.

———, 1959. 奄美群島の爬虫・両棲相(III). 熊本大学教育学部紀要, (7) : 187-202, pl.1.

———, 1960. 奄美群島の爬虫・両棲相(IV). 熊本大学教育学部紀要, (8) : 181-191, pl.1.

倉本満・松井孝爾・原幸治, 1974. 学研の図鑑, 爬虫・両生類. 学習研究社, 東京. 157p.

黒田長礼, 1931. 脊椎動物の分布上より見たる渡瀬線. 動雑, 53 : 172-175.

宮良健一・上原剛, 1964. 先島採集旅行報告. 琉大生物クラブ誌, 7 : 9-15.

宮城邦治, 1980. 波照間島の植生概観と動物相について. 南島文化研究所所報, 11 : 92.

———・三井興治, 1981. 慶留間島の陸上脊椎動物相. 沖縄生物学会誌, (19) : 53-56.

森田忠義, 1964. 奄美大島の動物. 鹿児島島の自然 : 303-327. 鹿児島県理科教育協会.

———, 1975. 奄美瀬戸内町の陸域の動物相—主に哺乳・鳥・爬虫・両生類について—. 南日本文化, (8) : 79-86.

———, 1976. 徳之島・伊仙町の陸生脊椎動物. 南日本文化, (9) : 125-132.

———, 1977. 名瀬市と周辺地域の動物調査—陸生脊椎動物及び淡水産魚について—. 南日本文化, (10) : 251-263.

———, 1980. 大隅諸島・屋久島の陸生脊椎動物相について. 鹿児島中央高校研究紀要, (9) : 24-45.

———, 1981. 大隅諸島・種子島の陸生脊椎動物相(予報)—両生・爬虫類について—. 鹿児島中央高校研究紀要, (10) : 47-52.

永井亀彦, 1928. トカラハブとエラブウナギ. 鹿児島県博物調査, 3 : 3+5+64. pls. & maps,

鹿児島県教育調査会.

- , 1928. 南西諸島の動物分布. 史蹟名勝天然紀念物調査報告第四輯: 49-52. 鹿児島県.
- , 1950. 硫黄島及び竹島の特殊生物. 鹿児島国立公園候補地学術報告, 前篇: 178-182.
- , 1950. 屋久島の爬虫類・両棲類. 鹿児島国立公園候補地学術報告, 後篇: 166.
- 中村健児・上野俊一, 1963. 原色日本両生爬虫類図鑑. 保育社, 大阪, 214p.
- 中山悟・栄田恵子ほか, 1970. 辺野喜川流域における生物相の研究. 沖生教研会誌, (4): 140-159.
- 波江元吉, 1914. 薩隅の爬虫及両棲類. 動雑, 26: 330.
- 岡田信利, 1891. 日本動物総目録. 金港堂, 東京, 17+125p.
- 岡田弥一郎, 1927. 爬虫類・両生類. 日本動物図鑑: 191-253.
- (Okada, Y), 1933. On the parallelism between the distribution of lizards and of anurans in the Japanese Empire. *Sci. Rep. Tokyo Bunrika Daigaku.*, B, 1(13): 145-153.
- , 1938. A Catalogue of vertebrates of Japan. Maruzen, Tokyo. 4+412p.
- , 1938. 沖繩島の概況. *Biogeographica*. 3(1): 1-64, pl.1.
- , 1940. A revision of the parallelism between the distribution of lizards and that of frogs in the Japanese Empire. *Proceedings of the 6th Pacific Science Congress, Berkeley, California*, 4: 219-229.
- ・木場一夫, 1928. 奄美大島動物相の紹介. *博物学会誌*, 36: 33-46.
- ・———, 1931. 日本に於ける動物分布に関する考察. *動雑*, 53: 320-351.
- ・———, 1935. 沖繩島及びその近接島嶼の脊椎動物目録. *沖繩博物学会会報*, 1: 3-22.
- ・———, 1954. 動物地理学〔特集, 本邦動物学七十五年〕. *動雑*, 63(8・9): 326-331.
- 沖繩生物教育研究会(編), 1960. 原色ポケット図鑑沖繩の生物. 沖繩生物教育研究会, 沖繩.
- 大嶺哲雄, 1980. 沖繩本島中部(中城湾沿岸を中心とする)動物相概観. *沖繩大学紀要*, 1: 137-181.
- 太田英利, 1981. 波照間島の爬虫両生類相. *爬虫両棲類学雑誌*, 9(2): 54-60.
- Rosenthal, H. L., 1948. Notes on some Okinawa amphibians and reptiles. *Hérpetologica*, 4: 97-104.
- 千石正一(編), 1979. 原色両生・爬虫類. 家の光協会, 東京, 206p.
- Shibata, Y., 1960. Amphibia and Reptilia collected from Tokara Islands. *Bull. Osaka. Mus. Nat. Hist.*, 12: 57-62.
- (柴田保彦), 1964. 沖永良部島(奄美群島)の両生は虫類. 関西自然文化研究会研究報告, 第一集: 13-16.
- 鹿間時夫・大塚裕之, 1971. 東シナ海の陸橋. 1971年日本地質学会総会, シンポジウム資料: 131-139.
- 下謝名松栄, 1970. 動物の地理分布をどう指導したらよいか. *沖生教研会誌*, (4): 38-68.
- , 1976. カラー百科シリーズ④沖繩の自然, 島の自然と鐘乳洞. 新星図書, 沖繩, 188p.
- , 1978. 南・北大東島および沖繩島南部地域の洞穴動物相. 沖繩県天然紀念物調査シリーズ第14集, 沖繩県洞穴実態調査報告I: 75-111. 沖繩県教育委員会.

- , 1979. 沖縄島および周辺離島の洞穴動物. 沖縄県天然記念物調査シリーズ第16集, 沖縄県洞穴実態調査報告II: 97-153. 沖縄県教育委員会.
- , 1980. 先島(宮古諸島・八重山諸島)の洞窟動物. 沖縄県天然記念物調査シリーズ第19集, 沖縄県洞穴実態調査報告III: 103-143. 沖縄県教育委員会.
- Stejneger, L., 1898. On a collection of batrachians and reptiles from Formosa and adjacent islands. Jour. coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo, 12(3): 215-225.
- , 1901. Diagnoses of eight new batrachians and reptiles from the Riu Kiu Archipelago, Japan. Proc. biol. Soc. Wash., 14: 189-191.
- , 1904. A new species of lizard from the Riu Kiu Archipelago, Japan. Smithsonian Misc. Coll. (Quart. Issue), 47 (2): 294-295.
- , 1907. Herpetology of Japan and adjacent territory. Bull. U. S. Nat. Mus., 58: 1-557, pls. 1-35.
- , 1910. The batrachians and reptiles of Formosa. Proc. U. S. Nat. Mus., 38(1731): 91-114.
- Sternfeld, R., 1916. Reptilien und Amphibien aus Japan und von den Riu Kiu. S.-B. Ges. naturf. Fr. Berlin, 5: 164-173.
- 高良鉄夫, 1954. 尖閣列島の動物相について. 琉球大学農学部学術報告, (1): 57-74.
- , 1969. 琉球の自然と風物—特殊動物を探る—. 琉球文教図書, 沖縄, 206p, 8pls.
- , 1972. 西表島の動物相を探る. 自然, 27(9): 72-73.
- (編), 1972. 風樹館要覧=付展示物目録=. 琉球大学農学部, 80p.
- , 1974. 南海の動物たち. 守礼之邦沖縄(上), p.62-66. 講談社, 東京.
- , 1974. 亜熱帯の動物誌. ワイドカラー旅15(沖縄): 124-125. 研秀出版社.
- , 1975. 動物. おきなわの自然: 115-121. 沖縄県.
- , 1975. 動物学. 沖縄県史5, 文化1: 945-1002. 沖縄県.
- , 1975. 沖縄の動物. 沖縄資料集成: 42-46. グリーライフ社.
- , 1977. 沖縄の特殊両生爬虫類. 沖縄県のすぐれた自然: 65-68. 沖縄県.
- , 1977. 自然との対話. 琉球新報社, 沖縄. 426p.
- ・東清二, 1970. 西表島の動物相(第1部). 琉球大学農学部学術報告, (17): 273-328.
- Thompson, J. C., 1912. Prodrome of descriptions of new species of Reptilia and Batrachia from the Far East. Herpetological Notices, San Francisco, California, (2): 1-4.
- 当間嗣元, 1940. 琉球の爬虫両生類. 月刊文化沖縄 1 (3): 13-15.
- 当山昌直, 1976. 宮古群島の両生爬虫類相(I). 爬虫両棲類学雑誌, 6 (3): 64-74.
- , 1979. 宮古群島の両生爬虫類相について〔講演要旨〕. 爬虫両棲類学雑誌, 8 (2): 67-68.
- , 1980. 粟国島の陸上脊椎動物. 県立博物館総合調査報告書I—粟国島(あぐにじま)—: 51-55. 沖縄県立博物館.
- , 1981. 渡名喜島の陸上脊椎動物. 県立博物館総合調査報告書II—渡名喜島(となきじ)

- ま)一 : 49-56. 沖縄県立博物館.
- , 1981. 沖縄群島の両生爬虫類相( I ). 沖縄県立博物館紀要, (7) : 1-8.
- , 1981. 宮古群島の両生爬虫類. 沖生研究会誌, (14) : 30-39.
- ・久貝勝盛, 1979. 宮古群島の両生爬虫類に関する方言—調査及び研究計画について—. 沖生研究会誌, (12) : 13-14.
- ・———・知念盛俊・下謝名松榮・中玉利澄男, 1981. 宮古群島の動物に関する文献目録(暫定). 沖生研究会誌, (14) : 75-83.
- ・———・島尻沢一, 1980. 宮古群島の両生爬虫類に関する方言. 沖生研究会誌, (13) : 17-32.
- 上野俊一, 1974. 琉球の爬虫・両生類. 自然科学と博物館, 41 (3) : 116.
- , 1974. 日本の爬虫・両生類相. 週刊世界動物百科増刊, 日本の動物 II : 47-50. 朝日新聞社, 東京.
- Uchida, T., 1969. Rat-control procedures on the Pacific island, with special reference to the efficiency of biological control agents. II. Efficiency of the Japanese wasel, *Mustla sibirca itatsi* Temminck & Schlegel, as a rat-control agent in the Ryukyus. Jour. Fac. Agr. Kyushu Univ., 15 (5) : 355-385.
- 宇田川竜男, 1959. 奄美大島の生物を採る. 科学の実験, 10(13) : 1026-1031.
- Van Denburgh, J., 1909. New and previously unrecorded species of Reptiles and Amphibians from the island of Formosa. Proc. Calif. Ac. Sci., 4th Ser., 3 : 49-56.
- , 1912. Advance diagnoses of new reptiles and amphibians from the Loo Choo Islands and Formosa. San Francisco, California : 3-8.
- , 1912. Concerning certain species of reptiles and amphibians from China, Japan, the Loo-Choo Islands, and Formosa. Proc. Calif. Ac. Sci., 4th Ser., 3 : 187-258.
- Werner, F., 1913. Neue oder seltene Reptilien und Frösche des naturhistorischen Museums in Hamburg. [Reptilien und Amphibien von Formosa (gesammelt von H. Sauter) : 45-51] Mitt. naturhist. Mus. Hamburg, 30 : 1-51.
- Zarewsky, S., 1930. A list of the batrachians and reptiles collected by P. J. Schmidt on the Riu-Kiu Islands in 1926-1927. Trans. Pac. Comm. Ac. Sci. USSR, 1 : 17-18.

#### 両生類 (Amphibia)

- Gressitt, J. L., 1938. Some amphibians from Formosa and the Ryu Kyu Islands, with description of a new species. Proc. Biol. Soc. Washington, 51 : 159-164.
- Inger, R. F., 1947. Preliminary survey of the amphibians of the Riukiu Islands. Fieldiana : Zool., 32(5) : 295-352.
- , 1950. Distribution and speciation of the amphibians of the Riu Kiu Islands. Amer. Naturalist, 84 : 95-115.
- 川村智治郎, 1957. 両棲綱. 原色動物大図鑑, I : 325-346., 北隆館, 東京.

- 川那部浩哉・西島信昇・諸喜田茂充, 1974. 琉球列島陸水生物文献目録(暫定). 文部省科学研究費  
 特定研究「人間生存」, 琉球列島の自然とその保護に関する基礎的研究(1) : 255-275.
- Liu, C-c., 1950. Amphibians of western China. Fieldiana : Zool. Mem., 2 : 1-400.
- 森田忠義, 1977. 琉球列島の両生類採集記. 鹿児島県高等学校理科部会誌, (18) : 1-7.
- 岡田弥一郎・木場一夫・知念績一(編), 1959. 両生類. 沖縄産動物目録 : 31-32. 沖縄生物教育研究会.
- 大津高, 1975. 沖縄群島の両生類. 山形大学紀要(自然科学), 8 (4) : 545-553.
- Pope, C. H., 1931. Notes on Amphibians from Fukien, Hainan, and Other Parts of China. Bull. Amer. Mus. Nat. Hist., 61(8) : 397-611, pls. 13-22.
- & A.M. Boring, 1940. A survey of Chinese Amphibia. Peking Nat. Hist. Bull., 15 (1) : 13-86, 1 map.
- 佐藤井岐雄・高島春雄, 1955. 日本の両棲概観. 山階鳥類研究所研究報告, (6) : 260-268.
- Schmidt, K. P., 1927. Notes on Chinese Amphibians. Bull. Amer. Mus. Nat. Hist., 54 : 553-575, pls. 31-32.
- 下謝名松栄, 1976. 両生類. 《生態写真集》沖縄の生物 : 158-168. 新星図書, 沖縄.
- 上原剛, 1964. 琉球の両生類について. 琉球大学生物クラブ誌, 7 : 23-32.
- 宇都宮妙子, 1961. 徳之島へ. 暮しの手帖, (62) : 167-171.
- , 1978. 南西諸島の両生類にみられる島間の変異について〔講演要旨〕. 爬虫両棲類学雑誌, 7(4) : 104.
- Vogt, T., 1911. Beitrag zur Amphibienfauna der Insel Formosa. Sitzungsberichte der Gesellschaft naturforschender Freunde zu Berlin, 3 : 179-184.
- Wilkie, J. S., 1930. Some parasitic nematodes from Japanese Amphibia. Ann. Mag. Nat. Hist., London, [10] 4 : 606-615.
- イモリ類 (Caudata)**
- 阿部本生, 1935. シリケンキモリに就いての漫話. 郷土博物時報, 2 (2) : 7-9.
- Chang, M. L. Y., 1937. Über die Rippen von *Tylotriton andersoni* Boulenger. Senckenbergiana, frankfurt am Main, 19 : 1-6
- 千木良芳範・島袋盛和, 1980. 漠那岳におけるイボイモリの側溝への落下について. 沖縄生物学会誌, (18) : 45-49.
- Dunn, E. R., 1918. The collection of Amphibia Caudata of the Museum of Comparative Zoology. Bull. Mus. Com. Zool., 62(9) : 445-471.
- Fang, P.W. & M. L. Y. Chang, 1932. Notes on *Tylotriton kweichowensis*, sp. nov. and *asperimus* Unterstein with synopsis to species. Sinensia, 2 (9) : 111-122.
- Gerlach, G., 1929. Über *Trit. pyrrhogaster* subsp. *ensicauda* Hallowell. Blätter Aquar.-Terrar.-Kde., 40(18) : 318-319.

- , 1933. Zur Kenntnis des *Triturus ensicauda* Hallowell, II. Über Zucht des *Triturus* (= *Triton*) *ensicauda* Hall. Blätter Aquar. —Terrar. —Kde., 44(3) : 38-40.
- Goto, S. & Y. Ozaki, 1929. Brief notes on new trematodes. I. Jap. J. Zool. 2 : 213-217.
- 市川衛, 1941. トゲキモリの卵〔講演要旨〕. 動雑, 35 : 108-109.
- 幡井勉・石橋治雄, 1973. 沖縄産イボイモリの採集・飼育と発生. 採集と飼育, 35(5) : 101-103.
- 石塚寛・五味敏昭・土屋宏正, 1976. 沖縄県本部半島のイボイモリ. 採集と飼育, 38(3) : 65-67.
- Kawamura, T., 1950. Studies on Hybridization in Amphibians. III. Reciprocal Hybrids between *Triturus pyrrhogaster*(Boie) and *Triturus ensicauda*(Hallowell). J. Sci. Hiroshima Univ., B-1, 11 : 71-79.
- & S. Swada, 1959. On the sexual isolation among different species and local races of Japanese newts. Jour. Sci. Hiroshima Univ., B-1, 18 : 17-30.
- Makino, S., 1951. Karyotype of *Tylostotriton andersoni* Boul. Kromosomo, 8 : 313-314.
- 又吉盛健・大城信弘・喜友名孝子・干川裕・三井興治・熊谷英子, 1977. 沖縄島におけるイボイモリの分布について. 沖縄生物学会誌, (15) : 1-4.
- , 1978. イボイモリの産卵について. 沖縄生物学会誌, (16) : 11-16.
- 門馬栄治・牧野佐二郎, 1941. 沖縄に於けるイボキモリの採集. 植物及動物, 9 (9) : 271-273.
- 森田忠義, 1974. 北薩及び県下に産する有尾類について. 鹿児島県西部及び北部自然環境保全基本調査書 : 195-202. 鹿児島県
- , 1974. 南九州に生息するサンショウウオの研究分布ならびに生態. 鹿児島県高等学校理科部会誌, (15) : 27-39.
- Okada, Y., 1934. A contribution toward a check list of the urodeles of Japan. Copeia, 1934(1) : 16-19.
- , 1935. 日本産有尾類の分類の総括と分布. 動雑, 47 : 575-588, 1pl.
- Oyama, J. & D. Nakamura, 1939. Über Artbastarde *Triturus pyrrhogaster* (Boie) ♀ und *T. ensicauda* (Hallowell) ♂. Jap. Jour. Gene., 15(2) : 78-79.
- Pearse, A. S., 1932. Parasites of Japanese salamanders. Ecology, 13(2) : 135-152.
- 佐藤井岐雄, 1937. 両棲綱, 有尾目. 日本動物分類, 15 (3-1) : 1-74, 三省堂, 東京.
- , 1943. 日本産有尾類総説. 日本出版社, 大阪, 520p.
- (Sato, I.) 1934. On the chromosomes of *Triturus ensicauda*. Jour. Sci., Hiroshima Univ., B-1, 3(9) : 99-105, pls.1-2.
- , 1941. 台湾の有尾類に就いて. 台湾博物学会会報, 31(210) : 114-124.
- 田子勝彌, 1931. 蝾螈と山椒魚. 芸艸堂, 京都. 210p.
- Thorn, R., 1968. Les Salamandres d'Europe d'Asie et d'Afrique du Nord Description et moeurs de toutes les espèces et sous-espèces d'Urodèles de la Région Paléarctique d'après l'état de 1967. Éditions Paul Lechevalier, Paris, 376p. 11maps, 16pls.

- 宇都宮妙子, 1973. 生きた化石イボイモリを求めて, 週刊世界動物百科, 144 : 3-5.
- , 1973. イボイモリ *Tylotriton andersoni* の産卵および発生について〔講演要旨〕. 動雑, 82 : 231.
- , 1974. 野外におけるイボイモリの産卵について〔講演要旨〕. 動雑, 83(4) : 325.
- , 1975. 徳之島におけるイボイモリの分布について〔講演要旨〕. 動雑, 84(4) : 466.
- , 1979. 徳之島におけるイボイモリの分布と方言名について. 両生爬虫類研究会誌, (13) : 19-21.
- ・宇都宮泰明・又吉盛健, 1979. 南西諸島におけるイボイモリの分布について〔講演要旨〕. 動雑, 88 : 662.
- 宇都宮泰明・宇都宮妙子, 1977. イボイモリ (*Tylotriton andersoni*) の発生. 広島大学水畜産学部紀要, 16(1) : 65-76.
- (Utsunomiya, Y.), (T. Utsunomiya) & S. Kawachi, 1978. Some Ecological Observation of *Tylotriton andersoni*, Terrestrial Salamander Occurring in the Tokunoshima Island. Proc. Japan Acad., 54, Ser. B, 7 : 341-346.
- Wolterstorff, W., 1925. Katalog der Amphibiensammlung im Museum für Natur- und Heimatkunde zu Magdeburg. Abh. Ber. Mus. Naturk. Vorgesch. Magdeburg. 4(1) : 231-310
- , 1929. Über *Tylotriton andersoni* Blgr. Blätter Aquar.-Terrar.-Kde., 40(6) : 96-97.
- , 1929. Bemerkungen zu Gerlach, über *Triton pyrrogaster* subsp. *ensicauda* Hallowell. Blätter Aquar.-Terrar.-Kde., 40(18) : 319.
- , 1933. Zur Kenntnis des *Triturus ensicauda* Hallowell. I. Über *Triturus* (= *Triton*) *ensicauda* Hallowell. Blätter Aquar.-Terrar.-Kde., 44(3) : 35—38.
- , 1933. Zur Kenntnis des *Triturus ensicauda* Hallowell. III. Bemerkungen zu Gerlach : Zucht des *Triturus* (= *Triton*) *ensicauda* Hallowell. Blätter Aquar.-Terrar.-Kde., 44(3) : 40-41.
- Yano, K., 1926. Zur Morphologie des Skleralknorpels und-knochens bei den Urodelen. Folia Anatomica Japonica, later Okajima's Folia Anatomica Japonica, Tokyo, 4(2) : 57-74.

#### カエル類 (Salientia)

- Annandale, N, 1917. Zoological results a tour in the Far East. Batrachia. Mem. Asiat. Soc. Bengal, 6 : 121-156.
- Boulenger, G. A., 1882. Catalogue of the Batrachia salienta S. Ecaudata in the collection of the British Museum. Brit. Mus., London, 2d edition, 503p.
- , 1886. First report on additions to batrachian collection in the Natural History

- Museum. Proc. Zool. Soc. London, 1886 : 411-416.
- , 1920. A monograph of the South Asian, Papuan, Melanesian and Australian frogs of the genus *Rana*. Rec. Indian Mus., 20 : 1-226.
- 千木良芳範, 1979. ホルストガエル. 環境庁第2回自然環境保全基礎調査動物分布調査報告書 (両生類・は虫類) 全国版1978, : 24-27.
- 平嶺宏紀, 1979. アマミアオガエルの産卵について. 両生爬虫類研究会誌, (13) : 35-36.
- 廣瀬巨海, 1929. 珍蛙石川蛙の死ぬまで. アミーバ, 1 (1) : 44-48.
- 市川衛, 1951. 蛙学. 裳華房, 東京, 239p.
- 勝連盛輝, 1979. 沖縄のカエル. 動物と自然, 9 (6) : 18-21.
- (Katsuren, S.,) S. Tanaka & S. Ikehara, 1977. A brief observation on the breeding site and eggs of a frog, *Rana ishikawae* [Stejneger] in Okinawa Island. Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isl. -(III) : 49-54.
- Kawamura, T. & M. Nishioka, 1977. Aspects of Reproductive Biology of Japanese Anurans. The Reproductive Biology of Amphibians : 103-139., in D.H. Taylor & S.I. Guttman (ed.).
- Kuramoto, M., 1965. A Record of *Rhacophorus leucomystax* from the Ryukyu Islands. Bull. Fukuoka Gakuge. Univ. 15(III) : 59-61.
- , 1967. Studies on *Rana limnocharis* Boie I. Population-hybrids and embryonic temperature tolerances. Bull. Fukuoka Univ. Educ., 17(III) : 103-110.
- , 1968. Studies on *Rana limnocharis* Boie. II. Geographic variation in external characters. Bull. Fukuoka Univ. Educ., 18(III) : 109-119.
- , 1971. Studies on *Rana limoncharis* Boie IV. Karyotypic differentiation of sub species. Bull. Fukuoka Univ. Educ., 20(III) : 105-111.
- , 1972. Karyotypes of the six species of frogs (genus *Rana*) endemic to the Ryukyu Islands. Caryologia, 25 (4) : 547-559.
- , 1973. The Amphibians of Iriomote of the Ryukyu Islands : Ecological and Zoogeographical Notes. Bull. Fukuoka Univ. Educ., 22 (III) : 139-151.
- , 1974. Experimental Hybridization between the Brown Frogs of Taiwan, the Ryukyu Islands and Japan. Copeia, 1974 (4) : 815-822.
- (倉本満), 1974. カエル類の交雑実験. 爬虫両棲類学雑誌, 5 (4) : 85-90.
- , 1974. カエルの鳴き声. 遺伝, 28 (4) : 32-39.
- , 1975. Embryonic Temperature Adaptation in Development Rate of Frogs. Physiological Zoology 48 (4) : 360-366.
- , 1975. Adaptive significance in oxygen consumption of frog embryos in relation to the environmental temperatures. Comp. Biochem. Physiol., 1975, 52 A : 59-62.

- , 1975. Mating Calls of Japanese Tree Frogs (Rhacophoridae). Bull. Fukuoka Univ. Educ., 24 (III) : 67-77.
- , 1977. Mating Calls of the Frog, *Microhyla ornata*, from the Ryukyu Islands. Bull. Fukuoka Univ. Educ., 26 (III) : 91-93.
- , 1977. A comparative study of karyotypes in the tree frogs (Family Rhacophoridae) from Japan and Taiwan. Caryologia, 30 (3) : 333-342.
- , 1978. 台湾と琉球諸島のカエル類における鳴声の種特異性[講演要旨]. 動雑 87 (4) : 538.
- , 1979. Interspecific Hybridization between Brown Frogs, *Rana okinavana* Female and *Rana chensinensis* Male. Bull. Fukuoka Univ. Educ., 28 (III) : 45-48.
- , 1979. ナミエガエル. 環境庁第2回自然環境保全基礎調査動物分布調査報告書(両生類・は虫類)全国版1978 : 14-16.
- , 1979. イシカワガエル. 環境庁第2回自然環境保全基礎調査動物分布調査報告書(両生類・は虫類)全国版1978 : 17-20.
- , 1979. オットンガエル. 環境庁第2回自然環境保全基礎調査動物分布調査報告書(両生類・は虫類)全国版1978 : 21-23.
- , 1979. 琉球諸島のカエル類の分布と隔離. 爬虫両棲類学雑誌, 8 (1) : 8-21.
- ・古谷英三・竹上政夫・矢野啓子, 1974. 日本・台湾のカエル数種の核型. 福岡教育大学紀要, 23 理科編: 67-78.
- ・宇都宮妙子, 1981. 台湾産アオガエル類2種の鳴き声および鳴き声からみた琉球諸島の種との関係. 爬虫両棲類学雑誌, 9 (1) : 1-6.
- 刘承釗・胡淑琴, 1961. 中国无尾两栖类. 科学出版社, 北京, 364p, 6 + 28pls.
- 前田憲努, 1977. 奄美大島にカエルを訪ねて. 両生爬虫類研究会誌, (8) : 25-27.
- 松井正文, 1974. 宮古島産ヒキガエルの変異[講演要旨]. 爬虫両棲類学雑誌, 5 (3) : 68.
- , 1975. 南大東島から記録されたオオヒキガエルについて. 爬虫両棲類学雑誌, 6 (2) : 43-47.
- , 1975. ヒキガエル *Bufo bufo* の亜種間交雑[講演要旨]. 動雑, 84 (4) : 449.
- (Matsui M.), 1976. Experimental Hybridization between Toads from Kyoto and Toads from Miyako Is. and France. Jap. Jour. Herp., 6 (3) : 80-92.
- , 1979. 日本のヒキガエル. 動物と自然, 9 (6) : 13-17.
- 松井孝爾, 1976. カエルの世界. 平凡社, 東京, 144p.
- , 1979. 日本産カエルの分類に関する諸問題. 動物と自然, 9 (6) : 2-7.
- Nakatani, T. & Y. Okada, 1966. *Rana tagoi yakushimensis* n. subsp. from Yakushima, Kagoshima Prefecture, Japan. Acta Herpet. Jap. 1 (4) : 64-66, pl. 1.
- 波江元吉, 1896. アマカヘル雨蛤に就いて. 動雑, 8 : 264-266.
- Noble, G. K., 1920. A note on *Babina*, the daggerfrog. Copeia, 76 : 16-18.

- 野莉家宏・長谷川善和, 1979. 日本産蛙類の骨学的研究. 伊江村文化財調査報告書第8集, 伊江島ナ  
ガラ原西貝塚緊急発掘調査報告: 275-311. 伊江村教育委員会.
- 岡田弥一郎, 1924. 沖縄の蛙. 動雑, 36(426): 202-203.
- (Okada, Y.), 1927. A study on the distribution of tailless batrachians of Japan.  
Annot. Zool. Japon., 11 (2): 137-144.
- , 1928. Notes on Japanese frogs. Annot. Zool. Japon, 11 (4): 269-277.
- , 1929. 沖縄本島に珍しいイシカハガヘル. アメーバ, 1: 43-44.
- , 1930. 日本産蛙総説. 岩波書店, 東京. 2+6+234p. 29pls.
- , 1931. The tailless batrachians of the Japanese Empire. Imp. Agric. Exper. stat.,  
2+2+215p. 29pls.
- , 1934. The anuran fauna of Formosa. Copeia, 1934 (1): 19-20.
- , 1938. The oecological studies of the frogs with special reference to their  
feeding habit. Journal of the Imperial Agricultural Experiment Station, 3 (2): 275-350.  
pls. 29-50.
- , 1966. Fauna Japonica: Anura (Amphibia). Biogeogr. Soc. Japan, Tokyo. 12+234p.
- ・河野卯三郎, 1922. 本邦産蛙について ——・東京帝国大学動物学教室所蔵の蛙  
標本目録. 動雑, 34: 655-665.
- ・———, 1923. 日本領土産アカバヘル近似種の分類及び分布に就ての考察(本邦産  
蛙に就て二). 動雑, 35(417-422): 361-380, pl. 8.
- ・T. Matsui, 1964. *Rhacophorus iriomotensis* n. sp. A new species of *Rhacophorus*  
from Iriomote, Ryukyu Islands. Act. Herp. Japon, 1 (1): 1-2.
- Parker, H. W., 1934. A Monograph of the Frogs of the Family Microhylidae. Brit. Mus.,  
London, 8+208p.
- Procter, J. B., 1920. On the type specimen of *Rana holsti* Boulenger. Proc. Zool. Soc.  
London, 1920: 421-422.
- 坂口総一郎, 1924. 沖縄に於ける食用蛙. 動雑, 36: 112-113.
- 柴田保彦, 1979. シロアゴガエルが奄美大島に産するという記録について. 両生爬虫類研究会誌,  
(14): 10.
- Thompson, J. C., 1912. Prodrôme of a description of a new genus of Ranidae from the  
Loo Choo Islands. Herpetological Notices, San Francisco, California, 1: 1-3.
- 上田博晤, 1979. アイフィンガーガエルの幼生の食性〔講演要旨〕. 動雑, 88(4): 660.
- 宇都宮妙子, 1977. 沖縄源河産のシロアゴガエルについて〔講演要旨〕. 爬虫両棲類学雑誌, 7(2)  
: 45.
- , 1979. カエルを食べる話. 両生爬虫類研究会誌, (13): 37-38.
- , 1980. 奄美大島のイシカワガエルの繁殖. 両生爬虫類研究会誌, (17): 17-18.

- , 1980. 南西諸島のカエル. 採集と飼育, 42 (3) : 136-139
- , 1980. 台湾産カエルの幼生について〔講演要旨〕. 爬虫両棲類学雑誌, 8 (4) : 134.
- , 1981. ホルストガエルとオットンガエルの産卵について. 爬虫両棲類学雑誌, 9 (2) : 70-71.
- ・勝連盛輝・宇都宮泰明, 1980. イシカワガエルの生態. 採集と飼育, 42 (6) : 323-325.
- ・宇都宮泰明・勝連盛輝・赤嶺博行・当山昌直, 1977. 与那覇岳における大形のカエルの繁殖について. 動雑, 86(4) : 523.
- ・大河内勇・千宏燦, 1981. 台湾の両生類採集記. 両生爬虫類研究会誌, (21) : 21-29.
- 宇都宮泰明・宇都宮妙子・勝連盛輝, 1978. イシカワガエルについて〔講演要旨〕. 動雑, 87 (4) : 528.
- (Utsunomiya, Y.), (T. Utsunomiya) & (S. Katsuren), 1979. Some Ecological Observations of *Rana ishikawae*, a Rare Frog Endemic to the Ryukyu Islands. Proc. Japan Acad., 54, Ser. B (7) : 233-237.
- Van Denburgh, J., 1920. Mr. Boulenger on the genus *Babina*. Copeia, 79 : 14-16.
- Wolf, S., 1936. Revision der Untergattung *Rhacophorus* (ausschliesslich der Madagaskar-Formen.) Bulletin of the Raffles Museum, 12 : 137-217.
- 屋代弘孝, 1938. ミヤコヒキガエル *Bufo bufo miyakoensis* OKADA. の食性並に其の沖縄島移入経過. 植物及動物, 6 (6) : 1127-1130.

#### 爬虫類 (Reptilia)

- Brown, W. C., 1956. The distribution of terrestrial reptiles in the islands of the Pacific basin. Proc. 8th pac. Sci. Congr. 3A : 1479-1491.
- Fitch, H. S., 1970. Reproductive Cycles of Lizards and Snakes. Univ. Kansas Publ. Mus. Nat., 52 : 1-247.
- Fukada, H., 1965. Breeding habits of some Japanese reptiles (critical review). Bull. Kyoto Gakugei Univ., Ser. B, (27) : 65-82.
- ゴリス, リチャード, 1966. 日本の爬虫類. 東京. 127p.
- 池原貞雄・安部琢哉・城間侔, 1978. 尖閣列島・南小島を訪ねて. 沖縄生物学会誌, (16) : 39-44.
- 木場一夫・岡田弥一郎・知念績一(編), 1959. 爬虫綱. 沖縄産動物目録:26-30. 沖縄生物教育研究会
- 黒岩恒, 1893. 球陽雜譚(第二稿). 動雑, 5 : 42-45.
- , 1913. 博物学上より見たる琉球. 台湾博物学会会報, 3 (12) : 121-128.
- Loveridge, A., 1946. Reptiles of the Pacific World. New York MacMillan Co. 259p.
- Makino, S. & E. Momma, 1949. An idiogram study of the chromosome in some species of reptiles. Cytologia, 15 : 96-108.
- (牧野佐二郎・門馬栄治), 1949. 爬虫類10種の核型調査(予報). 遺伝学雑誌, 別巻, 2 : 49-56.
- Mertens, R., 1934. Die Insel Reptilien, ihre Ausbreitung, Variation und Arvildung.

- Zoologica, Stuttgart, 32 [6] (84) : 1-206.
- 門馬栄治, 1948. 爬虫類数種の染色体数. 動雑, 58 (1・2) : 8-10.
- 森田忠義, 1979. 南西諸島の奄美大島で捕獲されたワニに関する報告. 鹿児島中央研究紀要, (8) : 24-30.
- 永井亀彦, 1927. 爬虫類. 鹿児島県博物調査, 1 : 55-66, pl.
- 中村健児, 1947. 爬虫綱. 原色動物大図鑑, I : 283-296, 北隆館, 東京.
- 岡田弥一郎, 1931. 爬虫類. 岩波講座, 生物学〔動物学〕, 61p.
- ・高桑良興, 1932. 爬虫類の生態と進化. 養賢堂, 東京. 5+282p. 10pls.
- 大島廣, 1935. 八重山の動物(6). 植物及動物, 3 : 1141-1156.
- Pope, C. H., 1935. The Reptiles of China. Turtles, Crocodilians, Snakes, Lizards. Nat. Hist. Central Asia, 10. Amer. Mus. Nat. Hist., New York. 604p.
- Rooij, N. de, 1915. The Reptiles of the Indo-Australian Archipelago. I. Lacertilia, Chelonia, Emydosauria. E. J. Brill, Leiden. 384p.
- Romer, A. S., 1956. Osteology of the Reptiles. Univ. Chicago Press, Chicago. 772p.
- 琉球大学ワンダーフォーゲル部, 1972. 南海の秘境西表島. 琉球大学ワンダーフォーゲル部, 沖縄 177p.
- Schenkel, E., 1902. Achter Nachtrag zum Katalog der herpetologischen Sammlung des Basler Museums. Verhandlungen der naturforschenden Gesellschaft in Basel, 13 (1) : 142-199.
- Schmidt, K. P., 1927. The Reptiles of Hainan. Bull. Amer. Mus. Nat. Hist, 54 : 395-465.
- 下謝名松栄, 1976. 爬虫類. 《生態写真集》沖縄の生物: 143-157. 新星図書, 沖縄.
- Slater, J. A., 1946. Bionomic notes on some reptiles from Okinawa Shima, Ryukyu Islands, Japan. Ann. Mag. nat Hist., [11], 13 : 113-116.
- 高良鉄夫, 1975. 奄美・琉球の生物(6) —爬虫類—. 遺伝, 29 (12) : 53-59.
- 高島春雄, 1958. 日本の爬虫類概観. 山階鳥類研究所研究報告, (12) : 486-493.
- Thompson, J. C., 1912. On reptiles new to the island arcs of Asia. Herpetological Notices, San Francisco, California, 3 : 1-5.
- 上野俊一, 1965. 爬虫綱. 新日本動物図鑑, 下 : 531-548. 北隆館, 東京.
- Wang, C. S., 1962. The reptiles of Botel-Tobago. Quart. Jour. Taiwan Mus., 15 : 142-191.
- & Y. M. Wang, 1956. The reptile of Taiwan. Quart. Jour. Taiwan Mus. 9 : 1-86.
- Werner, F., 1904. Über Reptilien und Batrachier aus Guatemala und China in der zoologischen Staats-Sammlung in München. Abhandlungen der königlichen bayerischen Akademie der Wissenschaften, München, [2] 22 (2) : 341-384.

———, 1909. Über neue oder seltene Reptilien des naturhistorischen Museums in Hamburg. I. Schlangen. Mitteilungen aus dem naturhistorischen Museum in Hamburg, 26 : 205-247.

### トカゲ類 (Lacertilia)

- 青田重忠, 1940. キノボリトカゲ (*Japaraula sp.*)の産卵習性. 台湾博物学会会報, 30 (205) : 402-405.
- Boettger, O., 1888. Aufzählung einiger neu erworbener Reptilien und Batrachier aus Ost-Asien. II. Vorträge und Abhandlungen Berichte über die Senckenbergischen Naturforschende Gesellschaft, Frankfurt am Main, 1888 : 187-190.
- , 1893. Katalog der Reptilien-Sammlung im Museum der Senckenbergische Naturforschenden Gesellschaft in Frankfurt am Main. I. Teil ( Rhynchocephalen, Schildroten, Krokodile, Eidechsen, Chamäleons). Frankfurt a. M. : 1-140.
- Boulenger, G. A., 1885. Catalogue of the lizards in the British Museum (Natural History). Brit. Mus., 2d edition, London, 1 : 1-436.
- , 1887. Catalogue of the lizards in the British Museum (Natural History). 2d edition. London, III : 1-575.
- , 1917. A revision of the lizards of the genus *Tachydromus*. Mem. Asiat. Soc. Bengal, 5 (5) : 207-235.
- , 1921. Monograph of the Lacertidae. London, II : 1-451.
- 土居寛暢・上田常一, 1937. 西朝鮮産蜥蜴の1新種に就て. 動雜, 49 (6) : 211-215.
- Fitch, H. S., 1954. Life history and ecology of the five-lined skink, *Eumeces fasciatus*. Univ. Kansas Publ. Mus. Nat. Hist., 8 : 1-156.
- Greer, A. E., 1970. A subfamilial classification of scincid lizard. Bull. Mus. Comp. Zool., 139 (3) : 151-183.
- , 1974. The generic relationships of the scincid lizard genus *Leiolopisma* and its relatives. Aust. J. Zool., 31 : 1-67.
- Gressitt, J. L., 1936. New reptiles from Formosa and Hainan. Proc. Bio. Soc. Washington, 1936 : 117-122.
- Gunther, A. C. G., 1864. The reptiles of British India. London, the Ray Society : 1-443.
- , 1888. On a collection of reptiles from China. Ann. Mag. Nat. Hist. London, [6] 1 : 165-172.
- 原幸治, 1978. リュウキュウキノボリトカゲの産卵数と孵化. 両生爬虫類研究会誌, (10) : 9.
- 正田努, 1978. 東アジア産トカゲ属の分布と系統の諸問題. 植物分類, 地理 24, (1-5) : 144-148.
- , 1980. 台湾産アオスジトカゲの変異〔講演要旨〕. 爬虫両棲類学雑誌, 8 (4) : 135-136.
- , 1981. イシガキトカゲの変異について〔講演要旨〕. 爬虫両棲類学雑誌, 9 (2) : 66.

- Kluge, A. G., 1967. Higher taxonomic categories of gekkonid lizards and their evolution. Bull. Amer. Mus. Nat. Hist., 135 : 1-59.
- 黒岩恒, 1895. 蜥蜴類に就て. 動雑, 7 : 39-41.
- Liang, Y.S. & C.S. Wang, 1975. The lizards found Taipei Hsien, Taiwan. Quar. Jour. Taiwan Mus., 28 : 431-482.
- Liu Yu, M., 1970. Studies on Taiwan lizards. Biol. Bull. Taiwan Norm. Univ, 5 : 51-93.
- 牧茂市郎, 1923. 台湾産守居宮に就て. 動雑, 35 (415) : 193-203, pls. 5-6.
- Maki, M., 1930. A new banded gecko, *Eublepharis orientalis*, sp. nov. from Riu Kyu. Annot. Zool. Japon., 13 (1) : 9-11.
- 松井孝爾, 1973. ヤクヤモリの生態〔講演要旨〕. 爬虫両棲類学雑誌, 5 (2) : 27-28.
- , 1974. アオカナヘビの久米島型地方変異〔講演要旨〕. 爬虫両棲類学雑誌, 5 (3) : 67-68.
- , 1976. 日本産ヤモリ属の分類学的研究〔講演要旨〕. 爬虫両棲類学雑誌, 6 (4) : 113.
- (Matsui, T.) & Y. Okada, 1968. A new species of *Gekko* found in Yakushima, one of the small island south of Kyushu. Acta Herpet. Jap. 3 (1) : 1-4.
- ・鈴木博, 1981. トカラ列島産トカゲ類の採集記録(1)〔講演要旨〕. 爬虫両棲類学雑誌, 9 (2) : 66-67.
- 松本邦夫, 1941. キノボリトカゲの外形的性徴に就て. 動雑, 53 (3) : 143-146.
- Mittleman, M. B., 1952. A generic synopsis of the lizards of the subfamily Lygosominae. Smithson. Misc. Collect. 117 : 1-35.
- Nakamura, K., 1931. Preliminary notes on reptilian chromosomes. III. The Chromosomes of some lizards. Proc. Imp. Acad. Japan, Tokyo, 7 (1) : 26-28.
- , 1932. Studies on reptilian chromosomes. 3. Chromosomes of some gekkos. Cytologia, 3 (2) : 156-168.
- & S. Ueno, 1959. The Geckos found in the Limestone Caves of the Ryu-Kyu Islands. Mem. Coll. Sci. Univ. Kyoto, (B), 26 (1) : 45-52, pl. 1.
- 波江元吉, 1905. 八重山群島産カナヘビ属の新種紹介. 動雑, 17 : 171-172.
- , 1912. 沖縄産守居宮類に就て. 動雑, 24 (286) : 442-445, pl. 6.
- 落合盛吉, 1937. ヤモリ *Gecko japonicus* Duméril et Bignon の発生及び生態学的研究(第1報). 動雑, 49 : 94-96.
- Oguma, K. & S. Makino, 1932. A revised check-list of the chromosome numbers in Vertebrata. Journal of Genetics, London and Edinburgh, 26 (2) : 239-254.
- ・———, 1937. A new list of the chromosome numbers in vertebrata (March 1937). Jour. Facul. Sci. Hokkaido Imp. Univ. Ser. 6, 5 (4) : 297-356.
- Okada, Y., 1935. On the distribution and habits of *Eublepharis orientalis* Maki. Proc. Imp. Ac. Japan, 11 (9) : 392-394.

- , 1936. The Geographical Distribution of Gekkonidae in Japan. *Biog. Soc. Japan*, 6 (9) : 71-73
- , 1936. A new cave-gecko, *Gymnodactylus yamashinae* from Kumejima, Okinawa group. *Proc. Imp. Ac. Japan*, 12 (2) : 53-54.
- , 1936. Studies on the lizards of Japan. Contribution I. Gekkonidae. *Sci. Rep. Tokyo Bunrika Daigaku*, B, 2 (42) : 233-289, pls. 15-19.
- , 1937. Studies on the lizards of Japan. Contribution II. Agamidae. *Sci. Rep. Tokyo Bunrika Daigaku*, B, 3 (51) : 83-94. pls. 12-14.
- , 1939. Studies on the lizards of Japan. Contribution III. Scincidae. *Sci. Rep. Tokyo Bunrika Daigaku*, B, 4 (73) : 159-214, pls. 15-17.
- ・松井孝爾, 1965. 屋久島産新種のヤモリについて〔講演要旨〕. *爬虫類学雑誌*, 1 (3) : 56.
- Oshima, M., 1912. Description of a new gecko from Botel Tobago Island. *Philippine Jour. Sci. Manila*, 7 (4) : 241-242.
- 千石正一, 1976. 西表島のホオグロヤモリの生態に関する小観察. *両生爬虫類愛好会誌*, (4) : 5.
- 柴田保彦, 1965. タシロヤモリの奄美大島からの記録. *大阪市立自然科学博物館研究報告*, (18) : 1-2.
- , 1975. 岸和田の阪南港でみつかったミヤコトカゲ. *Nature Study*, (21), 3 : 36.
- , 1979. ヤモリ. *教育大阪*, 336 : 28-29.
- , 1981. 種子島のヤクヤモリ. *自然史研究*, 1 (15) : 149-154.
- ・窪田正寛・石村貢, 1972. オガサワラヤモリの沖縄本島・与那国島からの記録. *爬虫両棲類学雑誌*, 5 (1) : 11-12.
- Smith, M. A., 1935. Reptilia and Amphibia. II. -Sauria. *In the Fauna of British India, including Ceylon and Burma*. Taylor & Francis, London. 440p, 2maps, 1pl.
- , 1937. A review of the genus *Lygosoma* (Scincidae : Reptilia) and its allies. *Rec. Ind. Mus.*, 39 : 213-234.
- 高良鉄夫, 1954. クロイワヤモリ *Gymnodactylus albofasciatus kuroiwae* Namiye について. *琉球大学農学部学術報告書*, (1) : 90-92.
- , 1979. クロイワトカゲモドキ. 環境庁第2回自然環境保全基礎調査 動物分布調査報告書(両生類・は虫類)全国版1978 : 118-120.
- , 1979. マダラトカゲモドキ. 環境庁第2回自然環境保全基礎調査 動物分布調査報告書(両生類・は虫類)全国版1978 : 121-123
- , 1979. オビトカゲモドキ. 環境庁第2回自然環境保全基礎調査 動物分布調査報告書(両生類・は虫類)全国版1978 : 124-126.
- Tanaka, S. & M. Nishihira, 1981. Notes on an Agamid Lizard, *Japalura polygonata*. *Biol. Mag. Okinawa*, (19) : 33-39.
- Taylor, E. H., 1936. A taxonomic study of the cosmopolitan scincoid lizards of the genus

- Eumeces* with an account of the distribution and relationships of its species. Sci. Bull. Univ. Kansas, 23 : 1-643.
- Tokura, Y., 1933. Histological studies on the Dermal Functions, with Special Reference to the Changes of the colour of *Gekko japonicus* (Duméril et Bibron). Jour. Sci. Hiroshima Univ., B-1, 7 : 105-127.
- 当山昌直, 1974. 琉球列島における *Eumeces* の地理的分布(予報)[講演要旨]. 爬虫両棲類学雑誌, 5 (3) : 69.
- , 1975. オキナワトカゲとオオシマトカゲとの鑑別点について[講演要旨]. 動雑, 84 : 450.
- , 1975. オキナワトカゲの外部形態[講演要旨]. 爬虫両棲類学雑誌, 6 (1) : 13-14.
- , 1975. オオシマトカゲの卵から取出した胚について. 爬虫両棲類学雑誌, 6 (2) : 39-42.
- , 1975. イシガキトカゲの白縦線について[講演要旨]. 爬虫両棲類学雑誌, 6 (2) : 53-54.
- , 1975. オオシマトカゲが吐き出したアオカナヘビについて. 両生爬虫類愛好会誌, (3) : 5.
- , 1976. 繁殖期のキシノウエトカゲの野外観察. 両生爬虫類愛好会誌, (4) : 7-9.
- , 1976. 春のオキナワトカゲの観察. 両生爬虫類愛好会誌, (5) : 11-12.
- , 1976. ミヤコトカゲの生息の確認. 沖縄生物学会誌, (14) : 61-66.
- , 1977. オキナワトカゲとオオシマトカゲにみられる外部形態の地理的変異[講演要旨]. 爬虫両棲類学雑誌, 7 (2) : 39-40.
- , 1981. トカゲモドキ. 地域と文化, 9 : 129. ひるぎ社, 沖縄.
- ・疋田努, 1976. トカゲ類の交尾写真三例. 両生爬虫類愛好会誌, (4) : 13-14.
- ・前田敦・小浜継雄, 1973. 沖縄本島のバーバートカゲについて. 琉球大学生物クラブ誌, 12 (1) : 1-8.
- 上野俊一, 1964. 沖永良部島の洞窟動物. 愛媛大トカラ奄美総報, 1 : 1-2.
- Underwood, G., 1954. On the classification and evolution of geckos. Proc. Zool. Soc. London, 124. 469-492.
- 宇都宮妙子, 1977. オビトカゲモドキについて. 両生爬虫類研究会誌, 7 : 11-13.
- 屋代弘孝, 1931. 「ほうぐろやもり」 *Hemidactylus frenatus* Dumeril et Bibron の観察. アミーバ, 3 (3) : 51-53.
- 吉永虎馬, 1893. 沖縄ヤモリ. 動雑, 5 (53) : 112.

#### ヘビ類 (Ophidia)

- 青田重忠, 1938. メクラヘビの動物地理的分布. 広島博物学会報, 6 : 32-38.
- , 1940. 東洋及び西洋のメクラヘビ一覽, 特に共通種の分布に関する一考察. 広島博物学会報, 7 : 39-43.
- Aota, S. 1940. A histological study on the integument of a blind snake, *Typhlops braminus* (Daudin), with special reference to the sense organ and nerve ends.

- Jour. Sci. Hiroshima Univ., B-1, 10 : 193-208.
- , 1941. メクラヘビ (*Typhlops braminus*) の頭骨について. 台湾博物学会会報, 31 : 175-181.
- Boettger, O., 1898. Katalog der Reptilien-Sammlung im Museum der Senckenbergischen Naturforschenden Gesellschaft am Main. II. Teil (Schlangen). Frankfurt a. M. : 1-160.
- Boulenger, G. A., 1893. Catalogue of the snakes in the British Museum (Natural History). Brit. Mus., London, I : 1-448.
- , 1894. Catalogue of the snakes in the British Museum (Natural History). Brit. Mus., London, II : 1-380.
- , 1896. Catalogue of the snakes in the British Museum (Natural History). Brit. Mus., London, III : 1-727.
- ゴリス, リチャード, 1981. アカマタの繁殖〔講演要旨〕. 爬虫両棲類学雑誌, 9 (2) : 62-63.
- Gunther, A. C. G., 1868. Sixth account of new species of snakes in the collection of the British Museum. Ann. Mag. Nat. Hist. London, [4] 1 : 413-429.
- 浜田徳治, 1917. 鹿児島島のメクラヘビ. 動雑, 29 : 343.
- Hilgendorf, F., 1876. Die japanischen Schlangen. Mitteilungen der deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ost-Asiens, Tokyo 1 (10) : 29-34.
- 堀川安市, 1941. 台湾の蛇. コタヒラ製作所, 台北. 77p.
- Inger, R. F. & H. Marx, 1965. The Systematics and Evolution of the Oriental Colubrid Snakes of the Genus *Calamaria*. Fieldiana Zool., 49 : 1-304.
- 木場一夫, 1973. 東南アジアの毒蛇類. The Snake, 5 : 77-115.
- ・菊川大東・福田恒雄・田中和弘, 1977. 南西諸島産 *Calliophis japonicus* の分類. 銀杏学園紀要, (2) : 7-30.
- 黒岩恒, 1909. 琉球列島の陸蛇類. 動雑, 21 : 84-88.
- Leviton, A. E., 1968. The venomous terrestrial snake of East Asia, India, Malaya, and Indonesia. Bücherl, Buckley and Deulofeu : Venomous animals and their Venoms, New York, 1 : 529-576.
- 牧茂市郎, 1931. 日本蛇類図譜, 分類学的研究. 第一書房, 東京. 57p.
- , 1931. 原色版日本蛇類図説. 第一書房, 東京. 248p.
- (Maki, M.), 1931. A Monograph of the Snakes of Japan. Dai-ichi Shobo, Tokyo, 240p.
- , 1934. *Amblycephalus* の分布及びその1新種. 動雑, 46 : 111.
- , 1935. A new poisonous snake (*Calliophis iwasakii*) from Loo-Choo. Trans. nat. Hist. Soc. Formosa, 25 (142) : 216-219.
- , 1936. 高千穂蛇属 Genus *Achalinus* Peters に就いて. 広島博物学会報, 3 : 1-5.
- , 1937. A new subspecies, *Amblycephalus formosensis iwasakii*, Belonging to Amblycephalidae from Ishigaki-jima. Trans. nat. Hist. Soc. Formosa, 27 : 217-218.

- Malnate, E. V., 1960. Systematic division and evolution of the colubrid snake genus *Natrix*, with comments on the subfamily Natricinae. Proc. Ac. Nat. Sci., Philadelphia, 112 (3) : 41-71.
- , 1963. A New Race of *Ampheisma pryeri* (Serpentes Natricinae) from the Southern Riukiu Island of Miyako-shima. Naturae of AC. Nat. Sci. Philadelphia, 360 : 1-6.
- & H. E. Munsterman, 1960. Interpopulation variation in the colubrid snake *Natrix pryeri* from the Riukiu Islands, with description of a new subspecies. Proc. Calif. Ac. Sci., 4 (31) : 51-67.
- Marx, H., & R. F. Inger 1955. Notes on Snakes of the genus *Calamaria*. Fieldiana, Zool., 37 : 167-209.
- 松井孝爾, 1957. 奄美大島の毒蛇. 遺伝, 11 (12) : 56-58.
- , 1964. 屋久島産ヘビ類に関する二, 三の知見〔講演要旨〕. 爬虫類学雑誌, 2 (1) : 6-7.
- , 1969. 日本のヘビ. The Snake, 1 : 50-55.
- , 1971. 世界のヘビ, (1)日本のヘビ, 体制, 分類, 生態, 毒蛇. 動物と自然, 1 (7) : 13-18.
- , 1971. 世界のヘビ, (2)各論. 動物と自然, 1 (8) : 17-22.
- , 1977. ヘビの世界. 平凡社, 東京. 144p.
- 松本邦夫, 1949. 蛇鱗の形態的研究(1). 生物, 4 : 194-200.
- McDowell, S. B., 1961. Malnate's "Systematic division and evolution of the colubrid snake genus *Natrix*, with comment on the subfamily Natricinae" [Reviews and comments]. Copeia, 1961 : 502-506.
- Minton, S. A., Jr., H. G. Dowling & F. E. Russell, 1968. Poisonous snakes of the world. Department of the Navy Bureau of Medicine and Surgery, Washington, D. C. 212p.
- 美濃部熙, 1931. タカチホヘビの学名に就いて. 動雑, 43 : 459.
- 三島章義, 1963. 奄美の病害動物. Nature Study, 9 : 78-81.
- , 1964. ヒャン (*Calliophis japonicus*) の交尾, 産卵について〔講演要旨〕. 爬虫類学雑誌, 2 (1) : 6.
- , 1965. 奄美のヘビ. Nature Study, 11 : 14-19.
- , 1965. ヒャン *Calliophis japonicus* の外部形態特に斑紋について〔講演要旨〕. 爬虫類学雑誌, 1 (3) : 55.
- , 1966. 奄美群島産アカマタの食性に関する研究. 爬虫類学雑誌, 1 (4) : 75-81.
- , 1975. 不思議なヘビの世界. 掬水文庫, 東京. 238p.
- 森口一・内藤聡, 1979. 徳之島のアマミタカチホヘビ. 爬虫両棲類学雑誌, 8 (1) : 36.
- 武藤暁生・大谷勉, 1980. アマミタカチホヘビについての2, 3の知見. 両生爬虫類研究会誌, (16) : 25-28.
- 永井亀彦, 1934. 本県にて分布上注目すべき動植物(4). 郷土博物時報, 1 (8) : 10-11. 鹿児島県.

- 中村健児, 1934. 蛇とその功罪. 京都大学理学部普及講座(11).
- , 1938. 盲蛇の血管系及び生殖系. 動雑, 50 : 192.
- , 1941. 盲蛇に関する研究(1-3). 台湾博物学会報, 31 : 299-305, 409-412.
- 波江元吉, 1897. 本邦産蛇類の学名に就て. 動雑, 9 : 337-340.
- , 1908. 台湾産毒蛇. 動雑, 20 : 192-194, 463-464.
- , 1909. 台湾産毒蛇. 動雑, 21 : 266-267.
- , 1914. 沖縄産盲蛇の産卵. 動雑, 26 : 448-449.
- , 1914. 再び盲蛇の卵に就て. 動雑, 26 : 482.
- , 1914. 盲蛇に就て名和所長より来信. 動雑, 36 : 559.
- 岡田弥一郎, 1964. 高良鉄夫著 琉球列島における陸棲蛇類の研究〔書評〕. 爬虫類学雑誌, 1 (1) : 8.
- ・高良鉄夫, 1958. 琉球産アオヘビの1新種. 日本生物地理学会会報, 20 (3) : 1-3.
- 大野正男, 1978. 日本産主要動物の種別文献目録(4), タカチホヘビとアマミタカチホヘビ. 東洋大学紀要教養課程篇(自然科学), (21) : 93-104.
- Oshima, M., 1910. An annotated list of Formosan snakes, with description of four new species and one new subspecies. Ann. Zool. Japan, 7 (3) : 185-207.
- , 1916. 台湾及び琉球産蛇類検索表. 台湾博物学会会報, 6 : 1-12.
- , 1920. 台湾及び琉球産毒蛇調査報文. 台湾総督府研究所報告, 8 (2) : 1-99, 16 pls.
- , 1944. 大東亜共栄圏毒蛇解説. 北隆館, 東京. 330p.
- 佐藤井岐雄・青田重忠, 1940. メクラヘビの1種 *Typhlops braminus* の内部形態特に盲腸及び尿管の特殊形態について. 台湾博物学会会報, 30 : 109-113.
- Slater, J. A., 1948. The incidence of poisonous snakes on Okinawa Shima (Ryukyu Islands). Copeia, 1948 : 136.
- Smith, M. A., 1943. Reptilia and Amphibia. III.—Serpentes. In the Fauna of British India, Ceylon and Burma, including the whole of the Indo Chinese sub-region. Taylor & Francis, London. 583p.
- Steindachner, F., 1914. Bericht über die von Hans Sauter auf Formosa gesammelten Schlangarten. Denkschriften der kaiserlichen Akademie der Wissenschaften, (Mathematisch-Naturwissenschaftliche Klasse), Wien, 90 : 319-361.
- Stejneger, L., 1909. 琉球列島の陸蛇類. 動雑, 21 : 36-40.
- 高橋精一, 1922. 大日本毒蛇図集. 田淵石版印刷所, 台北.
- , 1930. 日本蛇類大観. 春陽堂, 東京. 165p.
- 高良鉄夫, 1943. 沖縄陸棲蛇類雑録. 鹿児島博物同志会報, 4 : 19-26.
- , 1952. サキシマアカマタ *Dinodon rufozonatum walli* Stejneger の食性に就いて. 応用動物学雑誌, 17 : 41-43.

- , 1953. アカマタ *Dinodon semicarinatum* (Cope)の食性について. 応用動物学雑誌, 18 : 83-86.
- , 1953. 琉球の毒へび. 琉球大学普及叢書, 6 : 1-15.
- , 1955. 琉球における数種のへび類の分布. 琉球大学農家政学術報告, (2) : 80-93.
- , 1957. リウキウアオへびとアマミアオへび. 動雑, 66 : 345-346.
- , 1957. 琉球産蛇類に関する新知見. 琉球大学農家政学部学術報告, (4) : 144-156, pls. 1-2.
- , 1958. 陸産毒へび. 昆虫の採集と標本の作り方 : 29-31. 琉球大学普及叢書, 16.
- , 1958. 琉球産 *Elaphe*属(Ophidia, Colubridae)の2種について(予報). 琉球大学農家政工学部学術報告, 5 : 116-119.
- , 1962. 琉球列島における陸棲蛇類の研究. 琉球大学農家政工学部学術報告, 9 : 1-202.
- , 1965. 琉球の毒へび. 守礼の光, 14-17.
- , 1969. 八重山群島(琉球)産へびに関する若干の知見. 爬虫両棲類学雑誌, 3 (2, 3) : 19-21.
- , 1978. 宮古島(沖縄)産サキシマバイカに関する若干の知見. 爬虫両棲類学雑誌, 7 (4) : 85-87.
- , 1978. 西表島(沖縄)産タカチホへび属の1種(予報). 爬虫両棲類学雑誌, 7 (4) : 92-93.
- 上野俊一, 1973. 珍奇なへび“イワサキシセダカへび”. 国立科学博物館ニュース, 49 : 6.
- 植木修二, 1934. アマミクロへび. 郷土博物時報, 7 : 18.
- Wall, F., 1903. A prodromus of the snakes hitherto record from China, Japan, and the Loo Choo Islands ; with some notes. Proc. Zool. Soc. London, I : 84-102.
- , 1905. Notes on a collection of snakes from Japan and the Loo Choo Islands. Proc. Zool. Soc. London, 1905, 2 : 511-517.
- Werner, F., 1929. Übersicht der Gattungen und Arten der Schlangen aus der Familie Colubridae. III. Zool. Jahrb. Syst, 57, (12) : 1-196.
- 山口謹爾, 1919. 台湾産毒蛇に就て. 台湾博物学会会報, 8 (34) : 1-11.

#### カメ類 (Testudinata)

- 浅野直樹, 1974. 沖縄本島産リュウキュウヤマガメについて[講演要旨]. 爬虫両棲類学雑誌, 5 (3) : 67.
- Gray, J. E., 1863. Observations on the box tortoises, with the description of three new Asiatic species. Proc. Zool. Soc. London, 1863 : 173-179.
- 原幸治・古屋真, 1980. セマルハコガメの繁殖[講演要旨]. 爬虫両棲類学雑誌, 8 (4) : 131.
- 黒岩恒, 1893. 球陽雜譚(第四稿). 動雑, 5 : 279-281.
- , 1894. 八重山亀採獲紀事. 動雑, 6 : 296-298.
- Mao, S. H., 1971. Turtles of Taiwan. Commercial Press, Taiwan. 10 + 128p.
- 中村健兒, 1934. 台湾産陸亀科(Testudinidae). 台湾博物学会会報, 24 (130) : 32-39.

- (Nakamura, K.), 1934. On *Clemmys mutica* (Cantor) with special reference to its variation and distribution. Annot. Zool. Jap. 14 (4) : 425-435, pl. 21.
- , 1937. On chromosomes of some chelonians. (A preliminary note.) Japanese Jour. Genetics, 13 (5) : 240.
- Ozaki, Y., 1936. Two new trematodes from tortoise *Geoemyda spengleri* (Gmelin). Jour. Sci. Hiroshima Univ., B-1, 6 : 81-90.
- 坂口総一郎, 1924. ヤヘヤマガメに就て. 動雑, 36 : 154.
- , 1929. 沖縄島産カメ類に就て. Lansania, 1 : 129-130.
- Siebenrock, K. F., 1907. Über einige, zum Teil siltene Schildkröten aus Südchina. Sitzungsberichte der kaiserlichen Akademie der Wissenschaften Wien, Mathematisch-naturwissenschaftliche Klasse, 116 : 1739-1776.
- , 1909. Synopsis der tezenten Schildkröten, mit Berücksichtigung der in historischer Zeit ausgestorbenen Arten. Zool. Jahrb. Syst., 10 (3) : 427-618.
- , 1909. *Clemmys mutica* Cantor von der Insel Formosa. Annalen des k. k. naturhistorischen Hofmuseums, Wien, 23 : 312-317.
- 穴戸一郎, 1899. 日本産亀鼈類. 動雑, 11 (130) : 257-278, pls. 15-16.
- 柴田保彦, 1981. 大阪四天王寺の「亀の池」. Nature Study, 27 (9) : 101-104.
- Smith, M. A., 1931. Reptilia and Amphibia. I.—Sauria. In the Fauna of British India, including Ceylon and Burma. Taylor & Francis, London. 185p.
- 高良鉄夫, 1965. セマルハコガメについて. 琉球文化財調査報告書, p.105-109.
- , 1979. セマルハコガメ. 環境庁第2回自然環境保全基礎調査 動物分布調査報告書(両生類・は虫類)全国版1978 : 109-111.
- , 1979. リュウキュウヤマガメ. 環境庁第2回自然環境保全基礎調査 動物分布調査報告書(両生類・は虫類)全国版1978 : 112-114.
- 高島春雄, 1932. 日本産亀鼈名集. 台湾博物学会会報, 22 : 152-163.
- , 1935. 本朝亀鼈概説. 学芸, 12 : 117-133.

#### ハブ類 (*Trimeresurus*)

- 阿部康男, 1959. ハブ被害対策のための一指針. ハブ研究会報告集, 1 : 45-46.
- ・三島章義, 1961. ハブの身体計測値より見た雌雄の特徴並びに食性について(第1報). 衛生動物, 12 : 135.
- ・森大三, 1960. ハブ及びハブ咬傷の医動物学的研究, ハブ咬傷発生の気象条件について. 衛生動物, 11 : 62-63.
- ・田中寛・三島章義・小野継男, 1965. ハブの自意的行動の解析, 特に照度との関係について. 衛生動物, 16 : 142.
- ・———・———・———, 1965. ハブならびにハブ咬症に関する研究(Tr.-3).

- ハブの行動解析, 特に照度との関係について. 衛生動物, 16 : 177-183.
- ・—————・—————, 1966. ハブ咬傷発生要因に関する研究. ハブの活動形態特に夜間における行動. 熱帯医学会報, 7 : 71.
- ・—————・—————, 1966. ハブの夜間活動性に関する研究. 衛生動物, 17 : 120.
- ・—————・—————, 1966. ハブの夜間活動性に関する研究. 鹿児島大学医学雑誌, 18 : 253-264.
- 新城安哲, 1981. 沖縄県における昭和55年のハブ咬症〔講演要旨〕. 爬虫両棲類学雑誌, 9 (2) : 65.
- ・照屋寛善, 1980. 沖縄県における1979年のハブ咬症について. 沖縄特殊有害動物駆除対策基本調査報告書(Ⅲ) : 37-49.
- ・—————, 1981. 沖縄県における昭和55年のハブ咬症について. 沖縄特殊有害動物駆除対策基本調査報告書(Ⅳ) : 25-41.
- ・—————・吉田朝啓, 1980. ハブ咬症後遺症調査. 沖縄特殊有害動物駆除対策基本調査報告書(Ⅲ) : 50-57.
- ・吉田朝啓・宮城重二・中村哲・照屋寛善, 1981. ハブ咬症後遺症調査. 沖縄特殊有害動物駆除対策基本調査報告書(Ⅳ) : 43-52.
- Brattstrom, B. H., 1964. Evolution of the pit vipers. Trans. San. Diego Soc. nat. Hist., 13 : 185-267.
- Döderlein, L., 1881. Die Liu-Kiu Insel Amami Oshima. Mitth. Deutsch Ost-Asiens Ges., 3 (1880-1884) : 140-156.
- Fischer, J.G., 1888. Herpetologische Mitteilungen. III. Über zwei von der Liukiui-Insel Okinawa stammende Schlangen. Bericht für das Jahr 1887, Naturhistorisches Museum zu Hamburg, 5 : 18-22.
- Fukada, H., 1964. Biological studies on the snakes, XI, Eggs and young of *Trimeresurus okinavensis* Boulenger. Bull. Kyoto Gakugei Univ., Ser. B, 24 : 7-10.
- (深田祝), 1975. ハブの高温致死温度測定を試み. 爬虫両棲類学雑誌, 6 (2) : 53.
- , 1978. ハブの体温と脈拍数と行動. The Snake, 10 : 17-20.
- ・木原大・林良博, 1979. 心電計によるハブ誘引・忌避剤の判定. The Snake, 11 : 16-19.
- Gloyd, H. K., 1955. A new crotalid snake from Kume Shima, Riu Kiu Islands. Bull. Chicago Ac. Sci., 10 : 123-134.
- Groves, F., 1959. Notes on *Trimeresurus f. flavoviridis*. Herpetologica, 15 : 182.
- 半沢正四郎, 1933. 琉球群島に於ける飯匙倩の奇異なる分布と同群島地史との関係. 地質雑, 40 : 323-325.
- , 1935. 琉球群島に於けるハブ(飯匙倩)の奇異なる分布と同群島地史との関係. 日本生物地理学会会報, 5 (3) : 173-198.

- (Hanzawa, S.), 1935. Topography and Geology of the Riukiu Islands. Sci. Rep. Tohoku Imp. Univ., 17 : 1-61. (2).
- 波多江信広, 1959. 奄美大島におけるハブの分布について. 鹿児島大学はぶ研究会報告集, 1 : 44-45.
- 林良博・川村善治・木原大・田中寛, 1959. ハブトラップの改良実験. ハブ駆除対策調査研究報告書 : 6-8.
- ・木原大・田中寛, 1978. クロルデンのハブに対する忌避および殺蛇効果について. The Snake, 10 : 56-59.
- ・———・———・昇善久・山下秀利・南竹一郎, 1979. 徳之島におけるハブの誘引・捕獲実験. The Snake, 11 : 45-53.
- ・昇善久, 1979. 奄美群島の住居におけるネズミの生息状況について. The Snake, 11 : 63-66.
- ・———・川口悦子・田中寛, 1978. 奄美大島・瀬戸内町におけるハブ生息実態調査. The Snake, 10 : 59-64.
- ・———・田中寛, 1978. 電気柵によるハブ侵入防止実験. The Snake, 10 : 42-46.
- ・———・和田芳武・田中寛, 1979. 電気柵によるハブの侵入防止法について. 11 : 58-62.
- ・田中寛, 1976. ハブの頭蓋標本を用いた年齢推定について. 衛生動物, 27 : 16.
- ・———, 1979. ハブの個体数の調査方法について. 衛生動物, 11 : 72-77.
- ・———・田中弘美, 1979. 徳之島におけるハブの全長および性構成について. 衛生動物, 11 : 67-72.
- Hilgendorf, F., 1880. Bemerkungen über die von ihm in Japan Gesammelten Amphibien nebst Beschreibung zweier neuer Schlangenarten. Sitzungsberichte der Gesellschaft naturforschender Freunde zu Berlin, (8) : 111-121.
- 池田研二・岩井矩成・和田芳武・林良博, 1979. ハブ行動追跡のための電波探知技術開発. The Snake, 11 : 29-31.
- ・大島正光, 1971. ハブの行動を追跡するための無線探知システム. The Snake, 3 : 14-19.
- ・和田芳武・林良博・岩井矩成・木原大・昇善久・山下秀利, 1978. 電波探知方式によるハブの行動の追跡. The Snake, 10 : 26-39.
- 池原貞雄・安部琢哉・赤嶺博行, 1980. ハブ生息地実態調査. 沖縄特殊有害動物駆除対策基本調査報告書(III) : 5-36.
- ・———・宮城康一・千木良範, 1979. 沖縄県下におけるハブ, *Trimeresurus flavoviridis flavoviridis* (Hallowell, 1860), 咬傷の分布. 第10回沖縄県公衆衛生学会記録集, 136-141.
- ・———・———・———, 1979. ハブ生息地実態調査. 沖縄特殊有害動物駆除対策基本調査報告書(II) : 1-81.

- ・—————・城間侔, 1978. ハブ生息地実態調査. 沖縄特殊有害動物駆除対策基本調査報告書: 1-56.
- ・—————・大神一宏・島村賢正, 1981. ハブ生息地実態調査. 沖縄特殊有害動物駆除対策基本調査報告書(IV): 1-23.
- 今村健二郎・若松道範・橋口俊幸ほか, 1957. 奄美大島群島に於けるハブ咬傷の実態に就て. 鹿児島医学雑誌, 30: 207-212.
- ・—————, 1959. ハブ咬傷に就いて. 鹿児島大学はぶ研究会報告集, 1: 39-43.
- 石井明・林良博, 1978. ヘビアメンバーを応用した飼育場内でのハブ駆除の試験. The Snake, 10: 16-17.
- ・川口悦子・林良博, 1979. ヘビアメンバーを用いたハブ駆除に関する研究. The Snake, 11: 25-27.
- ・昇善久・小野継男・沢井芳男, 1971. 奄美大島産の数種の蛇に対する *Entamoeba invadens* の実験的経口感染について. The Snake, 3: 30-34.
- Ishizaka, T., 1907. Studien über das Habuschlangengift. Zeitschrift für Experimentelle Pathologie und Therapie, Berlin, 4: 88-117.
- 鹿児島県, 1943. はぶ. 鹿児島県史, 4: 862-863.
- 香村昂男, 1975. ハブ(*Trimeresurus Flavoviridis*)幼蛇の実験室内飼育(第一報) 3年間の飼育状況について. 沖縄県公害衛生研究所報, (9): 127-138.
- ・具志堅清徳, 1972. ヒメハブの幼蛇の飼育について. The Snake 4 (2): 118-119.
- ・島村賢正, 1980. ハブ(*Trimeresurus flavoviridis*)の実験室内飼育(第二報)—7年間の飼育状況について—. 沖縄県公害衛生研究所報, (14): 59-73.
- 鹿島親俊, 1957. 猛毒をもつハブが森林経営に及ぼす影響について. 森林防疫ニュース, 6: 149-153.
- 勝連盛輝・新城安哲・香村昂男・吉田朝啓, 1976. 水納島におけるハブ防除に関する研究(2), ハブの分布について〔講演要旨〕. 爬虫両棲類学雑誌, 6 (4): 118-119.
- ・桑江なおみ・中田福市, 1979. 塩化カリウムの殺蛇効果. 沖縄特殊有害動物駆除対策基本調査報告書 (II): 164-168.
- ・竹田弘・吉田朝啓, 1979. 水納島ハブ駆除実験. 沖縄特殊有害動物駆除対策基本調査報告書(II): 136-147.
- ・吉田朝啓, 1980. 水納島ハブ駆除実験. 沖縄特殊有害動物駆除対策基本調査報告書(III): 59-63.
- ・—————, 1981. 水納島ハブ駆除実験. 沖縄特殊有害動物駆除対策基本調査報告書(IV): 67-73.
- 木原大・林良博・和田芳武・山下秀利・昇善久, 1979. ハブに対する誘引効果の判定法, II. 野外飼育場での効果判定法. The Snake, 11: 54-58.

- ・宮下衛・脇阪一郎・林良博・田中寛・積田享, 1978. ハブ誘引剤の検定方法の研究. The Snake, 10 : 6-10.
- ・山下秀利, 1978. 爬虫類に対する各種農薬の殺滅効果について. The Snake, 10 : 10-15.
- ・———・林良博・和田芳武・田中寛, 1979. ハブに対する誘引効果の判定法の研究, I. 室内での効果判定法. The Snake, 11 : 11-15.
- 岸田久吉, 1931. 渡瀬先生とマングース輸入. 動雑, 43 : 70-78.
- Kitajima, T., 1908. On "Habu" venom and its serum therapy. Jour. Sci. Philippine, 3 : 151-164.
- 木場一夫, 1960. 奄美群島のハブの生態, 特に食物. 動雑, 69 : 76.
- , 1961. 奄美群島におけるハブ属の生態. 熱帯医学会報, 2 : 11-12.
- , 1961. 奄美群島におけるハブ及びヒメハブの食物について. 熊本大学教育学部紀要, 9 : 220-229.
- , 1962. 奄美群島及びトカラ群島産ハブ属に関する研究. 日本学術振興会, 東京, 119p.
- , 1963. 奄美群島におけるハブ及びヒメハブの食物について(追記, I). 熊本大学教育学部紀要, (11) オ1分冊(自然科学) : 35-40.
- , 1963. ハブおよびヒメハブの形態的・生態的特性. 動雑, 72 : 369-370.
- , 1964. ハブの生態. 衛生動物, 15 : 95.
- , 1968. 奄美群島におけるハブ及びヒメハブの食物について(追記, II). 熊本大学教育学部紀要, (16) オ1分冊(自然科学) : 69-75.
- , 1971. ハブの生物誌. The Snake, 3 : 75-96.
- , 1979. 奄美大島産ハブの食物としての蛇類. 银杏学園紀要, (4) : 9-12, pl. 1.
- ・菊川大東, 1968. トカラハブについて[講演要旨]. 爬虫両棲類学雑誌, 2 (4) : 53.
- ・———, 1969. トカラ列島産トカラハブの分類について. 日本生物地理学会会報, 25 (1) : 1-8.
- ・———, 1969. トカラ列島産トカラハブの学名について. 熊本生物研究誌, 4 : 1-2.
- ・———, 1971. トカラハブの分類に関する研究. The Snake, 3 : 39-52.
- ・———, 1976. サキシマハブの形態について. 银杏学園紀要, (1) : 19-32.
- ・森本弘毅・中本英一・吉崎潔・小野継男・田中顕一, 1970. 奄美大島産ハブの卵及び産卵について. The Snake, 2 : 22-31.
- ・中本英一・小野継男・田中顕一・馬場敬次, 1967. 奄美群島におけるハブの産卵及びびふ化について. 熊本大学教育学部紀要, (15) 第1分冊(自然科学) : 29-37.
- ・———・———・———, 1967. ハブの産卵及びびふ化について. 日本熱帯医学雑誌, 8 (1) : 35.
- ・———・植村武恭, 1964. ハブの産卵及びびふ化について(予報). 爬虫類学雑誌, 1 : 26.
- ・田中顕一, 1968. ハブの卵と幼蛇について[講演要旨]. 爬虫両棲類学雑誌, 2 (4) : 49.

- ・———, 1970. ヒメハブの卵について〔講演要旨〕. 爬虫両棲類学雑誌, 3 (4) : 30-31.
- ・———, 1973. 奄美群島産ヒメハブの分類ノート〔講演要旨〕. 爬虫両棲類学雑誌, 5 (2) : 30.
- ・———・中本英一・森本弘毅, 1970. トカラハブの卵・産卵及びふ化について.  
The Snake, 2 : 32-38.
- ・———・吉崎潔・中本英一, 1970. 奄美大島産ヒメハブの卵及びふ化について.  
The Snake, 2 : 111-121.
- 小玉正任, 1974. 又ハブ. 会計と監査, 25 (8) : 52-53.
- , 1975. 毒蛇ハブ. 日本広報センター, 東京, 239p.
- 黒岩恒, 1892. 球陽雜譚. 動雑, 4 : 486-496.
- , 1893. 球陽雜譚(第三稿). 動雑, 5 : 123-126.
- Landois, H., 1888. *Trimeresurus Riukinensis* Hilgendorf. 16ter Jahresbercht.  
des westfalischen Provinzial-Vereins für Wissenschaft und Kunst, Munster : 45.
- 前田博, 1978. ハブ咬症と気象因子との関連について. The Snake, 10 : 85-87.
- Martin, Walter B., 1946. Clinical experience with snake bits on Okinawa.  
Bull. U. S. Army. med. Dept. 5 : 79-82.
- 正木任, 1939. 八重山群島におけるハブの出現期. 天気と気候, 6 : 240-241.
- Maslin, T. P., 1942. Evidence for the separation of the crotalid genera *Trimeresurus* and  
*Bothrops*, with a key to the genus *Trimeresurus*. Copeia, 1942 : 18-24.
- 松井孝爾, 1956. 奄美大島とハブ. 衛生害虫, 10 : 43-44.
- ・今井敏夫・山崎恵子, 1968. ヒメハブの繁殖について〔講演要旨〕. 爬虫両棲類学雑誌,  
2 (4) : 48-49.
- 水上惟文, 1977. 脊椎骨によるハブの年齢推定. 動雑, 86 : 82-86.
- , 1977. 温度変化とヒメハブの活動. 爬虫両棲類学雑誌, 7 (1) : 4-9.
- ・藤井充昭・田中満, 1980. 奄美大島におけるハブ捕獲数の周期的変動(第二報). 爬虫両  
棲類学雑誌, 8 (3) : 95-99.
- ・中本英一, 1980. ハブの孵化および孵化後の発育について(予報). The Snake,  
12 : 11-14.
- ・———・松下仁六・鳥入佳輝・武原清満・福島英雄, 1980. 奄美大島におけるハブの  
体長計測. The Snake, 12 : 8-10.
- ・小野継男, 1976. 奄美大島におけるハブの体長組成(予報). 爬虫両棲類学雑誌, 6 (3)  
: 61-63.
- ・———・中本英一, 1978. 奄美大島におけるハブ捕獲数の周期的変動. 爬虫両棲類学  
雑誌, 7 (4) : 81-84.
- 三島章義, 1961. ハブとその被害及び対策. 鹿児島県衛生部, 名瀬保健所 : 1-41.
- , 1962. ハブ(*Trimersurus flavoviridis*)の繁殖について(第二報). 熱帯医学会報, 3 : 26.
- , 1963. ハブの生態について. 熱帯医学会報, 4 : 46.
- , 1965. ハブの産卵・孵化並びに奄美大島のハブ属の食性について. 爬虫類学雑誌,

- 1 (3) : 55-56.
- , 1966. ハブに関する研究I. 奄美群島産ハブの食性について. 衛生動物, 17 : 1-21.
- , 1966. ハブに関する研究II. 実験的給餌によるハブの食性の研究. 熱帯医学会報, 7 (2) : 8-17.
- , 1966. 奄美群島産ヒメハブの食性に関する研究. 爬虫類学雑誌, 1 (4) : 67-74.
- , 1967. ハブに関する研究III. ハブの夜間活動性について. 衛生動物, 18 : 27-31.
- , 1968. ハブの日周行動の観察〔講演要旨〕. 爬虫類学雑誌, 2 (4) : 46.
- , 1980. 徳之島で採集された大型ハブとシロハブ. 爬虫両棲類学雑誌, 8 (4) : 141.
- , 1981. ブロック塀のハブ防除効果について. 爬虫両棲類学雑誌, 9 (2) : 65-66.
- ・中本英一・米丸操・沢井芳男・山本久, 1978. ハブ駆除に関する研究I, 捕獲成績からみた奄美群島与路島のハブ生息状況(1). The Snake, 10 : 151-164.
- ・———・———・———・———, 1979. ハブ駆除に関する研究II, 捕獲成績からみた奄美群島与路島のハブ生息状況(2). The Snake, 11 : 134-142.
- ・沢井芳男, 1978. 徳之島町手々・轟木両部落のハブ棲息状況. 爬虫両棲類学雑誌, 7 (4) : 108-109.
- ・———, 1978. ハブ駆除対策予備調査. The Snake, 10 : 88-89.
- ・———, 1979. 徳之島町手々・轟木両部落のハブ生息状況. The Snake, 11 : 113-116.
- 三浦守治, 1896. 飯匙蛇毒の調査. 動雑, 8 : 182-189.
- 宮下衛・脇阪一郎, 1979. 徳之島における居住環境とハブの屋敷内への侵入との関係について. The Snake, 11 : 103-108.
- ・———, 1979. 徳之島, 花時名部落におけるハブの出現とその背景について. The Snake, 11 : 109-112.
- 森田忠義・福島英雄, 1967. ハブの生態に関する研究(第2報), 産卵・孵化について. 日本熱帯医学雑誌, 8 : 35-36.
- 中本英一, 1978. ハブ捕り物語. 三交社, 東京, 214p.
- 中村哲・平良一彦・宮城重二・知花宏光・竹島賢・照屋寛善, 1981. 伊江村におけるハブ咬症後遺症調査. 沖縄特殊有害動物駆除対策基本調査報告書(IV) : 53-61.
- 西村昌彦, 1981. 除去法によるハブ駆除—駆除の能率を上げるためには—. 沖縄特殊有害動物駆除対策基本調査報告書(IV) : 63-65.
- Okada, Y., 1932. Notes on the Amphibia and Reptilia of Kotosho (Botel Tobago). Bull. Biogeog. Soc. Japan 3 (1) : 13-23.
- , 1933. *Trimeresurus tokarensis* and *Laticauda semifasciata* [review]. Copeia, 4 : 227.
- , 1964. ハブ(恐るべき毒蛇の全貌), 高良鉄夫著〔書評〕. 爬虫類学雑誌, 1 (1) : 8.
- 大島正満, 1915. 飯匙倩蛇. 台湾博物学会会報, 5 (22) : 86.
- , 1915. 沖縄のハブ. 台湾博物学会会報, 5 (22) : 86-87.
- 崎原盛造, 1973. 沖縄におけるハブ対策(特集秋ぐちの保健). 保健の科学, 15 (9) : 574-576.
- 佐々学・田中寛ほか, 1972. 奄美大島におけるハブの生態に関する研究. 熱帯, 6 (3) : 25-36.

- ・———ほか, 1972. 奄美大島におけるハブの生態に関する研究, 熱帯, 7 (2) : 87-96.
- 沢井芳男, 1957. 毒蛇ハブになやむ奄美大島, 東京医事新誌, 74 : 641-642.
- , 1958. 人と大島とハブと, 日本医事新報, 1793 : 57-60.
- , 1959. 沖縄におけるハブ蛇被害対策, 東京医事新誌, 76 : 86.
- , 1959. はぶに挑む, 東京医事新誌, 76 : 709-715.
- , 1960. ハブ毒と死, 東京医事新誌, 77 : 501-505.
- , 1972. 免疫と血清, ハブ毒との戦い, 日本放送出版協会, 東京, 201p.
- , 1972. ハブ咬症とその対策(特集・おきなわ), 保健の科学, 14 (6) : 350-354.
- , 1973. アジアの毒蛇咬症, The Snake, 5 (1-2) : 29-75
- ・福山民夫・川村善治ほか, 1972. 1970年における奄美大島及び沖縄のハブ咬症の現況について, The Snake, 4 : 89-95
- ・川村善治, 1980. 1976年の奄美大島におけるハブ咬症の現況について, The Snake, 12 : 1-7.
- ・———・福山民夫, 1968. 1965年より1967年にわたる奄美大島及び沖縄におけるハブ咬症の現況について, 熱帯, 3 : 56-70.
- ・———・———ほか, 1970. 1968年における奄美大島及び沖縄のハブ咬症の現況について, The Snake, 2 : 98-105.
- ・———・———ほか, 1971. 1969年における奄美大島及び沖縄のハブ咬症の現況について, The Snake, 3 : 1-8.
- ・———・———ほか, 1972. 1970年における奄美大島及び沖縄のハブ咬症の現況について, The Snake, 4 : 89-95.
- ・———・———ほか, 1974. 1971年における奄美大島及び沖縄のハブ咬症の現況について, The Snake, 6 : 76-82.
- ・———・———ほか, 1975. 1972年の奄美大島におけるハブ咬症の現況について, The Snake, 7 : 68-72.
- ・———・田中寛, 1964. 1963年の奄美大島におけるハブ咬症の調査成績について, Minophagen med. Rev., 9 : 182-185.
- ・———・館野功ほか, 1965. 1963年の奄美大島におけるハブ咬症患者の現況について, 熱帯医学会報, 6 : 66.
- 城間 侔・勝連盛輝・木下靖之・笹岡正純, 1980. 殺蛇剤(KCl)を用いたハブ駆除—野外実験 I—. 沖縄特殊有害動物駆除対策基本調査報告書(III) : 67-74.
- ・木下靖之, 1980. 防蛇壁の開発, 沖縄特殊有害動物駆除対策基本調査報告書(III) : 124-128.
- ・三井興治・笹岡正純, 1981. 水納島のリュウキュウジャコウネズミ, 沖縄特殊有害動物駆除対策基本調査報告書(IV) : 75-76.
- ・笹岡正純, 1981. ハブの活動性についての研究(予報)—その出現を中心に—, 沖縄特殊有害動物駆除対策基本調査報告書(IV) : 77-97.

- , 1981. 防蛇壁の開発II—垂直壁とかえしの効果—. 沖縄特殊有害動物駆除対策基本調査報告書(IV) : 99-108.
- Stejneger, L., 1940. The generic concept. *Copeia*, 4 : 217-218.
- Suzuki, T., 1921. Experimentelle "Habu"-Gift-Nephritis. *Mitteilungen aus dem pathologischen Institut zu Sendai*, I: 225-242.
- , 1921. Experimentelle Studien über die chromische Nephritis, welche aus der akuten hervorgeht. (Zweiter Bericht über Habu-Gift-Nephritis.) *Mitteilungen aus dem pathologischen Institut zu Sendai*, 1 : 243-292.
- 高良鉄夫, 1954. 戦後沖縄におけるハブの増殖と被害. *応用動物学雑誌*, 18 (4) : 187-192.
- , 1960. 琉球列島におけるハブ属の分布. *熱帯医学研究会抄録集*, (2) : 10.
- , 1963. ハブ—恐るべき毒へびの全貌. 光有社, 沖縄. 193p.
- , 1965. 琉球におけるハブ属の習性. *植物防疫*, 19 (1) : 17-20.
- , 1966. 琉球列島におけるハブ属の分布. *南と北*, 39 : 41-50.
- , 1969. 毒蛇ハブは私の親友. *月刊ペン*, 1月号, 236-245.
- , 1972. 沖縄のハブ(沖縄復帰記念特集). *森林防疫*, 21-7 (244) : 16-19.
- , 1973. ハブ=反鼻蛇. *琉球文教図書*, 沖縄. 231p.
- , 1974. 琉球のハブの生態と利用. *新栄養*, 65 : 90-99.
- , 1975. ハブの生態. *日本の旅路(ふるさと物語)*, 14 : 112-113.
- 田中寛, 1973. ハブの行動と生態. *The Snake*, 5 : 116-132.
- ・林良博・和田芳武, 1979. 奄美群島におけるハブ咬症発生に関連する要因の疫学的研究. *The Snake*, 11 : 79-83.
- ・三島章義, 1967. はぶの季節的消長, 日周活動と咬症の関係について. *衛生動物*, 18 : 156.
- ・———・小野継男, 1967. ハブ活動の消長と咬症の関係. *衛生動物*, 18 : 113-118.
- ・和田芳武ほか, 1971. ハブの生息密度測定法の研究. *The Snake*, 3 : 9-13.
- ・———ほか, 1971. ハブの牙の攻撃エネルギー. *The Snake*, 3 : 63-64.
- 鳥羽通久・堺淳・森口一・沢井芳男・高橋寛, 1980. 徳之島産ハブの外部形態について. *爬虫両棲類学雑誌*, 8 (4) : 140-141.
- 照屋寛善, 1959. 琉球列島におけるハブ咬症の疫学的研究. *衛生動物*, 10 : 115-127.
- , 1961. 琉球におけるハブ咬症の疫学. *熱帯医学会報*, 2 : 12.
- , 1962. 琉球におけるハブ咬症の疫学, 第2報(気象とハブ咬症との相関関係). *熱帯医学会報*, 3 : 25.
- ・新城安哲・桑江なおみ, 1979. 沖縄県における1978年のハブ咬症について. 沖縄特殊有害動物駆除対策基本調査報告書(II) : 83-106.
- ・———・———, 1979. サキシマハブ咬症後遺症調査. 沖縄特殊有害動物駆除対策基本調査報告書(II) : 107-116.

- ・—————・大浜なおみ・外間善次, 1978. 沖縄県における昭和52年のハブ咬症について. 沖縄特殊有害動物駆除対策基本調査報告書 : 57-76.
- 和田芳武, 1972. 極超短波(UHF)を用いたハブの行動追跡, 1971年の成績. *The Snake*, 4 : 44-50.
- ・池田研二・木原大・林良博・岩井矩成・昇善久・山下秀利, 1979. 電波探知方式でみたハブの行動. *The Snake*, 11 : 32-36.
- ・木原大・林良博・田中寛, 1979. 屋敷内ハブ咬症発生から見たハブ生息密度の分布推定. *The Snake*, 11 : 37-43.
- ・田中寛・小熊譲・佐々学・池田研二ほか, 1971. 極超短波(UHF)を用いたハブの行動追跡. *The Snake*, 3 : 20-23.
- 渡瀬庄三郎, 1911. 渡名喜島の「マングース」繁殖す. *動雑*, 23 : 109-110.
- Werner, F., 1909. Über neue oder seltene Reptilien des naturhistorischen Museums in Hamburg. I. Schlangen. *Mitteilungen aus dem naturhistorischen Museum in Hamburg*, 26 : 205-247.
- , 1922. Synopsis der Schlangenfamilien der Amblycephalidae und Viperidae, nebst Übersicht über die kleineren Familien und die Colubriden der Achrocordiengruppe. Auf Grund des Boulengerischen Schlangenkatalogs (1893-1896). *Archiv für Naturgeschichte*, Berlin, 88 A (8) : 185-244.
- 脇阪一郎・宮下衛・安藤哲男・高野敦子, 1978. 奄美群島におけるハブ咬傷の疫学像. *The Snake*, 10 : 66-75.
- ・—————・—————・—————, 1978. 奄美大島と徳之島におけるハブ咬傷疫学像の比較. *The Snake*, 10 : 76-85.
- ・—————・—————・—————, 1979. 奄美群島における「はぶ」咬傷の疫学的研究. *The Snake*, 11 : 83-102.
- 屋代弘孝, 1930. 飯匙蛇 *Trimeresurus flavoviridis* Hallowell の卵並に同属の分布に就て. 鹿児島博物同志会報, 2 : 98-101.
- 吉田朝啓, 1977. ハブと人間. 琉球新報社, 沖縄, 270p.
- , 1979. 改訂ハブと人間. 琉球新報社, 沖縄, 271p.
- , 1980. 試論, ハブと人間の住み分けのための方法論. 沖縄県公害衛生研究所報, (14) : 43-58.
- ・新城安哲, 1979. 防蛇壁予備実験. 沖縄特殊有害動物駆除対策基本調査報告書(II) : 179-181.
- ・香村昂男・新城安哲, 1979. ハブの産卵空洞の試作と産卵予備実験. 沖縄特殊有害動物駆除対策基本調査報告書(II) : 169-178.
- ・—————・—————, 1980. ハブの繁殖防止に関する研究. 沖縄特殊有害動物駆除対策基本調査報告書(III) : 88-123.
- ・—————・—————・勝連盛輝, 1976. 水納島ハブ駆除に関する研究(1) 駆除のための原理と予備実験の結果について〔講演要旨〕. *爬虫両棲類学雑誌*, 6 (4) : 118.

- ・勝連盛輝・新城安哲・香村昂男・大浜なおみ, 1977. 水納島におけるハブ駆除に関する研究(3)[講演要旨]. 爬虫両棲類学雑誌, 7 (2) : 44.
- ・————・大浜なおみ, 1976. ハブの防除に関する研究, (2) ハブを選択的に除去する方法について. 沖縄県公害衛生研究所報, (10) : 115-122.
- ・————・————・新城安哲・香村昂男・竹田弘・千川裕・赤星一成, 1978. ハブ駆除野外実験. 沖縄特殊有害動物駆除対策基本調査報告書 : 95-149.
- 四元虎則, 1959. 奄美大島に於けるイタチの放獣. 島獣集報, 17 : 156-158.

一 三具足諸飾之儀御婚禮御祝儀並常御成之時ニも御同様ニ飾り候哉

付 神前仏前之外ニ者用得不申候哉右之通御書院御婚禮御祝儀之時御書院御床御同様ニ飾り候而も如何候哉

是之処本文之通可相濟候哉 御奉行様御招請之時ニも相応仕候哉

酉 飾ニ□□千；□候処↓向ニ者飾不申

丑 御祝儀ニ↓場ニ

未 御婚禮御祝儀之時

七 飾

大 置候

九 真

三 候なり↓仕候なり

三 仕来

三 飾伝(書物)ニ者

三 飾之被仰候↓書物相見得候

三 被仰候是又委曲取分ヶ被仰聞可被下候↓前文相見得候兩様……哉

三 上様 国頭親雲上より初而御成之時

六 置

七 且又

六 中尊之前ニ折卓中ニ香炉前ニ香合後ニ香匙火筋立左右ニ真之対立花

仕候処兩様共↓御書院御同然……ニ而候

三 二茂↓並

三 是又委曲被仰聞可被下候

三 三

三 三

三 就夫ハ私共了簡計ニ而者↓儀何様……候哉

三 御座候間以後右式之時ニ茂ニ幅対ニ真心之対花相用得候而も不苦敷

候哉是又委曲被仰聞可被下候↓候向後……不苦候哉

三 本

三 宜御座候哉↓如何候哉

三 式之時↓体之節

三 敷

三 是又取分ヶ委曲被仰聞可被下候

## 〈資料紹介〉

「御書院御物帳」(沖繩県立博物館蔵)

「御座飾帳」(同)

「御書院並南風御殿御床飾」(同)

## 渡名喜 明

(となき あきら 県立博物館学芸員)

一六〇九年、薩摩藩島津氏は大軍をもって琉球に攻め入った。百戦練磨の兵力と武器の前に、琉球側はひとたまりもなく敗北した。尚寧王はじめ重臣たちは捕虜として薩摩に連行され、この間に島津の手で琉球全島の検地が行われた。一方、薩摩藩主島津家久は、尚寧を伴って駿府に徳川家康に謁し、さらに江戸に上って将軍秀忠に謁した。琉球入りの確認と、尚寧が徳川幕府の陪臣となったことを報告するためであった。

一六一一年、家久は沖繩島以南の総石高を八万九千八十六石とし、内五万石を王府に、残りを諸士に配分するよう命じた。奄美群島は分割され、島津の直轄領となった。さらに芭蕉布三千反、上布六千反などの諸雑物の貢納が命じられた。この年尚寧は、永久的に島津に服従し、忠誠を尽くす旨の誓約書を提出させられ、「掟十五ヶ条」が授けられて、一行は帰国を許された。

かくして、琉球は徳川幕府から島津氏に「領知」せられ、島津の付庸

国となった。以後、国王の継嗣や三司官など重臣の任命には、島津の承認が必要とされた。中国との進貢貿易も薩摩の厳重な監視、監督のもとに行われることになり、一六三一年には島津の役人が「在番奉行」として那覇に駐在することになった。在番奉行は進貢貿易、島津への貢納、キリシタン禁制などを始めとして、外交内政の全般にわたって監視の眼を光らせた。

一方、一六一三年以降毎年頭使が鹿兒島に派遣されることになり、また島津家に吉凶のある時は、特使を派遣する慣例が作られた。これは大和上国、または大和上りと呼ばれた。また、徳川幕府に対しては、將軍就任に際しては賀慶使、国王の即位にあたっては恩謝使が派遣され、將軍に拝謁することとなった。いわゆる江戸上りである。

大和上り、江戸上りにあたっては各種の儀式が執り行なわれることから、沖繩の王族・士族は、大和式の儀礼・作法・学芸を教養として身に

付けることが必要とされた。尚質王の摂政羽地朝秀の「仕置」には、次の「覚」が入っている（一六六七年）。

### 覚

- 一、学文之事 一、算勘之事
- 一、筆法之事 一、筆道之事
- 一、医道之事 一、立花之事
- 一、容職方之事 一、謡之事
- 一、唐楽之事 一、包丁之事
- 一、茶道之事 一、馬乗方之事

右之芸若キ衆中、達道ニ相嗜上之御用可立儀專要ニ候、右之内一芸ニ而も不嗜方者縦無余儀雖為筋目、被召遣間敷候間、為前以触渡者也。

未四月廿三日

羽地

摩文仁

伊野波

具志頭

これら大和芸能奨励が掛声だけに終わったのではないことは、「阿嘉親雲上直識遺言書」で察せられる。阿嘉直識は一七二二年に生まれ、一七八四年に没した。遺言書の前篇は直識五十八歳の時、すなわち一七七八年に書かれている。それによれば阿嘉は十三歳の時から謡の稽古を始め、十五歳からは漢学、十七歳から和学を、さらに二十歳になって和歌の手ほどきを受け始めたことを、書物名や師匠名をあげて述べている。一方、書は尊王親王の流れを学び、有職故実は在番奉行所横目役から伝授され

たという。そして、「茶道活花も稽古不致候て不叶事にて候間、余力の時に可致稽古事」と述べている。

阿嘉直識は、在番奉行以下の役人を接待する任務を持つ大和横目を勤め上げた人物で、その意味では余の士族以上に諸芸に励んだと考えられる。しかし後に述べるように、王国時代末期には八重山石垣島の地方役人が立花その他大和芸能の稽古に励んでいたことを見ても、士族間に大和芸能が一般教養として、ひととおりは嗜まれていたことがうかがえる。

阿嘉は遺言書の中で、孫憶、謝天遊、馬元欽ら福州の画家の掛物、巻物のほかに、日本の狩野探幽、法眼永真らの絵も家宝として秘蔵している旨述べている。なかには本人が購入したものばかりでなく、阿嘉家の先祖が買い求めたものも含まれている。自ら諸芸に励むばかりでなく、こうした古画の収集も行われ、鑑賞されていたのである。

在番奉行は前述したように一六二八年に創まり、一八七二年の琉球藩設置まで、三年交替で滞在した。島津の権力と威光を笠に着て、ほしいままのふるまいに出たことが、島津から送られた「琉球在番江相渡置候御条書条々」(一七〇〇年)によって知ることができる。阿嘉直識が勤めた大和横目が、在番奉行以下の役々を接待する費用は自前であったといわれ、この職を勤めた者の家には泥棒も入らない、といわれたという。これに対して、在番奉行は三年の勤務で蔵が建つといわれた。有名な那覇大綱引も、発生の理由はともかく、後世は在番奉行着任を祝って三年毎に催された。

すでに天啓年間(一六二一—一六二七)には、首里城内に南風御殿(南

殿註6)が建てられていた。冊封使接待を目的とする北殿に対し、薩摩からの役人を接待するために設けられたもので、純和様の建築であった。書院註7)の創建は明らかでないが、一六二二年に翁啓豊が初めて「御書院当官」に任せられたとする記録がある註8)。

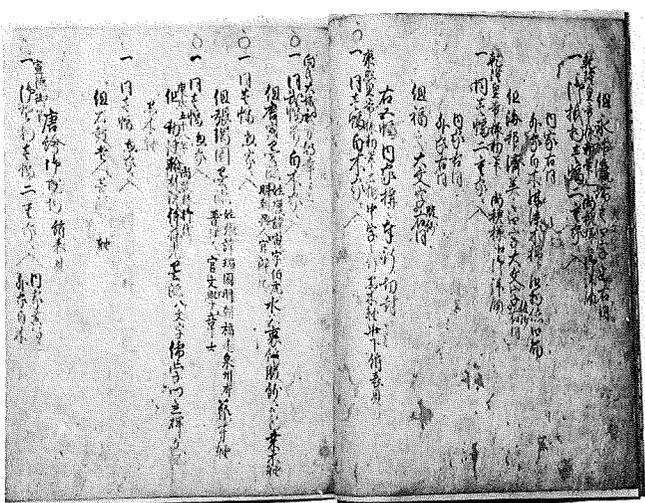
「御書院御物帳」

楮紙十四枚からなり、縦二七・四cm、横二〇・九cmで袋綴になっている。「御茶道方」によって書かれたものである。御茶道の係は書院勤めで、三人に相付三人の六人である。勤め向きは「活花上り御茶揚相携候事」(仲吉朝助編「古老集記類」とあるように、活花や茶道およびこれに伴う諸道具を管轄するものであった註9)。本文書の内容は、王府が所蔵する中国および日本の古書画の目録である。掛物、巻物、手鑑の順に記述されている。

掛物の項は、「唐字御掛物」から始まる。冒頭には清国皇帝から琉球国王へ下賜された直筆が並んでいる。直筆拝領は、福建靖南王謀叛の時、琉球がこれにかまいたく忠順の意を表したことに對する賞物として、康熙帝より下賜されたことに始まる。この書は尚貞王の冊封使汪楫によってもたらされたもので、一六八三年のことである。本文書にあがっている「中山世土」がこれである註10)。

その後、皇帝即位のたびに直筆が下賜されたが、一七八四年には、皇帝の長寿を祝する意味で、特別に直筆が下賜された。これが「海邦濟美」である註11)。直筆の下賜に対しては返札として金鶴を献上する慣例であった註12)。

が、この時には薩摩から金銀を異国へ持ち出すことは天下の御大禁であるから、別の品にするようにとの指示が与えられた。これに對する琉球館(鹿児島在)の返書が、『琉球館文書』に収録されている。返札の使者は、一七八九年に派遣された。このとき使者一行は格別のもてなしを受け、再度直筆「福」の字および各種の賞物を下賜された。この直筆も本文書にあがっている。



(A) 御書院御物帳

『中山世譜』によれば、この次に国王が受けた皇帝直筆は嘉慶帝の「海表恭藩」で、冊封使趙文楷、副使李鼎元一行によってもたらされたものである註13)。これは一八〇〇年のことであり、この直筆が本文書に掲載されていないことから、本文書の成立は、一七八九年から一八〇〇年の間であることが推測される。次に紹介する「御座飾帳」の内容が、一七九〇年から一七九

三年にまたがるものであるから、両書は時期的にほぼ重なっていると見ることができると見

本文書に見える中国の著名な書家としては、唐寅、張璪、蘇軾等があり、『中山伝信録』で知られる尚敬の冊封副使徐葆光の書も含まれている。絵画では牧溪、顔輝、陳容、王翬、王淵、文徵明、劉松年、仇英、子昂等の作品があがっている。沖縄から派遣された絵師を指導した福州の画家孫億の絵もある。

日本画では狩野永徳、探幽、常信、元信、洞雲、安信、周信等狩野派の著名な画家が並んでいる。ほかに雪舟、等閑秋月、小堀遠州、古田織部、一休、木村探元齋の作品も見える。書の方では藤原俊成、小堀遠州、一休等の作品がある。

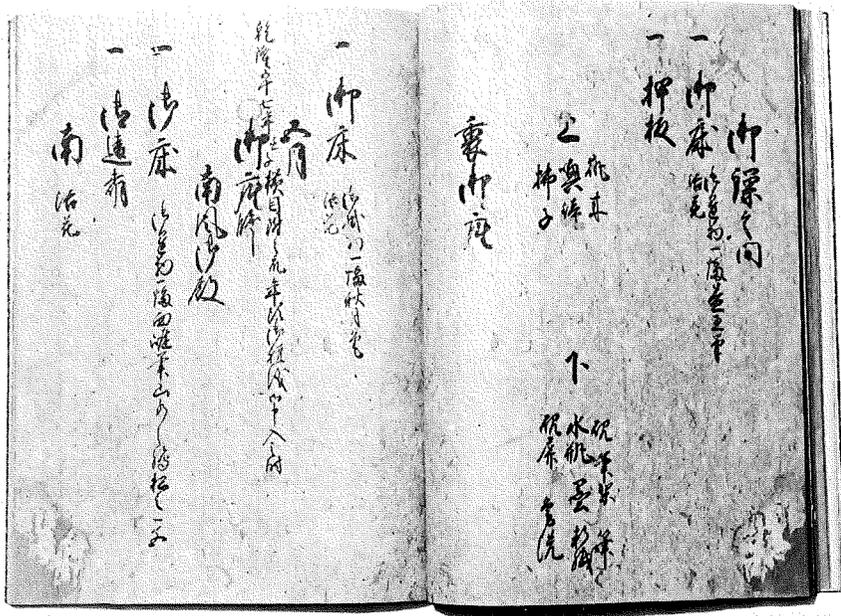
ここにあがった書家、画家はいずれも一流の面々ばかりといつてよいだろう。これらの書画は中国皇帝や島津藩主から拝領したもの以外に、家臣から献上されたものや、時の在番奉行（諏訪左衛門）から献上されたものもある。出所が記されていないものうち中国ものは、進貢使や接貢使一行あるいは官生に託して買い求めたものか、冊封使一行がもたらしたものであろう。日本の書画は、薩摩に上国した使者あるいは江戸上りの一行に託して買い求めたものか。大和横目を勤めた阿嘉直識家に、狩野永徳や孫億等の絵が秘蔵されていたことからしても、著名な作家の作品を収集する慣わしは、ひとり王府に限られていたのではないのであつて、こうした習慣と教養が士族の間にあつてこそ、王府もこれだけのものを集められたとはいえないだろう。

本文書には随所に朱書が入っていて、時に字句や作者名を修正し、時には格護のさまを加筆している。筆跡からして同一人物の手になるものと見られるが、興味深いのは巻末に同じく朱書で、琉球側の画家琥以祚石嶺親雲上伝福の山水図一幅、花鳥図一幅が追加されていることである。もちろんこれは冒頭の目録にはあがっていない。石嶺伝福（一六八八―一七四七）は、同じく画家として知られる伝莫の長子で、一七一〇年に王府の絵師となり、一七二五年には花鳥図十二枚、山水図二枚を描いて王府に献上していることが、家譜註によって知られる。一七三四年には絵師主取に任じられている。本文書に記載されている山水図、花鳥図は伝福が献上したものに違いないだろう。それにしても、本文書が書かれたと見られる一七八〇年代といえは、沖縄絵画史上で名を知られる欽可聖城間清豊（自了一六一四―一六四四）、伝福の父琥自謙石嶺伝莫（一六五三―一七〇三）、呉師虔山口宗季（一六七二―一七四三）、殷元良座間味庸昌（一七一九―一七六七）などの作品もまだ多く残されており、印象も新しくたはずである。石嶺伝福の絵だけが、それも朱書で書き加えられた理由は、今のところ知る手だてがない。

#### 「御座飾帳」

楮紙二十四枚からなり、縦二五・一cm、横一九・二cmで袋綴となっている。筆者は「公事帳調部方」となっているが、首里王府のどこに属するか不明である。在番奉行および付役の衆を招請した際に行われた南殿、書院、御鎖之間などの座敷飾り、床飾りを記録したものである。一

七九〇年七月から一七九三年正月に至る時期の記録で、飾りの回数は一七回である。招請は在番奉行および付役衆の着任と退任、年頭挨拶、暑中見舞、寒中見舞となっている。ここで一七六〇年二月に着任した<sup>註</sup>在番奉行本田朝次郎以下の出迎え、招請に関する記録を紹介する。



(B) 御座飾帳

一御在番奉行并御役々衆之儀、為<sup>註</sup>上使御渡海被成候付那霸御入津之砌  
 撰政三司官御迎に御下、於詰所段々御馳走有之、且又<sup>註</sup>上様御始王子  
 按司三司官並親方中、其外役場ニ付て御取合之面々日賦を以御下着之  
 御祝儀申上、御有付御用として品物をも差上、其上<sup>註</sup>上様並王子三司  
 官よりは年に三度づ、御招請有之候先例之事。(以下略)

(仲吉朝助編「古老集記類」<sup>註</sup>)

在番奉行の権勢がうかがわれる記録である。ここでいう年三回とは年頭、暑中見舞、寒中見舞のことで、国王、王子、三司官から招請されるのであり、後述するように王城では着任・退任の招請も加わるから年に十数回の招請を受けていることになる。どの場合も付役衆まで招かれた訳ではないだろうが、ちなみにいえば、在番奉行所の役人は一七六〇年の時点で奉行以下十七名に及ぶ。

大和上り、江戸上りにおいて、薩摩、江戸では使者の格に応じた接待が行われた。そこでは礼式ばかりでなく、座敷飾りも使者の格に準じてなされたはずである。たとえば一七九六年八月、尚温王襲封の恩謝使として江戸に上る途中、正使大宜見王子一行は鹿児島に滞在、藩主から「御料理頂戴」および「御膳進上」を許された。この時の記録には「御対面所御床棚飾、其外御座向等、先例之通」、あるいは「御書院御床御棚飾其外、先例之通」と見える(「島津家列朝制度」<sup>註</sup>卷之三十八)。沖繩側においても、島津藩を代表して駐在する在番奉行の接待にあたっては、それにふさわしい座敷飾りが必要とされたのである。

座敷飾り・床飾りに使われる掛物、巻物、手鑑は一、二を除いてすべて前述「御書院御物帳」に記載されているものばかりである。これからしても王府が収集した書画は、鑑賞だけを目的としたのではなく、在番奉行招請の必要から集められたことが理解される。

首里城の南殿や書院、鎖之間などは、昭和初期の段階において首里市立女子工芸学校の教室あるいは職員室として使われていた。当時教員として勤めた人に尋ねても、内部は板なども取り払われ、もとの座敷配置がどうだったか明らかでないとのことである。<sup>註15</sup>したがって、床の間や違い棚などの構えや向きについても、今では知ることはむずかしい。田辺泰著『琉球建築』(昭和十二年刊)にも詳しい間取りは記載されていない。本文書によれば、南殿と書院に床と違い棚があり、鎖之間には床のほかに「押板」が設けられていることがわかる。(以下、いけばな関係者以外の読者のため、大井ミノブ編『いけばな辞典』に収録されている関連用語には\*印をつける。東京堂出版刊)。床には絵を一幅掛け、立花あるいは活花や置物を飾っている。また違い棚の飾り様、あるいは押板に飾られる道具の配置も、古式に準じて行われている。<sup>註16</sup>

座敷飾りの法式は、建築における書院造りの成立と歩調を共にしたといわれる。「君台観左右帳記」(一四七六年または一五二一年)や「御飾記」(一五二三年)には、座敷飾りが成立した時期の様式が記録されている。それによれば、床の前身たる押板の壁には三幅対の絵を掛け、その前に花、香、灯の三具足(みつぐそく)、その両脇に對の立花を飾るのが基本的に、正式な飾りであった。<sup>註17</sup>これは五具足または諸飾と呼ばれている。

また、付書院には筆や文鎮、硯屏などの文房具類とともに印籠や軸物、そして花が飾られた。天井には喚鐘が吊るされ、壁には執木(撞木)や払子が掛けられた。<sup>註18</sup>その隣に設けられた違い棚には香炉、茶碗、食籠、沈箱、鉢、印籠などが飾られた。

飾られる道具では、唐物が好まれたことはいうまでもない。薩摩藩でも琉球入り後まもなく、この種の飾り道具、茶道具を琉球に注文、進貢貿易に託して買い求めている。たとえば一六二六年の注文品には古風の香箱や釜、花掛物、水指、硯付筆、硯屏、さらには茶碗、火箸、籠の花入、獅子香炉、印籠、つりぶねなどがあがっている。また一六二八年二月には三具足、古掛物、各種の筆架、香合、水入、花入、硯、水指、茶碗、そして天目、天目台、三幅あるいは二幅一對の絵、香筋、文鎮、硯屏、印籠などが注文されている。同年三月には、翌々年將軍家光および前將軍秀忠が、江戸の藩邸に臨むについての御成飾用具として、新たに各種の飾り道具を注文している(『鹿児島県史』第二卷<sup>註19</sup>)。

琉球側が注文の意味を理解しない訳はない。同時にこれら工芸品、諸道具の価値と、座敷飾りの持つ重要な意味も了解したであろう。王府自らも積極的に道具を収集するとともに、法式の習得に力を入れたと考えられる。本文書の例でいえば、乾隆五十七年(一七九二)、新たに着任した一番奉行平田孫太郎招請の際には、南殿の床飾りは前記の三幅対・三具足・立花対瓶(「三瓶」とあるのは三具足の花も数えてのことか)の飾り、書院の床は掛物二幅、對の立花となっていて、しかもこの場合に限られている。就任に敬意を表し、祝賀の意を込めて飾られたものと見られる。ま

た、奉行や付役の衆を年頭祝儀に招請した際は、南殿の床には祝儀の花として「松之一色」が立てられ、書院には寿老人が掛けられている。これらは立花や座敷飾りを正式に学んでいることの一端を示すものである。なお、それぞれの場合に行われた座敷飾りの記述の末尾には、月の名が記されている。その時期にふさわしい掛物や、立花・活花が飾られたことを示している。

こうした座敷飾りや立花・活花については、各種伝書をとりよせて調べ、ときには島津の家臣とおぼしき人物からも、直接学んだことがあったことについては、次項で述べる。

#### 「御書院並南風御殿御床飾」

楮紙十五枚からなり、縦が二七・四cm、横二〇・二cmで、袋綴になっている。筆者不詳。

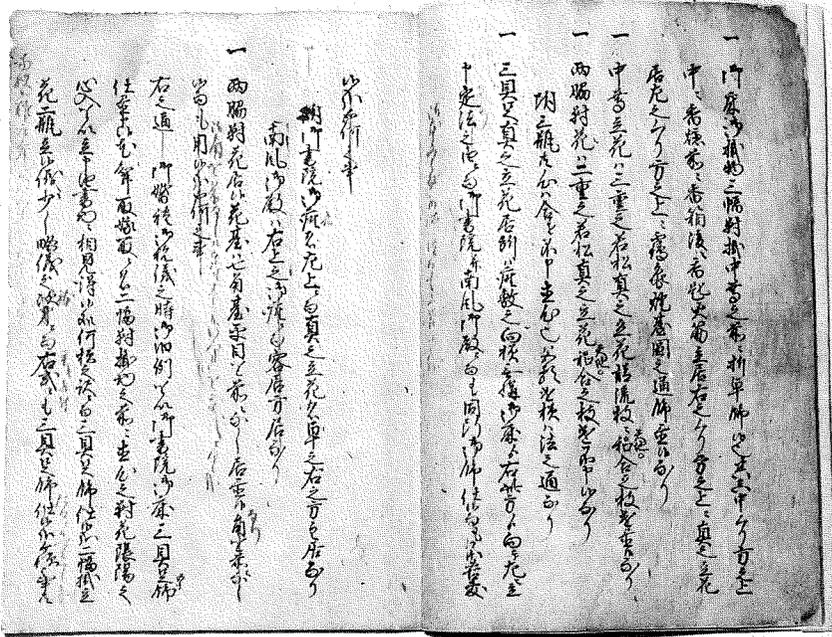
羽地朝秀や阿嘉直識が、士族の教養として嗜むべしとした芸事のひとつに立花があることは、すでに述べた。王府の書院においては、御茶道およびその相付計六人が担当したが、立花の稽古は王府や首里、那覇の士族に限らず、八重山の士族の間でも行われていた。たとえば頭職を出した石垣家には、「生花聞書口伝集」、「生花四季華形聞書集」、「立花聞書集」下巻が残されている。同家には他に謡曲、示現流剣法、馬術、日置流弓術、作庭などに関する文書もあり、各種大和芸能の稽古が八重山でも行われていたことを示している。

示現流、日置流は薩摩における剣術、弓術の主流を占めるものである。

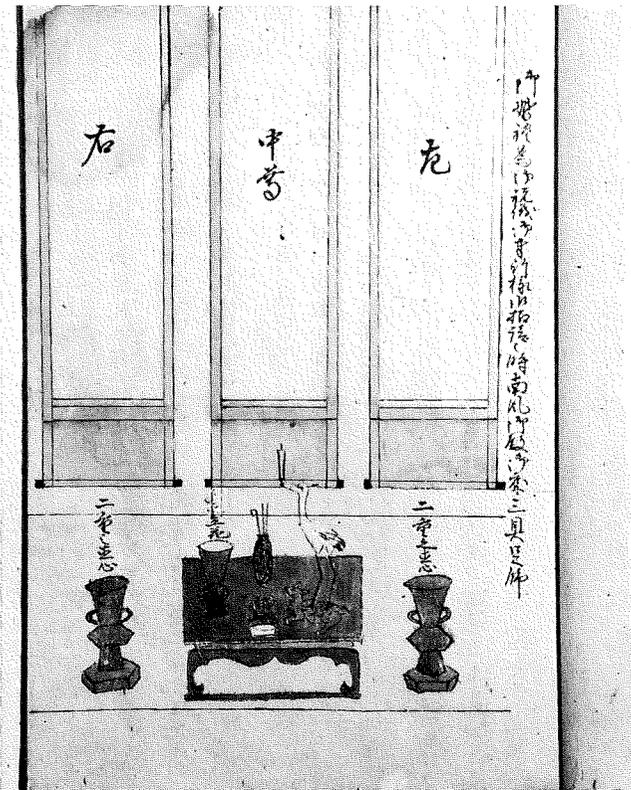
「島津家列朝制度」によれば、「活花」では「池之坊流」が主流であり、他に「石州流」、「狩流」（「独流カ」と傍註がある）などが行われていたことがわかるが、「立花」の項は「空白」となっている。<sup>註20</sup>これら諸芸のなかには、島津の家臣とおぼしき人物から、秘伝として直接伝授されたものがある。石垣家蔵の「生花聞書口伝集」奥書には、この伝書が「丸田忠兵衛」から一七七一年に「儀間親雲上」に伝授したものとある。また同家蔵の「手数之形」という乗馬法を記した文書は、一八三四年に「佐久田守祥」から「喜舎場にや」に与えられた免状であるという。<sup>註22</sup>

本文書は、婚礼祝儀およびその際在番奉行を招請するにあたっての南殿、書院における床飾りを示したものである。「御婚礼御祝儀並常御成之時」のものと見出しが、「上様 国頭親雲上より初御成之時」とあるところからすると、国王の婚礼と考えられる。七枚の彩色挿図がある。飾り様の旧例をあげ、「書物」と照らし合わせて旧例に疑問を呈し、改革することが妥当かどうかを問うている。ただし問い合わせ先は記されていない。

この「書物」が一冊か複数か即断はできないが、実名としてあがっている唯一のもので、しかも重要な拠り所となっているのが、「立花聞書」である。「立花聞書」あるいは「立花聞書集」の名で、立花・生花の伝書として歴史上に現われるのはいくつもあるようだが、時代的に近く、しかも権威のあるものでは、毛利作右衛門の「立花聞書集」<sup>\*</sup>（一六七七年刊）がある。これには、毛利が十一屋太右エ門から教伝された立花秘伝を記述したものとある。十一屋太右エ門は生没年不詳、江戸時代初期のい



(C) 御書院並南風御殿御床飾



同上

けばな作家で、二代池坊専好に学び、立花を理論的にまとめ集めた人物とされている。著書の「立花大全」\*、「抛入花伝書」\*はいけばな伝書として知られている。毛利の「立花聞書集」に、池坊専養が朱註を加えた重森本が、思文閣刊『続花道古書集成』第2巻に収録されている。

毛利作右衛門の「立花聞書集」は上下二冊に分かれており、石垣家に伝わるのは、そのうちの下巻の写しにほかならない。石垣家本の表題は「立花聞書集」だが、巻末には「立花聞書下巻終」とある。同本は首里で書写されたと見なされ、内容が本文書の記述とも符合することから、本文書でいう「立花聞書」は、毛利の「立花聞書集」と見てさしつかえないであろう。

本文書は、南殿、書院における婚礼祝儀の時の床飾り、その際在番奉行を招請する時の床飾り、および「御婚礼御祝儀並常々御成之時」の床飾り以下の三構成になっていて、七枚の挿図がある。

まず、(一)「御婚礼御祝儀之時御書院御床三具足飾」では、書院の床飾りは五具足とし、書院が本勝手であることから、三具足の立花は主居の側にあること、両脇の花台は平目を前にするのが従来の慣例だと述べる挿図(一)。(これに対して本文書の筆者(以下筆者という)は、婚礼の場合は、二幅対の掛物の前に直心(すぐしん)の対花を飾ると書物にあるが、旧例ではどのような理由で三具足諸飾とするのか、二幅掛物に立花二瓶ではいささか略儀と見られるためか、どちらを本式とすべきかと問うている。「立花聞書集」に見る限りでは筆者が指摘するように、婚礼祝言の花は「二幅対之掛物にて松の直心の対花也云々」とあるのみで、三具足のことはない。

なお同書祝言の花の項には、「陽之方に白花陰之方に赤花を用なり」とある。本文書に見える「色類遺様ハ法之通也」とは、このことを指していると考えられる。(ただし、池坊専養の朱註では陽の方に赤花、陰の方に白花を用いると訂正されている)。

(二)「同時南風御殿御床飾」では、旧例は掛物一幅に三重の若松合せ真の立花一瓶を立て合わせるようになっていたが、このような法式もあるだろうかとの疑問を付している(挿図(二))。これは「立花聞書集」の「祝言の花の事」において、二幅対の掛物の前に対花を用いず一瓶を立てる場合は、相生真(あいおいじん)や合真などを用いるとある事に対応するもので、慣例では掛物が一幅になっていることのは非を問うている。

(三)「御婚礼御祝儀御奉行様御招請之時南風御殿御床三具足飾」においては、従来の慣例では「三具足諸飾」となっているが、三具足諸飾は当

初は仏前神前に用いたと書物に見える。書院の旧例(一)の場合)も含めて、これでいいのだろうかと述べている(挿図(三))。「立花聞書集」を見ると婚礼の床飾りは、二幅対の掛物に松の真心の対花を基本とするところ。

(四)「同時御書院御床飾」。掛物の二幅対に真の立花二瓶を飾り、二幅の中央に中央卓を据えて、その上に香炉、下に活花を飾るのが慣例となっている(挿図(四))。ところが、伝書では婚礼祝儀の床飾りに中央卓を置くとはない。常の祝儀ならば「退心(除真)の対花に中央卓を飾ることはあると伝書に見える。旧例、伝書の両様ともに本式であろうかと筆者は問う。「立花聞書集」を見ると、二幅対の前に中央卓を置くときは、対の立花を除くか、さもなければ花は「退心」にするところだが、本文書の筆者がいう「常々御祝儀之時」という規定はない。

(五)「御婚礼御祝儀並常々御成之時」は、挿図、本文とも見出しに南殿、書院の記載がない。挿図の客位主位の位置からすると書院だが、本文では南殿のことを述べている(挿図(五))。ここで筆者は、両脇に対花のない三幅三具足飾りが、婚礼祝儀並びに「常々御成之時」にふさわしいかどうかを尋ねている。しかし、これを慣例とすると、(一)~(四)の内容と矛盾する。婚礼祝儀に三具足を飾ることに筆者自身疑問を抱いているのであるから、この法式に改めたいという訳でもないであろう。

また、「常々御成之時」とは恒例の在番奉行招請の時と理解されるが、だとすれば両脇対花を欠いた三幅三具足の飾りは、「立花聞書集」に従う限り略式であるから、この場にはそぐわない。

(六)「御書院御床」では、婚礼祝儀の旧例だと三具足諸飾となっている

が、「立花聞書」の記述に沿って二幅対、真心の対立花に改めてもかまわないだろうかと問うている(挿図六)。

(七)「同時南風御殿床」の項では、婚礼祝儀の時、伝書通りに二幅対、合せ真の立花一瓶とたらどうだろうかと提言している(挿図七)。

本文書の筆者は、もっぱら婚礼祝儀の面から床飾りの様式を問うている。しかし、婚礼祝儀と「御成之時」では本来床飾りが違う。そうすると、婚礼祝儀に在番奉行「御成」となれば、南殿・書院の床飾りはどうなるのか。

「立花聞書集」では、「御成飾」は三幅対に三具足、対の立花、すなわち諸飾を本式とし、これに準じて略式も可能だとしている。この飾りが、すでに十六世紀末には武家屋敷における正式の「御成飾」とされていたことは、「文緑三年前田亭御成記」で知られるところである。一方、婚礼祝言の飾りは、二幅対に松の真心の対花を基本とし、対花のかわりに一瓶を立てるときは、合真も用いるとある。

「立花聞書集」の原則からすれば、婚礼のとき、書院の床を三幅対・三具足・対花とする慣例(一)の場合には、筆者が指摘するように疑問とされるところである。同様に、南殿を一幅合真の立花にする(二)の場合のものもおかしい。しかし、奉行招請で三幅対・三具足・対の立花を飾る(三)の場合には、本式の「御成飾」であって、筆者のいう神前仏前云々は当たらない。奉行招請のとき、二幅対に真の立花二瓶を飾り、中央卓を置いて香花を飾る(四)の場合のものも、卓に香花の分だけ余計だが、「少し略儀之体(而重き)」を付けたとも考えられる。問題は婚礼祝儀に重きを置くか、奉行招

請を第一とするかである。

(六)、(七)における筆者の意向は、「立花聞書集」(その他の伝書)に従って、書院および南殿の床飾りを婚礼の様式に統一したいというところにある。それが在番奉行招請の場合も含めてのことかどうかは、明らかではない。本文書には、同一人物の墨書による加筆訂正のほかに、同じ人物の朱筆による加筆訂正もある。疑問を呈する形に書き改められている箇所元の文では、「委曲被仰聞可被下候」となっているものがあって、照会の形をとっている。御茶道方を勤めると見られる筆者の照会状の下書きとして書かれたものか。

本文書が書かれた年代は不明だが、「御座飾帳」の乾隆五十七年新奉行着任にかかる招請の際の床飾りに、「御懸物三幅養朴筆三具足立花三(一カ)瓶」が見えるから、遅くとも一七九二年までは遡れることになる。

ここに紹介する三文書は、沖縄県立博物館が鎌倉芳太郎氏から譲り受けたものである。同氏が、大正末期から昭和初期にかけて実施した芸術調査において入手したものと考えられ、出所は不明だが同一箇所あるいは同一人物である可能性が大きい。しかし、三文書をまとめて紹介する理由は、それ以外にもある。まず三つの文書が、在番奉行招請における座敷飾りと深く関わっていることである。その意味で、近世沖縄における在番奉行の位置を知る手がかりとなる歴史資料である。また、座敷飾りを正式に行うためには、中国や日本、そして沖縄の美術工芸に関する鑑識眼と、立花、茶道、礼法、有職故実などについての知識と作法を身につけていなければならない。その水準を知るうえでこれらの文書は貴重

であり、美術工芸史、芸能史研究の資料としても重要である。また個別に見れば建築史、表具史などの分野からも見落とせまいだろう。

紹介者の未熟から誤読、誤解も多々あると思われる。関係者の御指摘を賜われれば幸いである。解説・解説にあたっては、島尻勝太郎氏をはじめとする球陽研究会の先生方と池坊教授総華督名幸貞子先生、教育庁文化課上江洲敏夫氏に、貴重な御教示と資料提供をいただいた。記して感謝の意を表したい。

なお、紹介するにあたっては、朱書を傍点で示し、削除箇所は数字を脇にふって、文書の後に並べた。旧漢字はすべて新漢字に、略字体は正字に直した。原文書の欠損は□あるいは○で示し、(欠)と傍註を付した。解説不能な文字は□で示してある。推定される文字は( ) に入れた。傍記した。

本文および註に名称のあがらなかった参考資料は、次の通りである。

比嘉春潮「沖繩の歴史」(『全集』第一卷 沖繩タイムス社)

野間清六・谷信一編『日本美術辞典』(東京堂)

図説いけばな大系『いけばなの文化史II』(角川書店)

同 6『いけばなの伝書』(同)

註

(算用数字は頁数である)

(1) 東恩納寛惇「校註羽地仕置」(『全集』二巻 426～434)

(2) 同「阿嘉直識遺言書」(『全集』五巻 431)

(3) 同「南島風土記」飯屋」の項(『全集』七巻 309)

(4) 同「阿嘉直識遺言書」(『全集』五巻 426)

(5) 琉球政府文化財保護委員会編「沖繩文化史辞典」 257

(6) 「中山世譜」巻八(『琉球史料叢書』(4) 114)

(7) 東恩納寛惇「南島風土記」南殿」(『全集』七巻 176)

(8) 「球陽」巻五「尚豊王三年」(一六二二)。

(9) 「近世地方経済史料」十巻 317

(10) 「中山世譜」巻八(『琉球史料叢書』(4) 124)

(11) 「同」巻十(『同』157)

(12) 仲吉朝助編「古老集記類」(『近世地方経済史料』十巻 373)

(13) 「那覇市史」一巻の(二) 190

(14) 「中山世譜」巻十(『琉球史料叢書』(四) 183)

(15) 「美術研究」四十五号 24(一九三六年)

(16) 「近世地方経済史料」十巻 361～362

(17) 「藩法集」鹿兒島藩下」 303、305

(18) 那覇市首里大中町の久高友章氏(明治三十九年生)談。

(19) ただし、御鎖の間の押板に飾られている様式は、本来「付書院」の飾様式である。

(20) 「那覇市史」一巻の(二)に再録。同書 483～484

(21) 「島津家列朝制度」巻之五十一(『藩法集』鹿兒島藩下」 837～838)

(22) 池宮正治「文学芸能関係資料について」(沖繩県教育委員会編「八重山諸島を中心とした古文書調査報告書」 44～45)

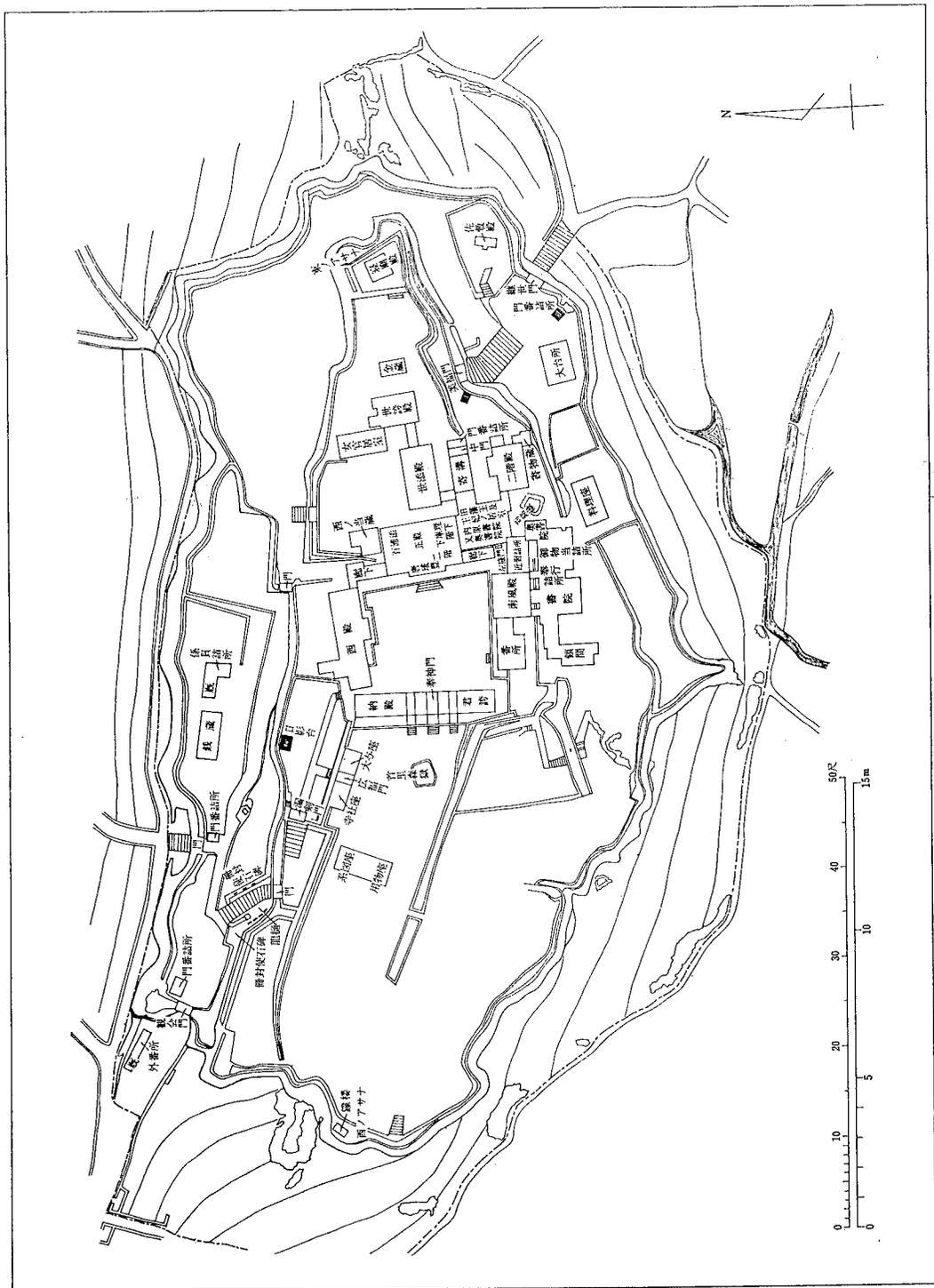


図 (A) の 1 旧首里城殿舎復原配置図 (田辺泰著『琉球建築』より)

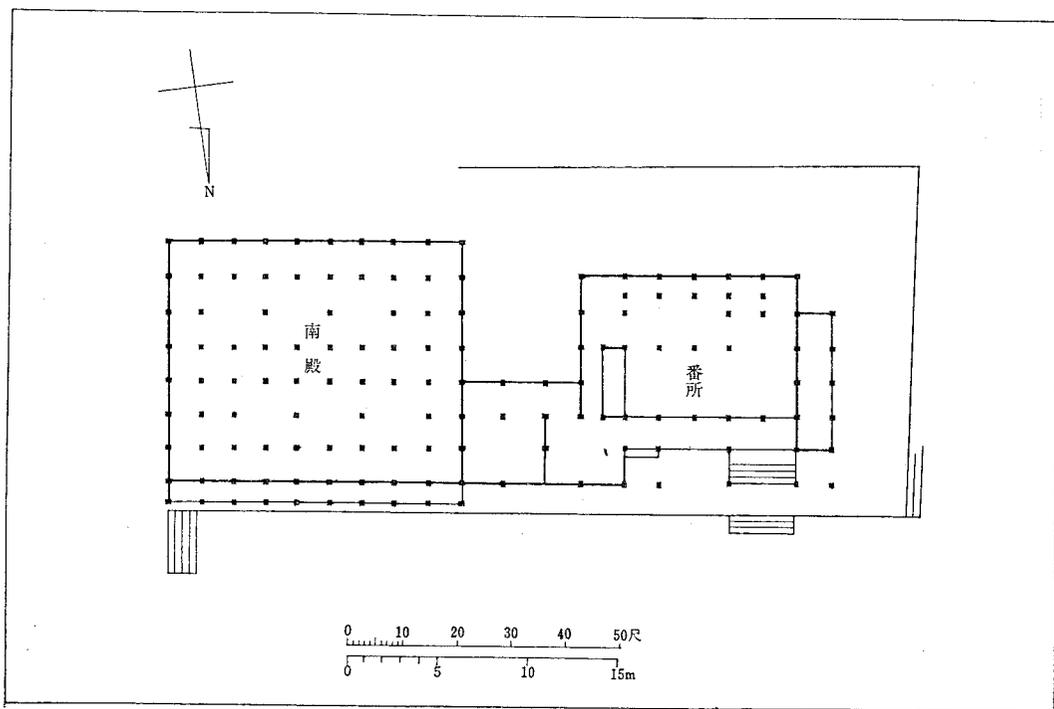


図 (A) の 2 首里城南殿平面図 (田辺泰著『琉球建築』より)

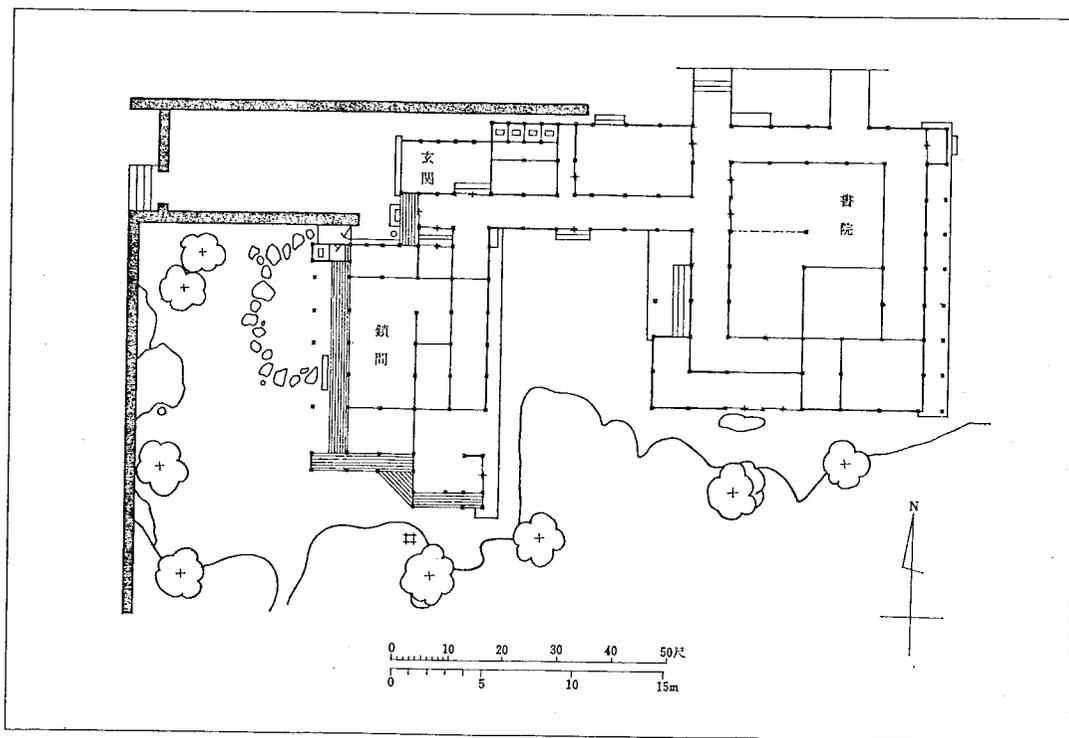


図 (A) の 3 首里城書院および鎖間平面図 (田辺泰著『琉球建築』より)

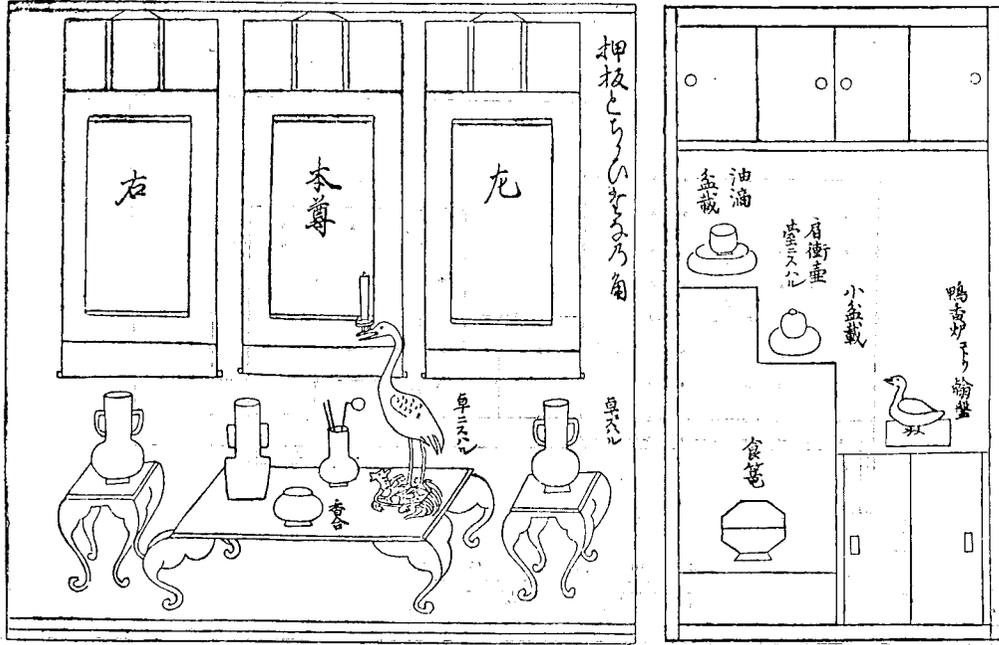


図 (B) 押板と違棚 (『御飾記』より)

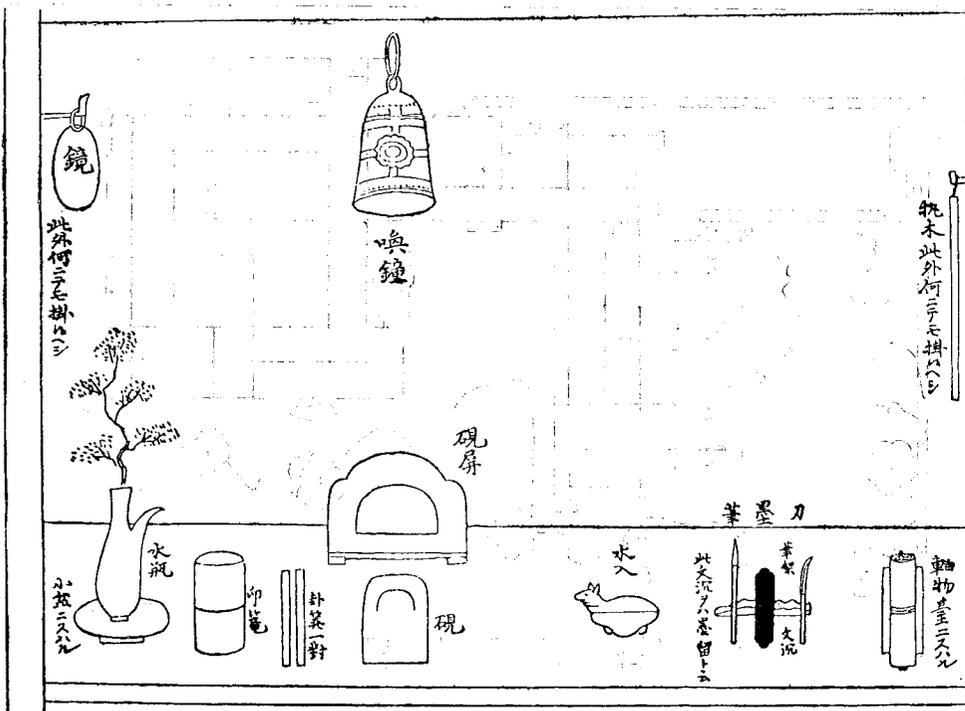


図 (C) 書院飾り (群書類従本『君台観左右帳記』より)



図 (D) 三重の若松合せ真之立花 (大井ミノブ編『いけばな辞典』より)

御書院御物帳

御茶道方

目錄

一 御掛物 絹表具

唐字 唐繪

和繪 和字

一 御手卷 右同

和繪 和字

唐繪 唐字

一 御手鑑 右同

唐(字) 和字歌仙

唐字御掛物

康熙皇帝樣勅筆 尚貞樣江御拝領

一 御掛物壹幅式重家ニ入

内家黄梨子地銀之焼付かな物紅組物緒(欠)筋外家白木  
但中山世土大文字黄綸子裕服紗ニ而包

雍正皇帝樣勅筆 尚敬樣江御拝領

一 同壹幅二重家ニ入

内家右同

外家白木

但輯瑞球陽二 大文字服紗右同

乾隆皇帝樣勅筆 尚敬樣江御拝領

一 同壹幅二重家ニ入

内家右同

外家白木

但永祚瀛壖三大文字服紗右同

乾隆皇帝樣勅筆 尚穆樣江御拝領

一 御掛物壹幅二重家ニ入

内家右同

外家白木紺染木綿組物緒四筋

但海邦濟美四大文字服紗右同

乾隆皇帝樣勅筆 尚穆樣江御拝領

一 同壹幅二重家ニ入

内家右同

外家右同

但福之大文字服紗右同

右五幅内家構之奉行切封

康熙皇帝樣勅筆石摺中字之行黒木軸此下絹表具

一 同壹幅白木家ニ入

向氏大城親方朝章より上ル

一 同式幅対白木家ニ入

但唐寅墨跡 姓唐諱寅字伯虎 水色服紗五ニ而包桑木軸  
明朝吳人官解元

一 同老幅惣家二入

但張瑞圖墨跡

姓張諱瑞圖明朝福建泉州府晉江人官文章學士

象牙軸

一 同老幅惣家二入

康熙五十八年 尚敬様御代

但勅使翰林院徐葆光墨跡八文字儒學門碑文記黒木軸

一 同老幅惣家二入

釈元賢明朝・鼓山住持

但石鼓老人墨跡象牙軸

唐繪御掛物絹表具

宣徳御筆

一 御懸物老幅二重家二入

内家黄塗  
外家白木

但松二白鷹之繪水色服紗二而包象牙軸

宣徳御筆

一 御懸物老幅二重家二入 内外家右同

但白鷹之繪右同

益王筆

一 同式幅白木家二入

華山王心源道人筆

但鷹之繪象牙軸

尚質様江諏訪左右衛門殿より上ル

一 同老幅黄塗家二入

但顏輝筆

上品姓顏諱輝字秋月元朝江山人

布袋之繪象牙軸

讚子昂墨跡

八姓趙諱孟頫字子昂号松雪道人元朝湖州人官至翰林學士承旨謚文敏

一 同老幅白木家二入 吳坤筆虎之繪入加

但所翁筆

上品字陳容又公儲 宋南渡後福唐人

雲龍之繪象牙軸

一 同式幅白木家二入

但僧牧溪筆

上品讚田稜山人墨跡象牙軸

一 同老幅惣家二入

但平山筆

姓張諱路号平山 明朝大梁人

山水繪象牙軸

一 同老幅惣家二入

但西崖筆

姓劉諱瑜字尚美 号西崖明朝全椒人

山水繪象牙軸

一 同老幅白木家二入

但虞山石谷王翬筆山水象牙軸

一 同三幅对白木家二入

但孫億筆

清朝福州人 花鳥之繪象牙軸

一 同卷幅白木家二入横物

但孫億筆右同

一 同卷幅惣家二入

錢塘

但龔鯨筆山水象牙軸

一 御懸物卷幅白木家二入横物<sup>+</sup>

閩中永齋

但王任治筆山水塗軸

一 同卷幅白木家二入横大物

但蘭水梁昌筆山水塗軸<sup>+</sup>

一 同卷幅惣家二入

康熙六年 尚質様御代

但勅使王垓自画讚黒木軸<sup>+</sup>

一 同卷幅白木家二入

華亭沈

但宗叙筆花鳥之絵並讚有ル塗軸<sup>+</sup>

一 同卷幅惣家二入

但章(声)筆花鳥之絵並詩有ル象牙軸

一 同卷幅白木家二入

海昌女史

但李因筆 武林葛無寄侍 松二鷹之絵象牙軸  
御家姫明朝

一 同卷幅所翁筆二入加

但朱陵吳坤筆松二虎之絵象牙軸

一 同卷幅

但王若水筆 姓王諱淵字若水号澹軒 山水 軸  
元朝杭州人

一 同式幅白木家二入

但石摺檜図楷図塗軸

一 同一幅白木家二入

但唐寅筆山水象牙軸

和絵御掛物

光久様御筆 尚貞様江御拝領

一 御掛物卷幅二重家二入内家黄塗  
外家

但朱達磨之絵水色服紗二而包象牙軸

光久様御筆 尚貞様江御拝領

一 同卷幅二重家二入右同

但寿老人之絵服紗並軸右同

光久様御筆 尚純様江川野道秧より上ル

一 同三幅对二重家右同

但中尊(免力)左右山水服紗並軸右同

綱久様御筆

一 同卷幅二重家二入右同

但竹三雀之絵服紗並軸右同

光久様より 尚貞様江御拝領

御掛物三幅二重家ニ入 内家真塗 外家黄ぬり

但探幽法印筆中尊釈迦左右山水水色服紗ニ而包象牙軸

守信 小名宰相四郎二郎采女号探幽齋法眼位後陸法印位云 尚貞様御代康熙十三年寅ニアタル 延宝二年十月七日終七十二

総州様より谷山堅右衛門殿御使者ニ而御拝領

同三幅対二重家ニ入内家黄塗黄組物緒共外家白木

但養朴法印筆中尊富士左右吉野龍田之絵服紗軸右同

常信 右近養朴又稱古川耕寛齋又青白齋 宝永元十月十二日法眼位後陸中務卿法印 尚敬様御代康熙五十二年ニアタル 正徳三年癸巳正月廿七日卒七十八

尚貞様江東氏知念親方政興より里上ル

同五幅対黄塗家ニ入

朱印重信与有之

但永徳法印筆山水象牙軸

元信 四郎二郎大炊介越前守号永川授法眼位世称古法眼 尚元様御代嘉靖三十八年己未ニアタル 永禄二年十月六日卒寿八十四

尚純様江諏訪左右衛門殿より上ル

同壹幅惣家ニ入ル 横物永真法眼究状有ル

但秋月筆梅二月之絵象牙軸

尚純様江喜入源兵衛殿より里上ル

同壹幅白木家ニ入ル 宗甫並俊成卿筆和歌二幅入加

但探幽法印筆雲龍之絵象牙軸

尚純様江新納主悦殿より里上ル

同式幅惣家ニ入

但常信筆一幅行ニ寿老人之絵一ふく山水横物二幅共象牙軸

御懸物三幅白木家ニ入横物

但秋月筆一幅菊ニ雀桑木軸一ふく花鳥象牙軸一幅う楚之絵桑軸

同壹幅白木家ニ入

但雪舟筆 渡唐後還俗 薩摩人 寿老人之絵象牙軸

同壹幅惣家ニ入横物

但常信筆富士之絵象牙軸

同壹幅惣家ニ入 御物帳相記 横物象牙軸 一門一ふく

但古川叟常信筆寿老人之絵象牙軸

同式幅惣家ニ入

但永徳法印重信筆山水象牙軸

同二幅対白木家ニ入 狩野委女究状有ル

但永徳法印筆唐子之絵象牙軸

重信 源四郎号永徳任法印 尚寧様御代万曆廿五年丁酉ニアタル 慶長二年九月十四日卒四十七 同十八年ニアタル 一七八天正十八年九月卒四十八

同二幅惣家ニ入

但周信筆一幅滝ニ人形一ふく岩ニ仙人之繪象牙軸

右近号如川 尚敬様御代雍正七年ニアタル  
享保十四年酉正月六日卒寿六十九

御掛物沓幅白木家ニ入横物

三但牧心齋筆張卒老之繪象牙軸 仙人之図  
ひょうたんより馬出ル

安信 尚質様御代 源四郎右京永真号牧心齋寛文ニ授法眼位  
寛文二年ハ康熙元年ニアタル

同沓幅惣家ニ入

但益信筆 采女法眼  
号洞雲 ひよ鳥之繪象牙軸

同三幅対黄ぬり家ニ入

但古信筆中尊寿老人右松ニ鶴左梅ニ鶴象牙軸

栄川 尚敬様御代雍正九年ニアタル  
享保十六年亥正月八日卒三十七

同三幅对白木家ニ入

但黔羸邨子筆大式法橋中尊人形左右鶴象牙軸

黔羸探元邨子

同沓幅惣家ニ入

但守広筆花鳥之繪ぬり軸

一 御惣物表具迦六枚黄塗家沓ニ入

内

秀忠様御筆

沓枚

尚純様江宮原意安より上ル

沓枚小堀遠州宗甫筆

沓枚古田織部手跡

沓枚一休墨跡

沓枚武州之図用大破

御道具究状沓卷軸なし

倭字御掛物

綱貴様御筆

御惣物沓幅二重家ニ入横物 内家黄塗  
外白木家入

但和歌象牙軸水色服紗ニ而包

同一幅白木家ニ入横物 俊成卿墨跡かな探幽法印筆  
雲龍之絵入加

但宗甫墨跡和歌象牙軸

同沓幅家右入加

但俊成卿墨跡和歌象牙軸

同沓幅白木家ニ入

但一休墨跡象牙軸

御懸物沓幅家右入加

但一凍墨跡象牙軸

和繪御手卷

吉貴様より 尚益様江富山清右衛門殿御使者ニ而御拝領

御手卷式軸黄塗家ニ入青ふく糸組物緒共

但養伯法橋筆色之図水色服紗ニ而包象牙軸

大守様より 尚穆様江時任長右衛門殿御使者ニ而御拝領

同忝軸白木家ニ入

但幽泉法橋筆色之図右同

同忝軸黄塗家ニ入

但雪信筆光信女古法眼妻画ヲ得タリ号雪信近江八景之図象牙軸

同忝軸黄ぬり家ニ入表紙無之

但春正法橋筆木瀬六右衛門殿空秋源摩之図

和字御手卷

綱貴様御筆 尚純様御上国之時御拝領

御手卷忝軸桑ノ木家ニ入小破物象牙軸

但和歌青地金欄袋ニ入表具大破物

同忝軸白木家ニ入

但田上閑翁墨跡かな象牙軸

御手卷式軸黄塗家ニ入

但新納又左衛門殿墨跡かな象牙軸

同忝軸白木家ニ入

但平野伊兵衛殿墨跡八文字象牙軸

一式軸黄塗家ニ入

但高柳高左衛門殿墨跡かな象牙軸

同忝軸白木家ニ入

但御同人墨跡かな黒木軸

同式軸右之家ニ入加一軸かな書一軸手本書

但新納又左衛門殿墨跡象牙軸

尚純様御上国之時上ル

同式軸白木家ニ入

但而雲沙門道人手跡象牙軸表具破

唐繪御手卷

御手卷忝軸黄塗家ニ入

但文徵明筆姓名壁字徵明号衡山居士明朝長州人官翰林待詔

同忝軸黄塗家ニ入

但劉松年筆姓劉諱松年宋朝錢塘人人形絵人之讚有ル象牙軸

御手卷忝軸白木家ニ入

但仇英筆姓仇諱英字実父号十州明朝大倉人吟富図象牙軸

同忝軸白木家ニ入

但子昂筆馬之絵銭良右南郷言兩人讚有ル象牙軸

唐御手卷並御手鑑

一 御手卷壹軸

但蘇軾墨跡石摺唐朝字子瞻号東坡 四川眉山入 軸なし

一 御手鑑壹折白木家二入

但子昂墨跡石摺

倭御手鑑

吉貴様より 尚益様田中五兵衛殿御使者 而御拝領

一 御手鑑壹折黄塗家二入 青絹さなた緒共

但三十六歌仙同目錄共紫縮緬服紗二 而包

一 同壹折白木家二入

但地紙金磨色紙四十八枚絵歌

琉絹表具

一 御懸物一ふく横大物白木家二入

石嶺親雲上事

但琥以祚筆山水黒木軸

一 同一ふく

但右同人筆花鳥

註・次々頁に「御酒代桑江親雲上」との墨書あり。筆跡は別か。

一 下に続く「之四字」削除。以下同じ。

二 之四字

三 之四字止 ↓大文字服紗

四 之四字

五 裏絹

六 立

七 御

八 讀有ル

九 讀有 ↓墨絵

十 大

十一 物 ↓軸

十二 像法体之図 ↓画讀

十三 沈

十四 齒惣 ↓白木

十五 壹 ↓三

十六 法眼 ↓法印

十七 古法眼元信 ↓永徳法印

十八 大常信 ↓古川叟常信

十九 古法眼元信 ↓永徳法印重信

二十 銘書ハ

二十一 木村探元齋 静隠守成

二十二 但

三 但

二 但

一 但

六 卷 ↓ 軸

五 諱 ↓ 名

四 徵仲 ↓ 徵明

三 人形絵 ↓ 吟富図

二 都 ↓ 邨

一 同

三 江

### 御座飾帳

#### 公事帳調部方

兼浜筑親雲上

田里筑親雲上

仲嶺し

一 初而御招請之時

一 横目付、衆年頭御申入之時

一 同御首途御申入之時

乾隆五十五年庚戌御奉行河野外記様御役、衆御首途御招請之御時

### 御座飾

南風御殿

一 御床 御掛物一幅西崖之筆山水之絵立花一瓶

一 御違棚

南 堆朱御印龍盆ニ載せ

中 御手鑑一折歌仙盆ニ載せ

北 鉄枴仙

下 銅之獅子

ひすきの内 御葉茶壺

一 北表六尺縁六帖敷一番目壁本御奉行様御腰物掛居

御右筆座

一 台子一組 御茶具揃

御取付之間

一 北表高敷之壁本御役、衆刀掛居

一 同所北表壁本丁子風呂居

御番所

御奉行御招請之時

御座飾

御首途御招請之時

年頭御招請之時

一 御床 御掛物一幅孫億之筆花鳥之繪活花

御着替所

一 御床 御掛物一幅秋月之筆梅月之繪活花

御書院

一 御床 御掛物一幅吳坤之筆虎之繪立花□□(瓶方)

一 御違棚

上 御手卷一軸実父仇英之筆盆二載せ

中 石之鷹

下 御料紙箱

御茶之間

一 台子二組 御茶具揃

樂之間

一 南表壁本大小掛床下御奉行様御腰物掛居

一 十間之間襖間本御役、衆刀掛居

内炉之間

一 御床 御掛物一幅永徳筆唐子之繪銅之岩組

一 同所北表壁本台子一組 御茶具□(揃)

御鎖之間

一 御床 御掛物一幅古法眼之筆山水之繪活花

一 押板

上 執木  
喚鐘  
松子

下 硯架 筆洗 硯  
料紙 筆  
水瓶 墨

裏御座

一 御床 御掛物一幅顔輝之筆布袋之繪活花

四月

乾隆五十八年癸丑年頭為御祝儀御奉行平田孫太郎様御始御役、衆御招請之時

御座飾

南風御殿

一 御床 御掛物一幅平山筆山水之繪松之一色

一 御違棚

南 活花

中 御手鑑一折歌仙盆二載せ

北 堆朱御印籠盆二載せ

下 御嘉例

ひすき之内 御葉茶壺

一 北表六尺縁六帖敷一番目壁本御奉行様御腰物掛居

御右筆座

一 台子一組 御茶具揃

御取付之間

一 北表高敷之壁本御役、衆刀掛居

一 同所西表壁本丁子風呂居

御番所

一 御床 御掛物一幅梁高筆山水之絵雪松

御着替所

一 御床 御懸物一幅秋月筆菊す、免之絵活花

御書院

一 御床 御掛物一幅雪舟筆寿老人之絵立花一瓶

御違棚

上 御手卷一軸劉松年筆盆ニ載セ

中 鏡 硯屏

下 御料紙箱

御茶之間

一 台子一組 御茶具揃

楽之間

一 南表壁本大小懸床下御奉行様御腰物懸居

一 十間之間襖間之本御役、衆刀掛居

内炉之間

一 御床 御掛物一幅益信筆ひよ鳥之絵岩組

一 同所壁本台子一組 御茶具揃

御鎖之間

一 御床 御掛物一幅探幽法印筆山水之絵活花

一 押板

上 執木  
喚鐘  
私子

下 硯 筆 筆架 墨  
料紙 硯屏 水瓶  
筆洗

裏御座

一 御床 御掛物一幅宗甫之筆活花

正月

乾隆五拾七年壬子御奉行平田孫太郎様初而御招請之時

御座飾

南風御殿

一 御床 御懸物三幅養朴筆  
三具足立花三瓶

一 御違棚

南 堆朱御印籠  
盆ニ載セ

北 鉄楞仙

中 御手鑑一折歌仙  
盆ニ載セ

下 銅之獅子

ひすきの内 御葉茶壺

一 北表六尺縁六帖敷一番目壁本御奉行様御腰物懸居

御右筆座

一 台子一組 御茶具揃

御執付之間

一 北表高敷壁本御役、衆刀懸居

一 同所西表壁本丁子風呂居

御番所

一 御床 御掛物一幅梁高筆  
活花

御着替所

一 御床 御懸物一幅周信筆  
活花

御書院

一 御床 御懸物二幅僧牧溪筆  
対立花

御違棚

上 御手卷一軸劉松年筆  
盆三載せ

中 鏡 硯屏

下 御料紙箱

御茶之間

一 台子一組 御茶具揃

樂之間

一 南壁本大小掛床下御奉行様御腰物懸居

一 十間之間襖間之本御役、衆刀懸居

内炉之間

一 御床 御掛物一幅永德筆  
銅之岩組

一 同所北表壁本台子一組 御茶具揃

御鎖之間

一 御床 御懸物一幅益王筆  
活花

押板

上 執木  
喚鐘  
弘子

裏御座

一 御床 御掛物一幅秋月筆  
活花

五月

乾隆五十七年壬子横目付、衆年頭御祝儀御申入之時

御座飾

南風御殿

下 硯 筆架 筆  
水瓶 墨 料紙  
硯屏 筆洗

一 御座 御懸物一幅西崖筆山水之絵松之一色  
御違棚

南 活花

中 御手鑑一折歌仙盆ニ載セ

下 御嘉例

北 堆朱御印籠盆ニ載セ

ひすきの内 (欠)

御右筆座

一 台子一組 御茶具揃

御執付之間

一 北表高戸之下壁本刀掛居

一 同所北表壁本丁子風呂居

御番所

一 御床 御掛物一幅孫億筆花鳥之絵雪松

御着替所

一 御床 御掛物一幅常信筆富士之絵乗老子

御書院

一 御床 御懸物一幅雪舟筆寿老人之絵雪松

御違棚

上 御手鑑子昂筆

中 沈箱

下 御嘉例

楽之間

一 南表壁本大小掛床

内炉之間

一 御床 御掛物一幅永徳筆唐子之絵銅之獅子

一 同所壁本台子一組 御茶具揃

御鎖之間

一 御床 御掛物一幅古法眼筆山水之絵活花

一 押板

上 喚鐘 右 執木

下 銅之岩組

裏御座

一 御床 御掛物一幅秋月筆梅月之絵活花

正月

乾隆五十七年壬子横目付、衆首途申入之時

御座飾

南風御殿

一 御床 御懸物一幅呉坤筆  
虎之絵立花一瓶

御違棚

南 堆朱御印籠  
盆ニ載

中 御手卷一軸美父仇英筆  
盆三載

北 青磁 硯屏

下 銅之獅子

ひすき之内 御葉茶壺

御右筆座

一 台子一組 御茶具揃

御取付之間

一 北表高敷之下壁本刀懸居

一 同所北表壁本丁子風呂居

御番所

一 御床 御掛物一幅孫憶筆  
花鳥之図活花

御着替所

一 御床 御掛物一幅永徳筆  
唐子之絵牛乘老子

御書院

一 御床 御掛物一幅西崖筆  
山水之絵活花

一 御違棚

上 御手鑑一折子昂

中 沈箱

下 銅之岩組

樂之間

一 南壁本大小懸床

十間之間

一 南壁本刀懸居

内炉之間

一 御床 御掛物一幅常信筆  
下銅之獅子

一 同所壁下台子一組 御茶具揃

御鎖之間

一 御床 御掛物一幅古法眼之筆  
山水之絵活花

一 押板

上 右 執木  
中 喚鐘  
左 払子

下 硯箱  
奉書紙

裏御座

一 御床 御掛物一幅秋月筆  
花鳥之絵活花

五月

乾隆五十五年庚戌御奉行渋谷喜三左衛門様御役々衆暑氣御見舞之時

御座飾

御鎖之間

一 御床 御掛物一幅探幽筆活花

一 押板

上 喚鐘

下 貝摺御料紙箱

左 執木

裏御座

一 御床 御掛物一幅秋月筆活花

内 炉之間

一 御床 御掛物一幅周信筆銅之獅子

一 同所北表壁本台子一組 御茶具揃

御書院

一 御床 御掛物一幅平山筆活花

一 御違棚

上 御手卷一軸幽泉筆盆二載せ

中 貝摺沈箱 下 銅之岩組

樂之間

一 南表大小掛床下御奉行様御腰物掛居

御茶之間

一 台子一組 御茶具揃

南風御殿

一 御床 御掛物一幅王翬筆貝摺硯屏

一 御違棚

上 御手鑑一折子昂筆

南 堆朱御印籠

下 銅之獅子

十間の間

一 南表壁本役々衆刀掛居

御番所

一 御床 御掛物一幅沈宗叙筆硯屏

御着替所

一 御床 御掛物一幅常信筆活花

七月

乾隆五十七年壬子御奉行平田孫太郎様御役々衆寒氣御見舞之時

御座飾

御鎖之間

一 御床 御掛物一幅古法眼筆活花

一 押板

上 喚鐘 左 執木

下 貝摺御料紙箱

裏御座

一 御床 御掛物一幅秋月筆活花

内炉之間

一 御床 御掛物一幅常信之筆銅之獅子

一 同所北表壁本

台子一組 御茶具揃

御書院

一 御床 御掛物一幅唐寅筆活花

一 御違棚

上 御手卷一軸幽泉筆盆ニ載セ

中 貝摺沈箱

下 銅之岩組

樂之間

一 南表大小掛床下御奉行様御<sup>(横)</sup>掛居

御茶之間

一 台子一組 御茶具揃

南風御殿

一 御床 御掛物一幅章声筆貝摺硯屏

一 御違棚

上 御手鏡一折子昂筆

南 堆朱御印籠

下 銅之獅子

十間之間

一 南表壁本役、衆刀掛居

御番所

一 御床 御掛物一幅孫億筆硯屏

御着替所

一 御床 御掛物一幅益信之筆<sup>(次)</sup>

十二月

### 御書院并南風御殿御床飾

#### 御婚礼御祝儀之時御書院御床三具足飾

挿図(一)(次ページ)

一 御床御掛物三幅対掛中尊之前ニ折卓飾候也其真中くり方之上上ニ香  
炉前ニ香箱後ニ香匙火筋立居右之くり方之上ニ真之立花居左之くり  
方之上ニ鶴龜燈台図之通飾置候なり

一 中尊立花ハ三重之若松真之立花請流枝ニ天地和合之枝遣置候なり

一 両脇対花ハ二重之若松真之立花天地和合之枝遣不申候なり

一 付 三瓶共心ハ合せ不申直心也色類遣様ハ法之通なり

一 三具足真之立花居所ハ座敷之向様無構御床より右此方より向テ左ニ  
立申候なり

一 付 本文之通御飾仕候も不苦候哉

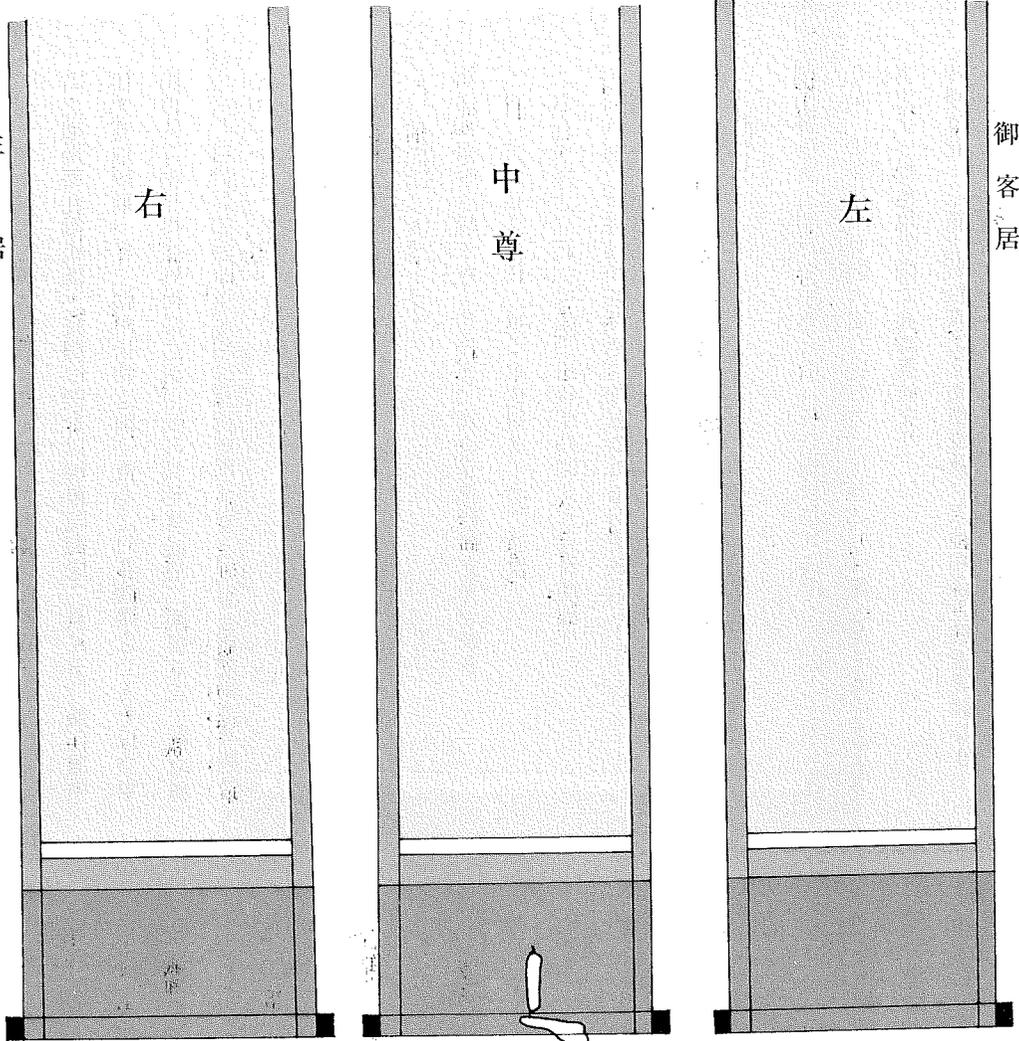
一 御書院御床者左上ニ而真之立花者卓之右之方主居なり

一 両脇対花居候花台ハ七角台平目を前ニなし居置候なり

(一)御婚礼御祝儀之時御書院御床三具足飾

御客居

主居

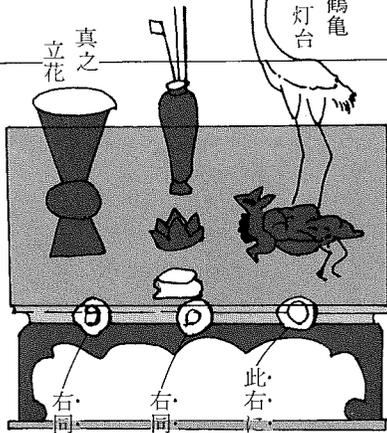


二重之直心



立花

真之



鶴龜  
灯台

二重之直心



角は後

手前  
平目  
花台  
七角

此右にくり方  
有之候

付 角を前なし候方も有之候いつ連を本式ニ而候哉

右之通御婚禮御祝儀之時御旧例を以御書院御床三具足五ツ飾仕置申候尤聳取嫁取ニ者二幅対掛物之前ニ直心之対花陰陽之心入を以立申由書物ニ相見得候処何様之訳ニ而三具足飾候哉二幅掛立花二瓶立候儀少し略儀之体ニ而重キ相付三具足飾たるニ而可有候哉両様共難取究候いつ連を本式ニ而候哉

### 同時南風之御殿御床飾

挿図(二) (次ページ)

御床御掛物壹幅三重之若松合せ真之立花壹瓶立合せ候事

付 天地和合之枝ハ遣不申色類遣ハ法之通也

右合せ真之立花ニ壹幅之掛物置候法式も可有候哉

◎右合せ真之立花仕御掛物壹幅掛候法式も可有候哉

### 御婚礼為御祝儀御奉行様御招請之時南風御殿御床三具足飾

挿図(三) (34ページ)

御床御掛物三幅対掛中尊之前ニ折卓飾候也其真中くり方之上中ニ香炉前ニ香箱後ニ香匙火筋立居右之くり方之上ニ真之立花居左之くり方之上ニ鶴龜燈台図之通飾置候なり

一 中尊立花ハ三重之若松真之立花請流枝ニ天地和合之枝遣置候なり

一 兩脇対花ハ二重之若松真之立花天地和合之枝遣不申候なり

付 三瓶共心ハ合せ不申直心也色類遣様ハ法之通也

一 三具足真之立花居所ハ本勝手ニも左勝手ニも座敷之向様無構御床よ

り右此方より御床ニ向テ左ニ立申なり

付 本文之通御飾仕候も可相濟候哉

一 南風御殿ハ右上之御床ニ而真之立花ハ御客位表なり

一 三具足諸飾之儀ハ当時書院向ニ者飾り不申神前仏前ニ用得候与書物ニ相見得候

付 諸飾ハ何之場ニ相応仕候哉

右御書院御床同断

### 同時御書院御床飾

挿図(四) (35ページ)

御床御掛物式幅対掛二重之若松真之立花式瓶立合二幅之中ニ中央卓居上ニ香炉下ニ活花仕候なり

右之通御旧例ニ付式幅対ニ立花二瓶中ニ中央飾候御婚礼御祝儀之時二幅対ニ直心之対花ニハ中央無之由書物相見得候尤常ニ御祝儀之時退心之対花ならハ中央飾も仕候与前文相見得候兩様共本式ニ而候哉

### 御婚礼御祝儀並常ニ御成之時

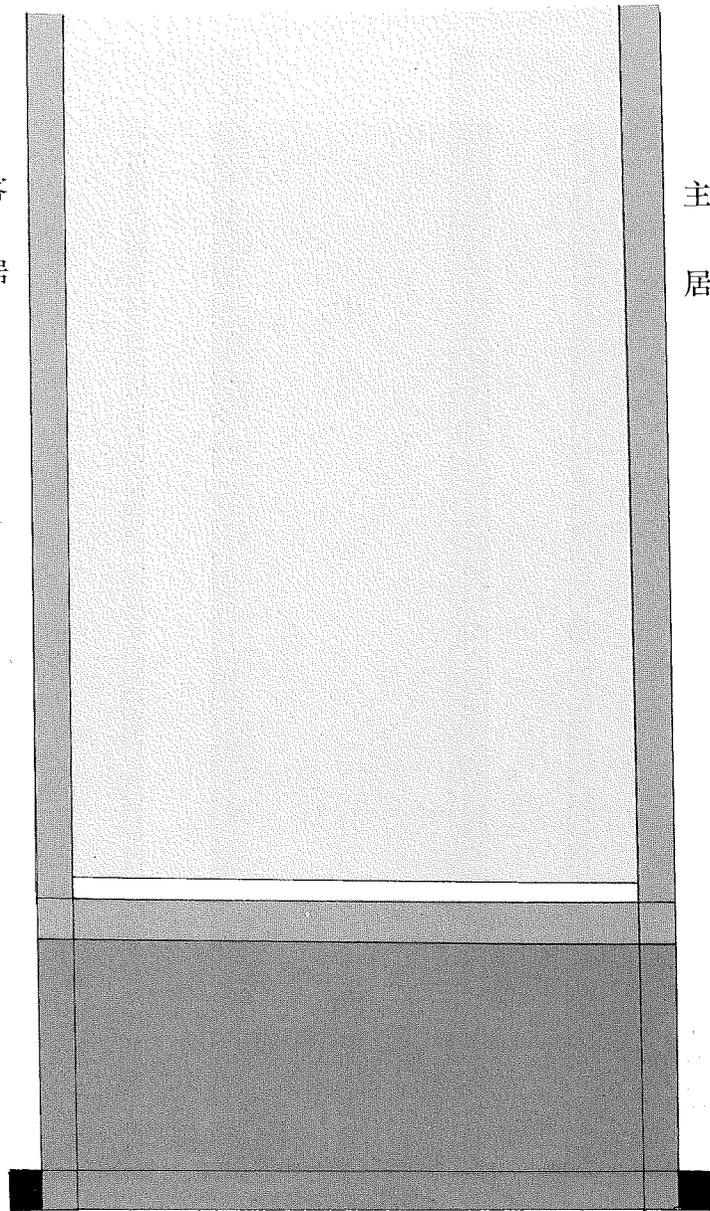
挿図(五) (36ページ)

御床御掛物三幅対掛中尊之前ニ折卓其上中ニ香炉前ニ香合後ニ香匙火筋立右くり方之上ニ真之立花壹瓶左之くり方之上ニ鶴龜燈台飾候也

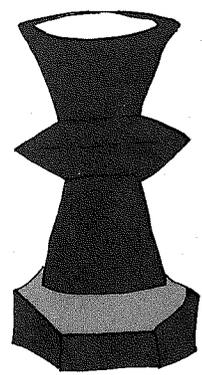
(二)同時南風御殿御床飾

主  
居

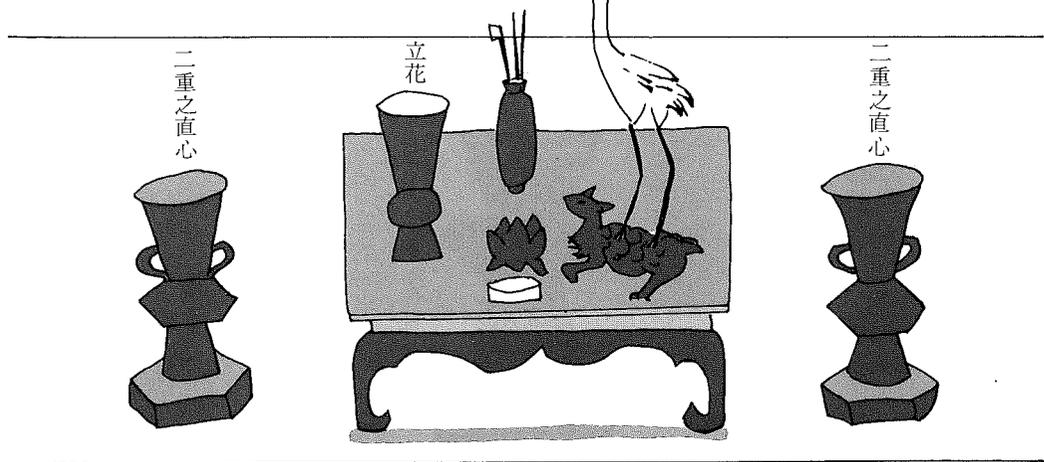
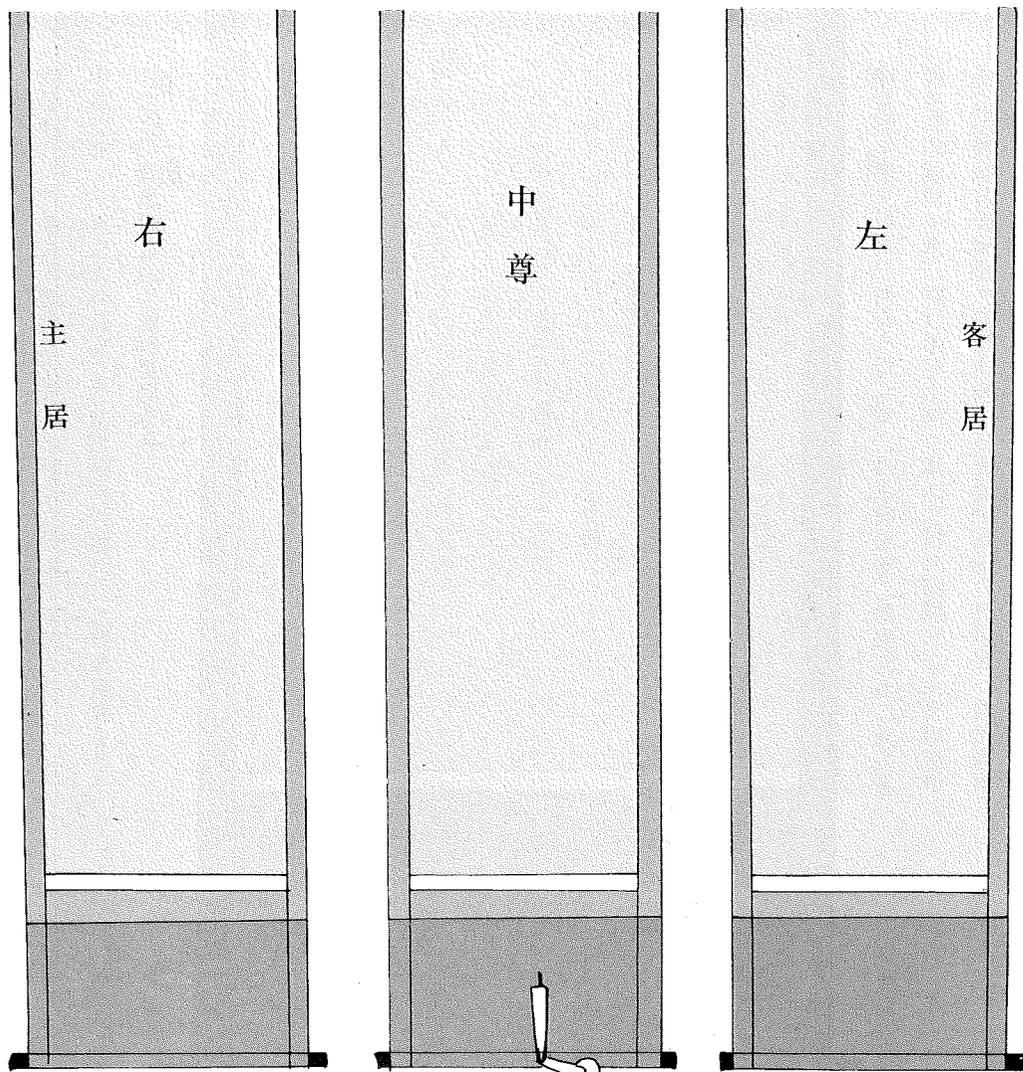
客  
居



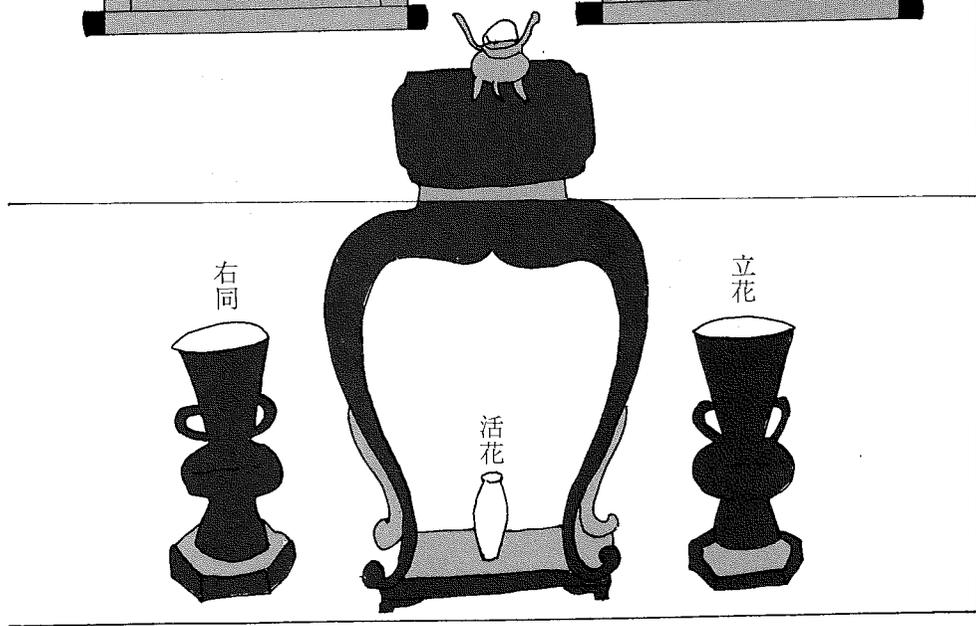
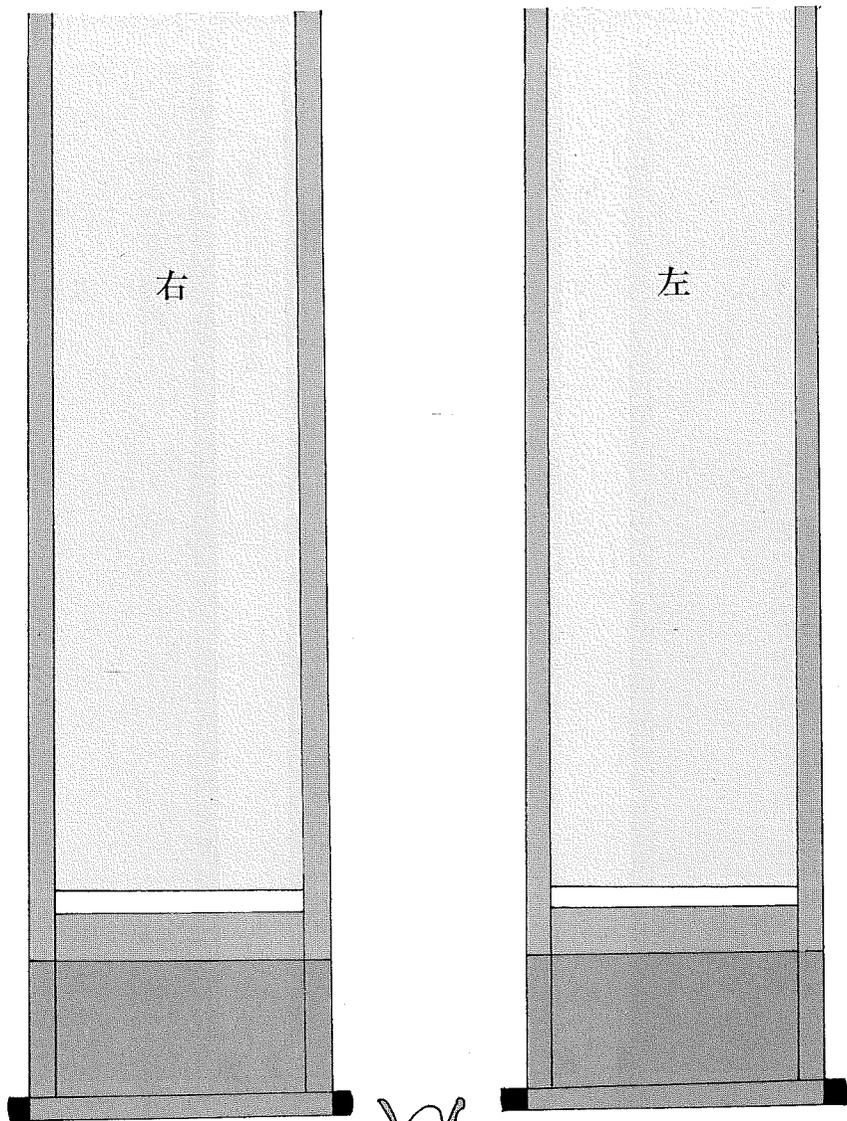
合シ真  
之立花



(三)御婚礼為御祝儀御奉行様御招請之時南風御殿御床三具足飾



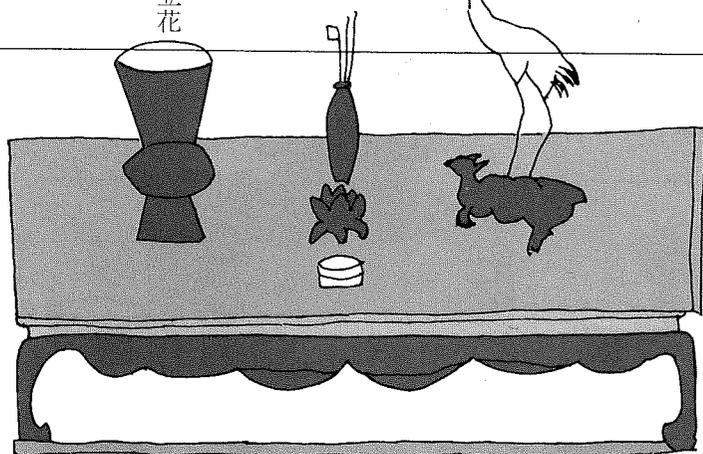
(四)同時御書院御床飾



(五)御婚礼御祝儀並常、御成之時



真之立花



付 三重之若松真之立花心ハ合せ不申請流枝ニ天地和合之枝遣置候

右之通三具足与申候て脇ニ对花なしニ茂飾申候哉御先例ニ者御書院御同然三具足飾置候然処三具足片飾ニ而候御婚礼御祝儀並常御成之時ニも相応仕候哉

### 御書院御床

挿図(六) (次ページ)

御床御掛物二幅掛直心之対立花立合候なり

付 二重之若松真ハ合せ不申請流枝ニ天地和合之枝色類遣ハ法之通候也

右之飾様現行不仕候へ共立花間書ニ響取嫁取之時二幅対ニ真心之対花本式与相見得候処何様之訊ニ而候哉傳与ハ相替従跡ニ三具足飾り仕来り候儀何様之訊ニ而候哉取分難相究候向後三具足飾之場ニ右之飾仕候而も不苦候哉

### 同時南風御殿御床

挿図(七) (ページ)

御床御掛物二幅対掛三重之若松合せ真之立花壺瓶立合申候事

付 請流枝ニ天地和合之枝無之色類遣法之通なり

御婚礼御祝儀之時御書院三具足或ハ对花杯仕候而南風御殿ハ文之通如何候哉

右之飾り御先例ニ者御掛物壺幅ニ合せ心之立花壺瓶仕候以後右体之節二幅対ニ合せ心之立花一瓶立候而も不苦候哉

一 「：申」に続く次文が削除され、朱書で訂正されている。以下同様。

「定法之由ニ而御書院並南風御殿ニ而も同断御飾仕候而も不苦敷候哉如何之事」↓候なり

二 付(削除。以下同様)

三 「：御」に続く次文字が削除され、朱書で訂正されている。以下同様。座↓床

四 後に続く次文が削除されている。以下同様

南風御殿ハ右上之御座ニ而客位方居なり

五角を前になし候而も用候哉如何之事

六 仕

七 次第↓体

八 右式ニも↓重キ相付

九 仕候哉ケ様之事共無案内ニ有之候得者此節委曲取分ケ被仰聞可被下候↓たるにて候哉兩様……………本式ニテ候哉

十 定法之由ニ而御書院並南風御殿ニ而も御同様ニ御飾仕候也↓なり

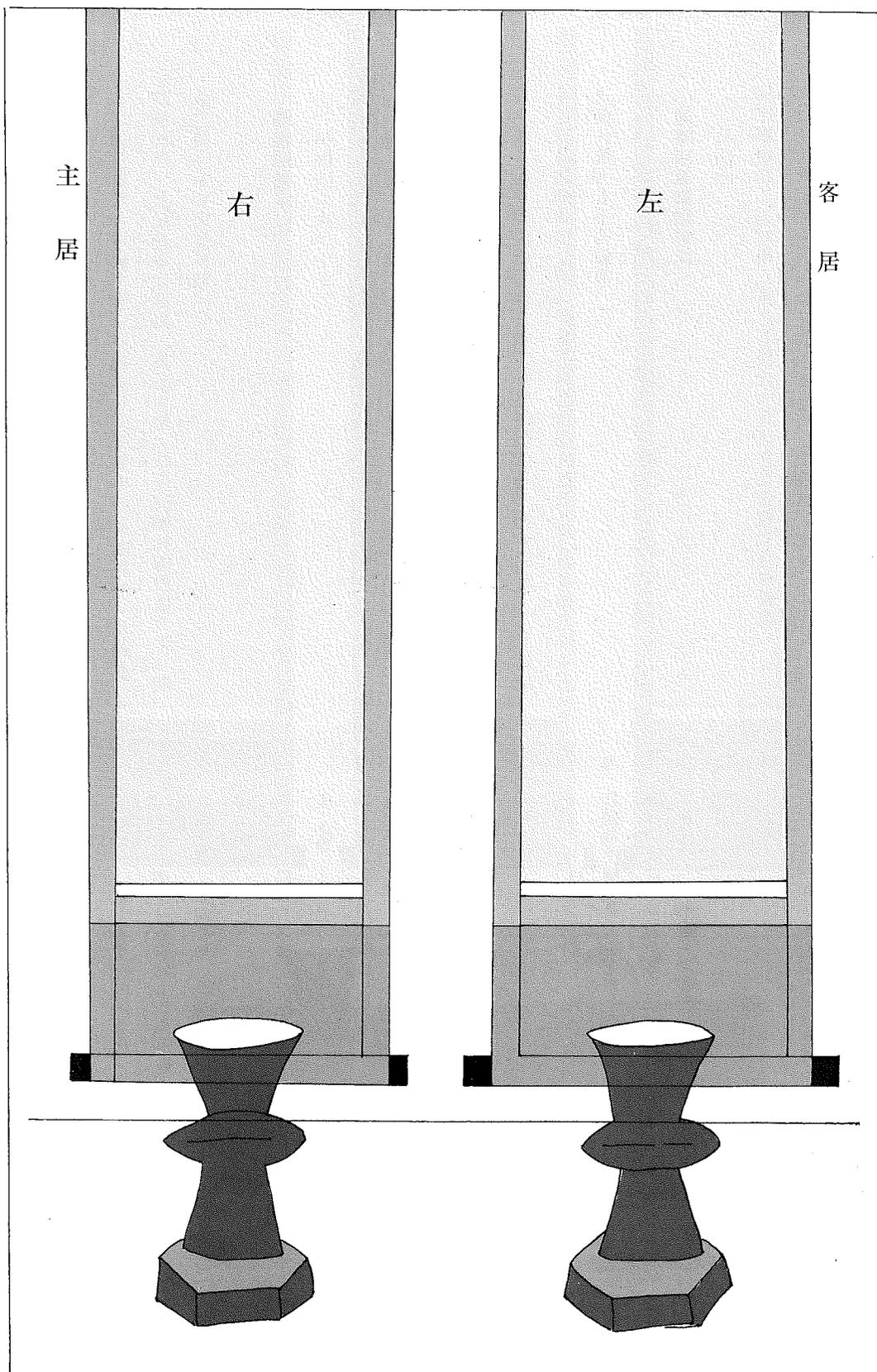
十一 付

十二 座↓床

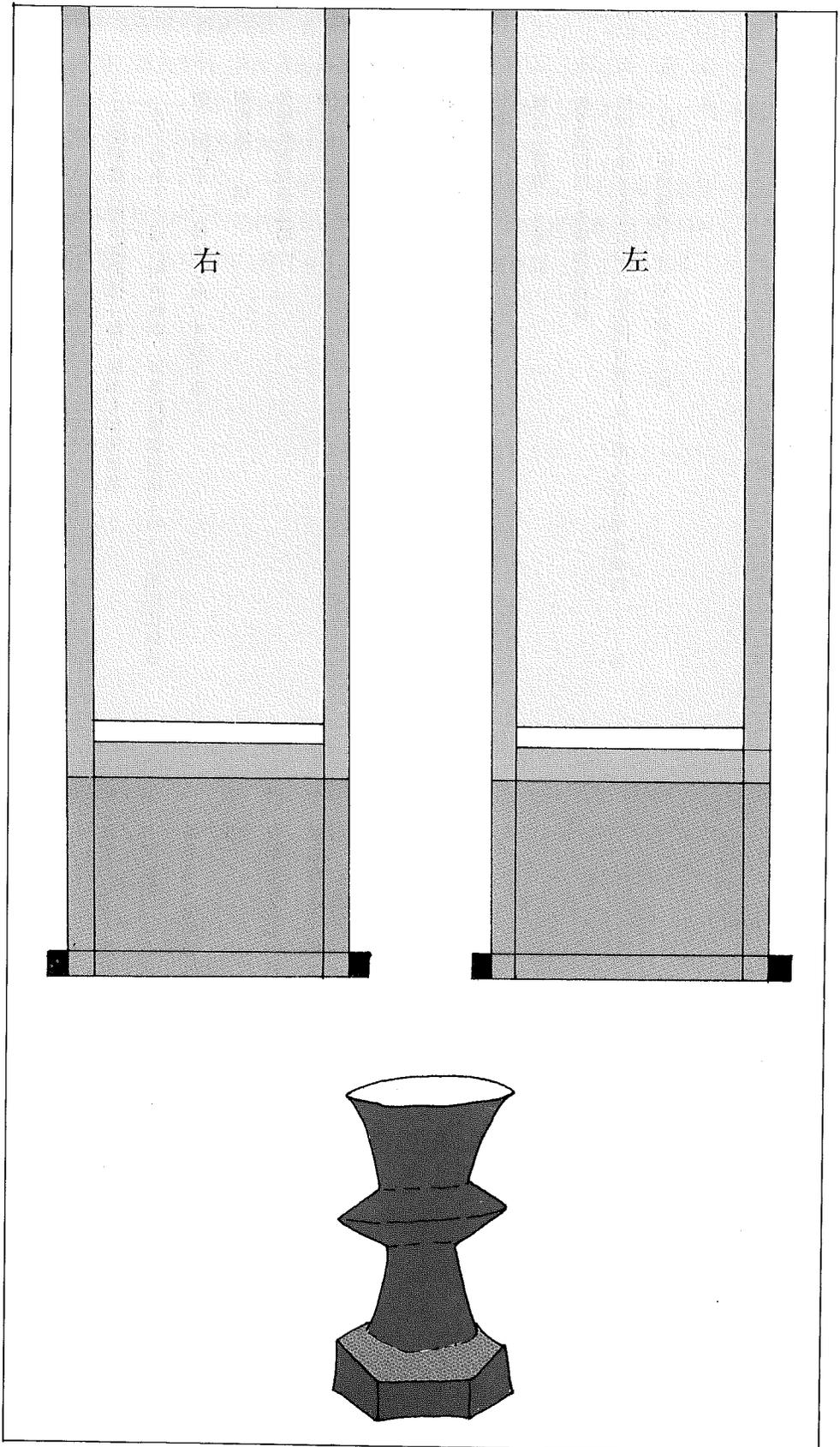
十三 この次の行から始まる次文が削除されている。

一 三具足諸飾之儀當時御書院飾ニ者無之候哉何そ之御祝儀ニ相応仕候哉

(六) 御書院御床



(七)同時南風御殿御床



一 三具足諸飾之儀御婚禮御祝儀並常、御成之時ニも御同様ニ飾り候哉

付 神前仏前之外ニ者用得不申候哉右之通御書院御婚禮御祝儀之時御書院御床御同様ニ飾り候而も如何候哉

是之処本文之通可相濟候哉 御奉行様御招請之時ニも相応仕候哉

四 飾ニ□□千々□候処↓向ニ者飾不申

五 御祝儀ニ↓場ニ

六 御婚禮御祝儀之時

七 飾

八 置候

九 真

一〇 候なり↓仕候なり

一一 仕来

一二 飾伝(書物)ニ者

一三 飾之被仰候↓書物相見得候

一四 被仰候是又委曲取分ヶ被仰聞可被下候↓前文相見得候兩様………哉

一五 上様 国頭親雲上より初而御成之時

一六 置

一七 且又

一八 中尊之前ニ折卓中ニ香炉前ニ香合後ニ香匙火筋立左右ニ真之対立花

仕候処兩様共↓御書院御同然………ニ而候

一九 二茂↓並

二〇 是又委曲被仰聞可被下候

二一 三

二二 三

二三 就夫ハ私共了簡計ニ而者↓儀何様………候哉

二四 御座候間以後右式之時ニ茂ニ幅対ニ真心之対花相用得候而も不苦敷

候哉是又委曲被仰聞可被下候↓候向後………不苦候哉

二五 本

二六 宜御座候哉↓如何候哉

二七 式之時↓体之節

二八 敷

二九 是又取分ヶ委曲被仰聞可被下候

沖繩県立博物館

沖繩県立博物館紀要

第 8 号

1982年 3月20日 印刷

1982年 3月31日 発行

編集・発行 沖 繩 県 立 博 物 館

〒903 那覇市首里大中町1の1

TEL (0988) 84-2243

86-4353

印 刷 (株) 丸 正 印 刷 社

〒902 那覇市国場349-3

TEL (0988) 54-8484(代)